5861
144
no.10

MATRPTO :LA SEMANTO: 1922

種蒔く人

行動と批判

第二年 第二卷 第七號

大正十年十二月一日（第三種郵便物認可）
大正十一年四月三日（印刷納本）
大正十一年四月一日發行（毎月一回五日發行）

BERKELEY
LIBRARY
UNIVERSITY OF
CALIFORNIA

四月號

種蒔き社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘗て人間は神を造つた。今や人間は神を殺した。造られたもの丶運命は知るべきである。

現代に神はゐない。しかも神の變形はいたるところに充滿する。神は殺されるべきである。殺すものは僕たちである。是認するものは敵である。二つの陣營が相對する。この狀態の續く限り人間は人間の敵である。その間に妥協の道はない。然りか否かである。

眞理は絕對的である。故に僕たちは他人のいはない眞理をいふ。人間は人間に對して狼である。國土と人種とはその問ふところでない。眞理の光の下に結合と分離とが生ずる。

○○○○○○○○○○○○○○○
○○○　○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○。○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○。○○○○○
○○○○○○○──世界の同志と共に！

種蒔き社

種蒔く人四月號目次

インドと日本（題言）…………………三和一男
反動政府へ抗議す（社論）…………………
土地と自由（評論）…………………三和一男
靑年指導者（小說）…………………津田光造
闇に生きる（小說）…………………松本淳三
その前夜（小說）…………………鳳逸平
彈き初め（小說）…………………松本弘二
人類苦（詩）…………………角園春之助
返逆の刻印（詩）…………………矢旗春二
嘘に就いての感想（感想）…………………金子洋文
吾等の要求する文藝（評論）…………………渡邊順三
過激法案に對する自己の立場（評論）…………………今野賢三
□批評──小牧──賢三──逸平──光造──賢三
世界の靑年に訴ふ…………………
□世界欄──地方欄──婦人欄──生活──發人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反動政府へ抗議す

資本をもたない、權力をもたない僕たちには自由がない。資本の支配、權力の政治、一般的に言へば、僕達に對して支配階級が僅かに許してくれてゐる自由は意志の自由、思想の自由、學問研究の自由、死の自由盲從の自由、饑餓の自由、失業の自由……etc である。

これ等の自由はたゞ彼等が被支配階級を魔醉させるための名目だけのものにあらざれば、支配階級の爲めに支配される自由に過ぎない。

ところがこの僅かの自由のうちで名前だけでも美しい前者は次第にその正體を現して來た。意志の自由はびつこをひきはじめた。思想の自由の猿轡を箝められはじめた。學問の自由は目隱しをされはじめた。今回反動政府が議會に提出した過激運動取締法案は此等を引つくるめて燒きすてやうとするものだ。それはあたかも日傭勞働者の乏しい米櫃をどぶの中へ捨てると同じ程度の無慈悲さである。僕たちにはたゞ盲從の自由と饑餓と死との自由が殘されるばかりなのだ。

だからといつてもとより僕たちは屠殺者に對して慈悲を乞ふものではない。米櫃をとりあげられたとて僕達は餓死以外の方法を知つゐる。併し僕たちは飢へたる兄弟の爲めに一應プロテストするのを義務だと思つてゐる。僕たちにはプロテストをすを機關も力もない。併し多數がある。團結がある。

無論兄弟の中には盲徒を選ぶ人があるかも知れない。けれどもそんなことはかまはない。彼等は眠つてゐるだけなのだ目がさめると彼等は僕たちだ。だから僕たちは虐げられた、飢へた兄弟全體を代表して反動政府とその少數の擁護者へ抗議する。屠殺所へ送られる牛がだまつてゐるからと言つて彼等が死を喜んでゐると思ふ人だけが僕たちの行爲を批難し得るのみだ！

反動政府は敵黨からの普通選擧の攻擊を擊退した勝に乘じて、野獸的攻擊に出るらしい。政府に對する反抗運動を根こそぎ撲滅する準備がつまり例の取締法案なのだ。それ以外に意味があると思ふのはお人よしの空想だ。貴族院議員その他の舊社會の名殘をとゞめてゐる人達は、これが國民の動搖を防ぎ君達の地位を安全にする手段と思ふかも知れない。しかしそれは幻影だ。君達の大部分は新興資本家階級によつて日毎に勢力を殺かれてゐる事實を見るべきだ。かつては君達は支配者であつた。併し今ではさうでない。彼等に君たちは取つて代られてゐるのだ。君たちの空虛な自負は彼等の惡辣な利用の餌食となるのみだ。彼等を代表する政府が安全にしやうと計る地位は君達のそれでもなければ國民のそれでもない。たゞ彼等、有產階級、ブルジョアのそれに他ならぬのだ。君達は歷史と現在の事實とをもつて明察しなければならぬ。

急進派代議士、新聞記者、自由思想家諸君は、大抵今度の取締結案の趣旨は尤もだが法案か杜撰で過酷であるといふ修正派らしく見受けられる。勿論今議會で此の法案が討案決定されるとすれば君達の見解が輿論の代表と認められて何等かの修正案か議會を通過することになるだらう。けれども君達も又幻影を見てゐる。君達は共產主義、無政府主義等の文字に捕はれて、これは君達自身の自由主義には影響しないものだと考へてゐる。それが幻影なのだ。彼等が嫌ふのは彼等に對する反抗なのだ。君達が彼等の趣旨に贊意を表してゐる間に彼等は君達に向けるべき刄をといでゐるのだ。ブルヨアジーが反動の第一歩を踏み出した以上君達は第二歩を豫期しなければならない。ジャコビン黨の覆滅はナポレオンの出現を見ねばやまなかつたのだ。六月一揆の慘敗は三世のクーデターを見ねばやまなかつたのだ！

だから僕たちは大多數の民衆の名に於て抗議する。今回の法案はその趣旨からして無茶だ。

東167810

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

今日のブルジョア文明國のどこにだつて各種社會黨が或る程度の結社を有し、機關新聞その他の方法によりて或る程度の宣傳をしてゐない國が一つだつてあるか？ それ等の宣傳と運動によりてのみ一定の期間民衆の自由は保護されブルジョアの專制は牽制されてゐるのだ。民衆に對し赤裸々に宣戰した吾が反動政府はそれ等の國に對してどう辯解できるか？ せめて外國の兄弟と同じだけの自由を與へよといふ民衆の要求に對して何と答へるか？

僕たちは前代未聞の階級專制を具象せる野獸的取締法案に對し、醒めたる或は眠れる多數民衆の名に於て、徹頭徹尾抗議するものである。覺めよ。兄弟よ。民衆よ！ そして僕達多數の利益を少數の壓制者の毒手から護れよ！

併し僕たちが抗議するのは、多數の僕たちが少數の彼等を恐れてゐるからではない。

僕たちはたゞ十分に覺めない兄弟のために、政府に一寸反省を求めるだけだ。

若し彼等が僕たちの抗議に耳をかさずにふりかざして來たとて、僕たちはこの挑戰に避易してはならない。挑戰に對しては常に應戰の準備が必要だ。僕たち一歩先きに醒めた兄弟は、併し僕たちは不死鳥だ。僕たちの死骸からは新しい僕たちが蘇る。しかも蘇つた僕たちは一層强い僕たちだ。僕たちの力は彼等の專制と比例して增大し、彼等の衰頽と比例して僕たちは勃興する。

土地と自由

三和一男

一

生活體である人間にとつて、最も根本的な問題は、何と言つても生活問題だ。尤もブルヂョアジーに在つては、この問題も殆んど空氣の如くPricelessな問題とされようが、プロレタリアートにとつては、違つた意味に於て、これが實に Priceless な問題なのだ。さればこの生活の決定的な脅威が、何等の反逆もなく永續すべきものでない位のことは、苟しくも多少でも理智を具へた人間の誰れにも肯定さるべき筈だ。

農民は久しい間、慘憺たる生活史を編んで來た。が、今やその行き詰つたことを朧げながら認識して、何處かにその活路を覓め始めた。それが最近頻發する小作爭議といふ形で現れたのである。これは社會進化必然のプロセスであつて、決して爲めにする者の言ふ如く外來思想の影響でもなければ、又主義者等の煽動によるものでも勿論ない。そこには爭議を惹起すべき經濟的社會的因由が嚴存してゐるのである。それは鷄が鳴くから黎明が來るのではないと同一論理で、鷄が鳴かうが鳴くまいが、時の進行は必然暗夜の次に黎明を齎らす。たゞ、鷄が時を報ずるので人間は眼を醒まされる。そして『黎明近けり』と意識するに至るのだといふことは確かだ。併し鷄が時を報じなくとも健康な人間は、夜が明ければ眼を覺して起きて活動を始めるものだといふことも亦確かだ。

この覺醒期に當つては、社會進化必然の方向に進ましむべきであるが、困つた事には一方、意識が明瞭になつてゐない未だ半意識の彼等を誤導する御用學者、御用指導者があり、他方意識が明瞭になつた先覺者に不合理な壓迫を加へる力が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あつて進化必然の進路を誤らせる。これは社會進化の過渡期に必ず現れる止むを得ざる罪過である。併しかかる力が働くと否とに拘らず、その進み行く可き途は經濟的に決定されてゐるのである。

この決定されたる必然のコースを進む時、これ等の外部的な力があつてこれを阻止しようとすれば、そこに衝突が起るその力が大であればある程その衝突は激烈な形をとる。

二

永い間殘虐な搾取酷使の下に生きて來た農民が、漸く自覺の第一歩に入つた時の痛烈なる慾求は、先づ、パンを得ん爲め、そして自らを奴隷的境涯から解き放たん爲め、土地と自由とに向けられる。一八六六年、ドン河の畔に端を發した農奴の反亂は、ステンカ・ラーヂンに率ひられ、『土地と自由』のモツトウを高く揭げて歐露を震撼した。爾來十五年・一八八一年二月二十九日、彼等農奴はアレキサンダー二世によつて解放された。併し解放された農奴は、名は農奴でなくなつたが土地も自由もない慘憺たる農民であつた。それから隱忍六十六有年の後・一九一七年十一月七日彼等は自ら土地と自由とを獲得する機會を、確實に摑んだのであつた。

更らにそれから五年を經た一九二二年一月二十七日、日本に於て賀川氏等に依つて組織された日本農民組合は、『土地と自由』の標語を揭げて起つた・即ちその日に機關誌『土地と自由』が創刊されたのだ。その『創刊の辭』なるものを見ると、宛然協調會の出店の觀があるのには全く失敗させられる。『今、二三眉唾の箇所を引いて見よう。

『地主を苦しめ、地主を倒せば、小作人が良くなると思ふは大なる誤りである。地主あつて小作あり、小作あつて地主あるのである。互に協調し、相互扶助せねばならぬ。』といふ文句が短い文章の中に、二箇所も繰り返して說かれてゐる。これが資本主義擁護でなくて何であらう? たしかに地主あつて小作、小作あつて地主たには違ひないが、現代の社會運動は階級打破の運動ではないか。從つて刻下の農民運動の核心は地主對小作人といふ搾取被搾取の關係の撤廢を期するにあつて、農民組合の使命も亦ここに存して意義があるのではないか。

農業の生產物といふことを考へるならば、土地も農業に對する勞働力も、各々必要缺く可からざる生產の要素をなして

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

はゐるが、地主とか小作人とかいふが如きものが生産の必須條件をなしてゐないことは經濟學を持ち出す迄もなく、明かな事理ではないか。

『……先覺せる一地主が先般來自己所有の土地全部を小作人に分配したといふことを新聞に見たが、此點に於て多數大地主諸君に一考を煩し度いものである。』と、僕は寧ろこの文章の末節は次の修正されねばならぬと思ふ。即ち『この點に於て多數小作人階級の人々の熟考を煩したいものである。』と。

何んとなれば、それ等の所謂先覺せる地主が小作人に傳來の土地を分配することが近時頻りに傳へられるが、――それは決して分配をいつでも無償で土地を分譲するといふことではない――これによつて小作人は、更らに一層重荷を負はされるとなるからである。即ち今日少しく聰明なる地主は、實は土地を持て餘してゐるのである。爭議は頻發して小作料は減少するの一方である。地租及びそれに關聯して様々な附加税が要る。又面倒な土地の管理もしなければならないといつた工合で、土地資本に對する利廻りは漸次薄くなる傾向に進んでゐる。そこで、先きの見える地主は機會を見て小作人の希求して止まない土地を手離し、世間的に名聲を博しつゝ、高價な土地を賣つてそれを有利な商工業の投資に乘換へやうとするのである。一方、現狀に於てさへ生活を支へされない小作人が、世界でも有數な土地價格の高い日本の現狀で、法外な時價で土地を手に入れて、一旦自作農になつたとしても、國税や、地方税や、利子或は年賦償還金等を怎うして捻出することが出來るであらうか。土地からの生産物の價がこれ等の負擔をなして、更らに一家の生計を維持するに堪えないことは明白である。それは現在の自作農――從前負債もなかつた自作農――が如何に苦勞しても、その地位を保ち得ずして小作農に轉じつゝある統計上の數字が、この消息を最も雄辯に物語つてゐるではないか？果して然らば、一旦土地を手に入れて自作農となつた彼等も、權花一朝の夢、忽ちにして今度は最も不利な條件を以て、その土地を手離さゞるを得なくなるであらうといふことも亦、明らかに豫見し得るではないか？されば彼等のかゝる態度は、これを意識してゐるにせよ或は意識してゐないにせよ、困窮せる小作人を導いて一層窮地に陷れる結果を齎すものと言はざるを得ない。

『農民は概して素朴である。なか〳〵に動ない。その代りに若し惡しき指導者が、彼等小作人の內に入り煽動するならば

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

夫こそ農村をして取返しの付かぬ混亂に陥れるものである。」と。一體『悪しき指導者』とはどんな種類の人を指して言ふのであるか？ 勿論『農村を取返しのつかぬ混亂に陥れる』やうな『煽動家』は悪いに相違ないが、現狀維持にこびり附いて、眼前の悪に面をそむけて他人を欺く者は、一層悪い指導者ではないか！

前の引用句に續いて『既に一二斯かる人々が農村に入込んだとの噂を聞くが我々は此點に就て心せねばならぬ。』と言つてゐる。が、この日本農民組合の如き農民の眞の味方らしい假面を被つた資本主義擁護の農民組合運動の指導者こそ、極力排撃せねばならぬ。

三

政府提出の『過激社會運動取締法案』は、今、議會の問題となり、社會の問題となつてゐる。而してその大勢を見るに、用語字句の末に於て様々の議論が戰はされてゐるやうであるが、大體に於て、提案の精神には贊成者が多いやうである。勿論一部には、甚だ不都合な時代錯誤の立法であるとの非難の聲も擧げられてはゐるが、結局字句の修正の上通過は先づ確實らしい。

果してこの法律實施の曉に、謙遜な人間的要求である農民や勞働者に關する諸運動が、一たまりもなく鎭壓されて了ふものであらうかどうか、社會進化の必然が不必然に化するかどうか？ それは將來に向つて時をかさなければならない。時間の進行のみこの問題を解決する。

『一寸先きは闇』と言はれる通り、未來は測り難い。併し過去の事蹟に徴して未來の計を立てるのが、思惟の生活を有する人間の特色だ。而して過去の史實は――秦の始皇や、獨のビスマルクを引合に出す迄もなく、――人間は如何なる犧牲を拂つても、暴虐なる壓制搾取をその儘忍容するものでないことを明示してゐる。

今、農民はあらゆる經濟的搾取からの解放を要望してゐる。土地と自由を希求してやまない。而してこれ等當然なる人間的要求を一片の法律と、警察的取締によつて威壓しようとしてゐる。けれども、生活の脅威は法の脅威で相殺されるものではない。況してこの人間的要求が打ち消されようとは考へられない。さればこの過激社會運動取締法それ自身が過激

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

且つ暴虐ではないか。

水の流れを堰き止めてはならない。道を開かなければならない。農民や勞働者の要求を合理的に滿足せしむべき、從つてかゝる法規や取締の不必要に歸すべき根本問題は、社會の現實に耳を塞ぎ眼を覆はざる限り認識さるべき筈だ。そこにのみすべてを解決する曙光は耀いてゐる。

久しく虐げられた農民が、土地と自由とを得て眞に人間らしい幸福な生活を營み得る日を招來すべく、今は相互協力を要する秋である。而してその日の實現さるゝ迄は何者もこの要求を彼等の心から奪ふことは出來ないであらう。

――一九二二、二、二五――

青年指導者

津田光造

其頃の農村では、何處でも青年會を設けると云ふ事が、一つの流行の樣に騒がれて居た。それ迄でも篤志な青年は自然の要求に促されて、殊更に他人の指導を受けないでも、夫々自分の境遇に應じて、學事に志す樣な氣分は一般に動き出して居たのであつたから、斯う云ふ騒ぎに乘じて、村々に適當な指導機關を設け、適當な指導者を置く事が必要になつて來た。さう云ふ場合であつたから、教員であつた村山は、厭でも青年指導者の位置に立たなければならなかつたのである。そして彼は事實、彼の仲人親となつたその村の村長から、「近頃村の青年の氣風が頽廢して、遊廓通ひをする者が段々多くなる樣な傾向があつて困るから、青年會の方で、君が中堅になつて骨を折つて貰ひたい。」と云ふ註文を受けた。之は村山に取つては大變難有迷惑な註文であつたが、丁度彼は、この村長が要求する事とは別の意味であつたが、青年の生活が（彼自身青年であつたから尚更）氣になつて居た時であつたから、さう云ふ柄に無い仕事までも序てに引受けて、青年に對して働らきかけなければならない樣な心持になつてしまつた。そして彼は何時か村の青年會建設の主腦者になつて居た。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

斯うなると、彼は青年に對して段々責任が重くなつて來て、それに、村の人達が彼を歡迎し、彼に期待を持つて居て與れる好意にも酬いなければならない様な心持も動いて來たりして、彼には何より大切な家庭的享樂も讀書の要求も、大方は犧牲にして、青年會の事に本職の餘暇を擧げて費さなければならなくなつて來た。實際、彼の自然の心の狀態に於ては人間らしく、〳〵、と動きかけて居たのであつたが、そして師範學校で、師範らしく、〳〵と、餘り窮屈に不自然に師範の型に嵌められて來た彼は、もつと廣い社會へ出たならば、出來る丈、人間らしく、〳〵と伸びようとする要求に燃えて居たのであつたが、さて、社會へ出て見ると、そこでは矢張り相變らず、彼は周りから教員らしく、〳〵と要求されるので、是では迚も息はつけないと思つた。教員らしく生活する事は、朝から晩迄、學校で立働らく丈でさへ、村山には多過ぎたのに、家庭へ來て迄、教員らしくしなければならないとあつては、彼は全く堪らないと云ふ心持になつた。

一體、この青年會と云ふものに對しては、この農村の青年や村の人達は餘り熱を持つて居なかつた。青年會と云ふものを設けて、何か際立つた規約や會場などを造つて、青年を野放しの狀態から組織的訓練の狀態へ入れようと云ふのが、それの大體の主意であつたが、村の青年は、自然の狀態に從つて、可なり組織的な訓練を日々の勞働に依つて、繰返して居たのであつたから、物好きな連中を除いては、地味な村の人達はそれに對して、大した氣乘りはしなかつた。只それが皆の問題となつて騷がれるのは、劃一的な訓練や軍國主義的な組織を好む、官僚や政府當局の意志がそれを强いて居たからであつた。それで事實は、彼等の日本國民と云ふ共通の觀念から、隣の家で國旗を立てたから、俺の家でも立てなければなるまいと思つて、それを立てるのと同じ意味で、隣の村でも青年會場が出來たから、俺の村でもそれを立てなければなるまいと云ふ心持で、雷同的な氣分で、それが騷がれて居るのであつた。さう云ふ者に對して、個人的に深い興味が湧き立たなかつたのは、獨り村山ばかりではなかつた。而も、彼はその組立ての責任者として立たなければならない破目に立つた。そして會場の事や會規の事が絶えず彼の氣に懸つた。それを設けた方が好いか惡いかさへ、確かな見當がつかなかつた。

會場に對する村の人達の意向は、何でも、村の方で費用の半額を負擔してやるから、青年の方で半額を負擔するが好か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

らうと云ふのであつだ。無財産の青年がたとへ一圓でも二圓でも、金を公共の仕事の爲めに出すと云ふ事は餘程彼等がその仕事に乘り氣になつて熱中して來ない限り、中々容易な事ではなかつた。實際こんな面白くもない、みす／＼自分達の自由な活動を制限する爲めの檻の樣なものを造る金を出す事に興味を持つ樣な青年は、極めて少數であつた。そんな餘分な金があり、そんな檻の中へ入る樣な時間があれば、彼等の大部分は、一日の辛い勞働から放たれて、遊廓へでも行つて、酒を飮みながら、若い女を相手に、春情を燃え立てながら、自由な唄を歌つて、湧き立つ感情の蕩醉に浸る事を考へて居た。

軍國的青年會は、町に近いこの田園の青年の無上の快樂とする遊廓遊びを、青年の氣風の頽廢と呼び、墮落と稱へて、それを根柢から改良しようとしたのであつた。併し斯う云ふ事を唱へる連中は何時も極つて、青年の爲めには何の役にも立たない形式的設備を嚴重にしたがる官僚とか、小作人の作得米の取立てを八釜しく云ふ地主とか、既に妻帶したから、さう云ふ遊びに興味を無くし、別に好い遊び所も無くなつた樣な青年であつた。親が小作人で是非共働らかなければ食つて行けない勞働一方で立たなければならない樣に運命づけられて居る青年、小さい時から餘りに多くの勞働を親から强いられて育つた青年、餘りに暗い勞働の壓迫に、絶へず反感を持つて育つた青年、その日常の勞働の中に、何等の快感も味へ得ず、感謝の念も起らない程不幸な境遇を持つた青年の多くは、實際、好學の精神所ではなく、只瘠せ犬の樣に人間の最も原始的な本能と飢渇を滿たし得る機會を求めて、ガツ／＼して居るのであつた。そして彼等の大部分は、さうした人間の最も原始的な本能と飢渴を滿たす時間も金も、そして將來それを滿たし得る確かな希望さへも十分には與へられない勝ちであつた。そして青年會は彼等の本能的享樂を、若き命の切實な要求を、而も、それを滿たす極めて僅かな時間内の生活を以て、青年の心の墮落と稱して、彼等をこの墮落から救はうとしたのであつた。併し、誰れが一體、純無垢な彼等の生命を驅つて、斯うした墮落の境地に陷れる樣な事をしたか？　誰れが彼等から音樂を享樂する、繪畫に練達する、文藝を鑑賞する教養の時間を奪つたか？　そして彼等に青年會場（實は彼等から人間的な活力、反撥力を去勢する場所）を建設する費用の半額を負はせようとする者は誰れであつたか？　村民の意向？　但し、斯うした場合に村民の意向は何時も

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

村の有力者の意向であつた。村の有力者と云ふのは、村長の生活を政治的に、經濟的に支配する實權を握つて居る地主階級の人達を意味するのであつた。

『それで、その會場の費用を吾々が負擔するとしたら、一體何う云ふ方法でやつたら一番好いだらうかね。――第一、諸君はそれを吾々が負擔する事を贊成ですか？』

斯う村山は自分の家で開かれた靑年總會の席上で、一坐の者に議案を提出した。

『これや、だけど建てねえ譯にや行くめえ。何處の村でも一般に建てるんだつてから、この村だけ建てねえ譯にも行くめえ。』

斯う云ひ出したのは、一昨年、村山がこの村の人となつた少し前に村の娘と結婚した地主の長男のTであつた。Tは結婚前までは、村でも有名な遊廓定連の一人であつたが、細君が出來てから、急に生活が一變して、所謂善良な靑年になつた男である。

『無論、建てねえで置ける譯のものぢやねえから、何うせ建てる位なら、一日も早く建たる樣な方法を考へた方が好いね。』

新う云ひ出したのは、まだ細君は貰はないが、自作百姓の後取り息子のMであつた。

『建てる事贊成！』

さう云つたのはMと同じ境遇を持つたYであつた。例の遊廓通ひの定連である小作百姓の次男三男の末子野郎共は、三四人隅の方へコデ寄つて、火鉢を抱へながら、『そんな事は俺達の關つた事ぢやねえ』と云つた風にして、クスリ、〳〵、何か囁き合つて居た。

『何うです、外の諸君で、異議のある方はありませんか。』

斯う、村山は訊いて見たが、一人も反對說を申立てる者はなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『異議が無ければ、皆賛成としませう。――ではその費用の方は、何うしたら好いでせうか。』と云つて、村山はお愛嬌に『皆金持の樣ですからね。』と附加へながら、遊廓定連の方を見ながら笑つた。それに連れて、皆がくす〳〵笑ひ出した。

そこで一坐が急に波立つて、此處彼處で、種々な物議がざわめいた。

『村では一體何う云ふ考へなんだらう？ 何うせ半額出して呉れるんなら、皆出して呉れたつて好ささうなもんぢやねえか、なアや。』

皆の物議の中から、不平らしく斯う云つたのは定連のUであつた。

『村では、青年が村の休みの日に報德をやつて、半日位づゝ皆して働いて、その金を積む樣にしたら、一年かせい〳〵一年半もしたら、出來るだらうつて、云つてた樣だつたなあ――。』

斯う云つたのはTであつた。彼は地主で同時に自作百姓であつた。そして親父のなくなつた後、家の身上を一切引つ構へて居る堂々たる戸主であつたので、村の集會の席へは何時も首を出して居たから、村の意向をよく知つて居た。

『チェッ、休みの日に働らいたら、俺達の休みは無くなつちまふぢやねえか。』

Uは忌々しげに噴き出す樣に斯う云つた。

『だからさ、その休みの日を利用して働らくのが報德だから、仕方がねえよ。』

Tは斯うUの不平をなだめる樣に云つた。

『その報德つて奴を虫が好かねえ』

Uは忌々しげに斯う云つて横をつん向いた。その云ひ方や、素振りが變つて居たので、ふき出す者もあつた。

『さうやつて大骨くそ折つて、俺等が働らいたつて、その會場は俺等のものになりやしねえよ。もう一年半も經つたら、俺等はこの村に居るか居ねえか分りやしねえや。』と云ふ氣持ちを語るに十分であつた、

『一體、報德なんて誰れが云ひ出しやがつたんだや。いやな事を考へ出したもんだな。』

定連のKはUに相槌を打つて茶々を入れた。一坐の者はそれに又苦が笑ひをした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

形勢が面白くなつて、決を取るのが面倒であると思つたので、村山は思ひ切つて云つた。

『何うです、諸君、大分出費難の聲が高い様ですから、此の問題は一時懸案として、當分會場は僕の家を、こんなに小人數には廣過ぎるから、この坐敷でも差支へ無ければ、それに充てる事にしては？』

『さうだなあ、さうして貰へば大變好都合だなあ。』とTが云つた。

『御迷惑でもさうして貰へば、一番簡單で好いなあ。』とMが賛成した。

之で一坐の意向はさうと極つた。

そして、議題は會規の事に移つて行つた。

『それから、もう一つ斯う云ふ問題があるんです。それは外でもない。吾々青年の風紀の問題です。――近頃青年、と云つても勿論或る一部の青年が盛んに新地へ行くと云ふ事ですね、これは固より今に始まつた習ひではない様ですが、今度青年會が出來るに就て、何とかお互の間に規約を設けて、さう云ふ習慣は無くする様にしたらば何うかと云ふ事ですね。諸君はそれに就て、何う云ふお考へですか。一つどし〳〵自分の意見を發表して呉れ給へ。』

それは愚劣な問題であるにしても、そして村山自身、村の青年の氣風が、それを今更こんなに事々しく問題にして騷ぎ立てなければならない程、墮落して居るとも思へなかつたのであつたが、兎に角、青年會の名に於て、彼は可なりの熱心を以て、これを皆に提議した。

例の遊廓行きの定連は、そんな事を、俺等がしようとしまいと、俺等の勝手だ、餘計なおせつかひだと云つた顔をして居る樣子が村山には十分見て取れた。それにしても、青年の風紀を今よりも一層好くしようと云ふこの提議に對しては、流石に純朴な青年の良心と意氣とは朧ろげにも動かずには居なかつたので、之に對して不服を申立てる樣な者は一人もなかつた。それで滿場で、この風紀改善の規約を設ける事は是認された。

『さうすると、是迄は遊廓通ひをする者に對しては、行きたい者は行けで、自然の方針に任せてあつたんだが、是からは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

青年會々員たる者は遊廓內へ足を踏み入るべからずとでも云ふ制約が設けられる譯になるんですか、それに異議はありませんか。』

村山は斯う云つて、迷惑さうな顏をして居る定連の方をちらつと見た。その時、いやに悄氣て不興げな顏をして默り込んで居る彼等の印象が、村山を酷く不愉快にした。『俺が遊廓へ行く必要も興味も感じて居ないのは、自分に性慾の發動を調節するN子といふ異性があるからの事だ。若しそれが無ければ、自分も亦この定連の樣に夜の街へ行く必要と興味とを感じるかも知れない。―― さうする可能性を十分に持つて居るのだから。』

さう云ふ氣持がその瞬間チラッと彼の頭をかすめた時、村山は、自分がいやに僭越な虫の好い人間である樣に思へて、自分の位置が妙にぐらつくのを覺えた。自分の氣持が自分の行爲を裏切るのを感じた。

『それや規約を設けた方が好いね。規約を設けて、それに從つて、お互の行爲を警戒し合ふ樣にしなけれや、迚も惡い遊びは止みやしねえよ。』

細君持ちのTは自分の過去の罪過を悔いるものゝ如く、斯う云つて、一も二もなく規約を設ける事の有益と有効とを主張した。定連も敢て之に反對する者は無かつた。

そこで、滿場一致で、遊廓遊び撲滅の制約が成立ち、『若し會員にして新地へ出入する者ある時は、本會は之に忠告を與へ、その忠告に服さざる者に對しては金五十錢の科料に處す』と云ふ意味の規約が可決された。

併し、この規約は勿論、定連の遊廓通ひに對して大した權威を持たなかつた。のみならず、彼等をして益々それに反抗的にする樣な反對の結果が現はれた。そして彼等を益々青年會から遠ざけてしまふ樣な事になつた。

村山の所へ來る青年の顏觸れは以前とは變らなかつた。斯う云ふ連中は無干涉に放つて置いても、每晚やつて來て獨りで何か本を漁つて來ては讀んだり書いたり、俳句をやつたり、算術を考へたりして居た。そして、青年會の名に依つて呼び寄せようとした連中は中々寄り付かなかつた。それでも十日に一度位は、義理で顏を出す樣な事もあつて盛に拳などを

やり散らして歸つて行つた。精勤者の中には、それは青年會を侮蔑する怪しからない行爲だと云つて憤慨する者が出て來た。そして交替で、毎晩の樣に新地を見廻はりに行く運動が行はれる樣になつた。

處が、何うかすると、この見廻りをする連中の中にも、危ない者があつた。

『オイ、見廻りに行つて、又一緒に卷込まれてしまふなよ。』

細君持ちのTはよくこんな事を云つて警戒したりした。實際に、見廻りに行つた誰一人として犯人を捕縛して來る者はなかつた。そこで、之ではいけないと云ふ事になつて、正會員、特別會員中二人宛が順番に行く事にして、行く時には會を代表する表徴に、會の名前を記した細の弓張提灯を必ず持つて行く事にした。

それでも定連の遊びは止まなかつた。精勤な連中は倦々して、こんな生ま溫い事を何時迄やつて居たつて、中々止みつこはないから、思ひ切つて手嚴しく、會規に依つて、犯人を罰しなければ駄目だと云つて、村山に訴へる者が出て來た。

『さうだね。犯人には氣の毒だけど、改革時代には犧牲者を出すのは止むを得ないだらうね。』

村山も自分の感情からではない、或る何者かの力に强いられる樣な氣持で斯う云はなければならなくなつた。

或る晩、青年會の提灯を持つた當番に依つて、犯行の現場を取押へられた例の定連の三名に對して、五十錢の科料を申渡すべき會合が催された。村山は云ひ悪い厭な思ひをして、又そこへ現はれた三名の者に、『吾々は會規の神聖を重んじなければならないから。』と云ふ事を云はなければならない立場になつた。

この事があつた翌日の晩、この三人の青年の親達が村山の家へやつて來た。彼等は夫々五十錢の科料を村山の前に突き出して、頻りに息子の醜行を恥ぢて、『誠に何とも申譯ない次第で――』と云つて、幾つも〳〵、頭を下げるのであつた。そして『あゝ云ふガシ野郎の事ですから何分宜しく御願ひ申します。』と素直に云つて、歸つて行つた。

彼等を見送つて坐に直つた村山は、たとへそれが彼等の我子の悪德に對する純情から出たものであるにせよ、何とも云へない厭な氣持になつた。彼等に奴鳴られ、悪罵された方が、一層氣持が好かつたであらうやうな、不快な悔恨の情に打

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たれるのであつた。そして、自分で造つた規約の繩で自分自身を縛つて居る馬鹿らしさが、身に應へた。彼の前に五十錢宛並べられてある三つの貨幣は、彼の空虛な權威の象徵でもあるかの樣に見えた。それは又、無垢の青年の一生に、取り返しのつかない汚點を印した悪德の表彰の樣にも見えた。

「風紀改善の代償として一圓五十錢――」

村山はそれを何う仕末したものかと考へた――。

『人間の罪（それは權力階級が無權力者の行動に對して、それが自家の立場を擁護する上に、不利益であると見做した場合に、勝手に附與した概念に過ぎないものである）が、貨幣に依つて償はれるか？　罪（？）を、否、一切の人間の行動を金で買へるか？　それは人間生活の原則として是認さるべき事であらうか？　人間の行動を金で買ふ事が正しい事であるならば、人間の生命を金で買ふ事も正しい事でなければならない。何となれば、行動は人間の生命であるからである。然るに、人間の生命を金で買ふ事は、人間を金の奴隷にする事である。人間は人間を奴隷にする權利があるか？』

斯う考へた時、村山は、彼れが青年會の名に依つて三人の青年に課した罰金の納付を、全々否定しなければならなくなつた。と同時に、さう云ふ不合理な事件を出來させる爲めに造られた規約を、一切否定しなければならなかつた。そして早速總會を開いて、三人の青年から徵收した科料五十錢づゝを、三人の青年に返還する事と、それを命令する權威としての規約を撤廢する事とを提議しようと決心した。

闇に生きる

松本淳三

鳴つた！　鳴つた！　いよ〳〵最後の、午後の六時の、誰も彼れもが今か〳〵と待ちかねてゐた終業合圖の大きい汽笛が、暗い谷の電錬場から、唸るやうに響きわたつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、今まで現場で（その電錬場や溶礦爐などのある谷からは五丁も離れた、ひろい海岸の埋立地）で、ぐた〳〵に疲れながら、でも仕方なしに重たい鑛石――金鑛、銅鑛、または鐵鑛、そのほか、石炭、コークス、赭ちやけた土砂のやうにざら〳〵してゐる亞鉛滓など、そうしたものの、すべての水揚げ（船から陸へ荷揚げすること）に從事してゐた、彼是千人近い男や女の勞働者たちは、一時にウワアヽ！と、破れ鐘のやうな聲を合せて、『鳴つたぞ！　鳴つたぞ！』『よしねえ！　よしねえ！』『なんだい馬鹿めが、とんちき野郎のおたんちんめが！』と、それは〳〵到底その場の實景を見たことのない人に取つては、とても想像さへもつかない、わづか一つの汽笛の音によつて、すべては苦役のドン底から救ひ出された、自由な體にやつとなることが出來た、心の底からの大きい歡喜を、夢中になつて張り擧げたのであつた。

ある者はずつとそれまで、すりむけた肩の赤味が柘榴のやうに爛れて來るまで、擔ひつゞけに擔ひつゞけた鑛粉だらけの大きいもつこを、此時だ！　と言はぬ計りに、強く地上へたゝきつけた。またある者は、小山のやうに積み上げられた鑛石の蔭で、その太い、長い、手油の滲み込んだ梱の柄にぐつたりとした體をもたせて、ボウッ！……とかすんで來る眼をつむつた。そのほか自棄になつてベッタリ地上へ身を投げ出すもの、岸から荷船へ、橋のやうに架け渡したあゆみ――それは幅が二尺位で、長さが四間もありそうな、可なり分厚い一枚板で出來てゐる。が、それが幾ら分厚いと言つたところで、その上を渡ればいつでもビョ〳〵する。けれども彼等は、水揚げ人夫は、そいつを丈夫な棧橋であると心得て、たえず二十貫、三十貫、ひどいのになると四十四五貫、擔ひ棒が三日にあげず折れると言ふほど、重い鑛石を擔つたまゝ、よし足元が危なかろうが無かろうが、そんなことには頓着ない。いや、頓著してゐては仕事にならない。で、どん〳〵身輕るに、またはひよろ〳〵疲れたなりに走つてゐる。――そうしたあゆみの上に、ぶらりと馬乘りに足を垂らして、そのまゝぐつと後ろへ寢そべり、いつまで經つても、いつまで經つても、身動き一つしないもの……

そうしたすべての、誰も彼れもが、今や暗い夜明けの六時から働き續けた、烈しい勞働の最後の時間が、やつとブウッ……とやつて來たのを、どんなに難有いと思つたか？　唸めき聲と罵しる聲との、すべてをごつちやにした手のつけられない喧噪が、暫らくの間そこに續いた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が、眞に吾々貧しい者が心の底から嬉しいと思ふ場合は、極めて稀有で、しかも瞬間その欣びは消えてゆくのだ。

事實、それほどに深く感じた彼等の欣び、彼等の得意も、時間にすれば僅かに五分か僅かに十分、何にしても短い間のことであつた。何處からともなく押し寄せて來る暗い空虚な沈默は、徐々に深く彼等の間に、胸の底まで食ゐ込んだ。そして極端な疲勞とひもじさ——それは鋭い、恐ろしい力と勢ひで强迫して來る——彼等はいちやうにそれを感じた。そして以前の——歡喜——吠哮、罵しり合つたり、うめき立てたり、そんな手合ひは、たゞの一人も無くなつた　そして直ちに自分々々の汚い長屋へ——彼等は急に家を思つた。同時に、まるで言ひ合し、諜し合せたもの丶やうに、みんながみんな沈默りこくつて、而も互に、かち合ふ視線をさけやうと／＼する暗い眼つきで、そろ／＼歸りを支度しはぢめた。

が、そうやつて再び自分で、自分が投げ飛ばして置いたもつこや熊手や、あたりかまはず脫ぎつぱなしにして置いた汗くさいシヤツや、その外色々の仕事道具を、いち／＼丁寧に探し出してみると、何だか今まで聲を限りに、わめき立てて居たことが、お互に馬鹿らしくてたまらないと言ふ風であつた。が、然しすぐに次の瞬間——眩暈がするほど二重の力で威嚇して來る、烈しい疲勞と烈しい空腹、——事實はすべてを、すべての思ひを、彼等に暫らくも許さなかつた。『早く歸えろう、早く歸えつて、何でも腹一杯食はねばならない。』

彼等は自棄に道具を擔つた。そして如何にもだるさうな、如何にも痛くて、重さうな腰や足つきを見せながら、まるで日暮の墓場へ續く聲の無い葬式の行列のやうに、ぞろ／＼と歸りはぢめた。

俺はその時、そうした仲間から一人離れた。そしてさつきの、大きい汽笛が鳴り出すまで、一生懸命に割り續けてゐた硬い、銅鑛石の散らばつてゐる傍の地面に、ぢつといつまでも倒れてゐた。

時々眼が——すべての意識が、遠くへ遠くへ眩んでゆくのが、自分で自分に恐ろしいほどはつきり解つた。そんな時には、自分の體が世界と一緒に、ぐうツ……と一つの、眞つ赤な渦巻きになつたと思ふと、何物をも掴むだけの暇がない。掴む何物も其處には無い。直ちに無限の高い處へぐん／＼釣り上げられてゆく……と、忽ち今度は、深さの知れない、底

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の見へない、まつ暗な、あるひは眞つ赤な、奈落へ向けて落下してゆく……そうした眩暉、それが絶えず俺を見舞つた。のみならず、たま〳〵眩暉がやんだ時でも、熱い〳〵地面のほてりが、燒けた鐵板のやうなほてりが、キツパリと汗や油で乾からびた頰や膀へちり〳〵する。肩、背、首筋、腕、腰、內股、ずつと足の爪先までもが、まるで自分のものだとは思へないほど、疼く、しびれる。おまけに胸から咽喉へかけての呼吸氣管が、すつかり乾いて、わづかな呼吸にも痛みを感じた。

が、とにかく今日も暮れて了つた。呪ひながらも暮れて了つた。そしていよ〳〵待ち兼ねてゐた夜が來るんだ。奴隷のやうな俺にとつての、たつた一つの自由と氣儘の、どうしやうと勝手な夜がやつて來るのだ。……それを思ふと、それ程な疲勞と苦痛の底にあつても、幾分嬉しい、慰めが無いでも無かつた。いや、今日の晝飯休みの時、ちやんとあそこで、あの試料場の便所の小蔭で、そつと約束をして置いた、いとしいあのこが、——同じ現場で、この海岸の埋立地で、毎日共々に働いてゐる若いおいそが、も少し待つたら、きつと此處へやつて來るのだ。一人でこわごわ……いや、嬉しそうにやつて來るのだ。……と思ふと、今更のやうに疲れた體も何だか急に元氣になる。ひもじさの爲めにぺちやんこになつて絕えずギユウ〳〵鳴つてゐた胃の腑も膨れる。何だか明るい、生々とした輕い氣持ちが、無限の彼方へ嬉しさうに翔つてゆくやうに思はれた。

俺はやがて體を起した。それから靜かに立ち上つた。そして今まで寢ころんでゐた一つの地面を中心に、わづかな周圍を行つたり來たり行つたり來たりし續けた。が、やがて、そうした仕草にも飽いて了ふと、今度は一つの、一抱えもありそうな大きい鑛石の上に腰をおろして、今か〳〵と彼女の來るのを待ちかねた。

その時、しづまり返つた遠い谷の奥の方から、絕えず送風機の音が聞へた。そしてその音は更らに遠い海の果てまで、また赫く染まつた夕陽の空まで、リズミカルに澄んで響いた。が、最早あたりにはその音以外に、人聲一つ聞へなかつた。たゞ遠いあちらこちらの、鑛石山の蔭から小蔭を、時々縫ふやうに見へては隱れる、ほの白いシヤツ一枚の人影が、それもたまに見へるばかりで、靜かに淋しい埋立地の日は暮れかゝつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

……と、暫らくしてから、ものの二十分も經つたところで、來た！　來た！　いよ〳〵、待ちかねてゐた彼女は遠く、その小さい姿を現はした。

ずつと向ふの、電錬場の谷と、こちらの海岸の中程に建つてゐる、バラック式の平たい建物——選鑛場の右手にあたつて、（彼女は時々、今日などは試料場の方へ廻つて、サンプル取りも手傳はされたが、もと〳〵その選鑛場の常傭であつた）城砦のやうに高く聳えてゐる亞鉛滓の下蔭から、そつと、いつもの、白手拭を冠つたまゝで現はれた。

陽に燒けた赫い、でも生々として艶のある、圓い顏の半分が、その手拭ひの下で微笑してゐる。そしてその微笑につれてゆるぐ唇から、白い前齒がちら〳〵する。素的に短い、膝までしかない洗ひ曝しの、伊豫がすりらしい飛白の筒袖を着た下へ、白地に黒で麻の葉つなぎの、大きい模樣を染め出した、しかしその生地は白いと言つても、ところどころ埃や土でよごれてゐる。そうした粗末な、脛までしか無い、短い腰巻きをつけてゐる。その上、紺の脚絆に、同じく黒い、土まみれになつたぢか足袋を穿いて、兩手には矢張り色のあせた紺の甲掛けをつけてゐる。そしてその甲掛けについてゐる細い、うす紅い紐が、だん〳〵と近づいて來るに從つて、それと明かに見へて來るのが、わづかに彼女の娘としての誇りを見せてる。

そうした一見みすぼらしい、が、如何にも粗野で愛くるしい、彼女は靜かに俺の眼の前にやつて來た。そしていきなり、恥しさうな光りをたゝえた、黒い瞳を大きく見張つて、

『待たんした？』

と、小さい聲ですり寄つた。

（おゝ、待つて居たとも。待つて居たとも。その眼をぢつと待つて居たのだ！）俺は石から腰を浮かせた。

と、二人の瞳はそこに出逢つた。そして互に嬉しさうに微笑を交はした。

が、すぐに俺は優しい調子で、

「ずゐぶんお前疲れたろうな？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

と、まづ何よりもそう言つた。と、

『いゝやなんの、あんたこそ疲れなんしたろうに……』彼女は心からの返事をした。

(可愛いゝ女だ！)たまらなくなつて、ぐつとその手を引き寄せて、その小さい唇にきつい接吻をしてやると、

『まあえ、人が見をるに！』

と、體を幾分後ろにねぢつて、耳の根までも眞つ赤になる。そしてすばやく、狼狽へた眼を四邊に配つたが、最早何處にも人影らしいものは一つも見當らないので、急にあまえた、氣まり惡るそうな微笑を浮べた。同時に小首を少しかゞめてそつとその甲掛けをした黑い手甲で、濡れた口元を拭いてゐる。

(何と無邪氣な奴だろう！……俺はお前の、その無邪氣さにたまらないのだ！)

再び俺は兩手をひろげた、彼女を胸に抱きしめた。なんにも言はない彼女の呼吸が、俺の胸板で熱く亂れる……と、汗や油でねちねちした腐と、埃だらけのくづれかけた結蝶返しの底から發する——いつも嗅ぎなれたあの親しい〳〵匂ひが、俺の鼻先を强くかすめた。

二人は暫らく無言のまんまで、心と心をしつかり結んだ。すべては、その結び合つた一つの心以外には、みんな一時に、この世界から消へ去つたやうに思はれた。

が、やがて互に體を離した。優しい微笑をやり取りした。そしてすれずれに肩を並べて、其處よりももつと靜かな、もつと人眼につかない、常から二人がいゝ逢引きの場所として、言はず語らずのうちに決めてゐた、沖の方へ——埋立地の出鼻の方へと足を浮かせた。そして鑛石の小山と小山の間を通つて、一先づ海岸に近づくと、今度はコンクリートで固められた帶のやうに平坦な岸を傳ふて、沖へ沖へと並んで歩いた。

その時、潮香を含んだ海の空氣が、さわやかに二人の頰と眼へさはつた。胸が輕るく心地よかつた、すべての苦しみ、すべての惱みをみんな忘れて、廣い安らかな大道をでも歩いてゐるやうな氣持ちがした。同時にかうした、平和な樂しい時」にいつまでも嵌まつて居りたい、夜が明けるまで歩いて居りたい——俺は沁々、そうした欲望を心に感じた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『なあ！ おいそ！ お前今夜も、岬の長屋へ歸えるのかい？』
コークスが黑山のやうに積み上げられて、いよ〳〵其處からはさしもに廣い埋立地の岸がつきる――牛のやうな岩々が折り重つて、その岩の間々に、打ちあげられた飴色の海の藻草や、白い貝殼などが散亂してゐる、その波打ち際まで歩いて來たとき、俺は靜かに女の肩へ手をかけた。そしてゆるやかな歩みを止めて、彼女の心を聞いてみた。――（彼女たちの棲んでる長屋は、そこから一里半も遠く離れた、淋しい岬に建てられてあつた。そして通稱『岬の長屋』と呼ばれてゐた。で、彼女が其處から仕事に來るには、毎日々々往復三里の道を歩いて通はなければならなかつた。だから烈しい一日の勞働がすんで、やつと夕方自由な體になつた處で、すぐに今度は、一刻も早く家への道を急がなければ、夜の九時が十時になつても、まだ夕めしを食べることさへ出來ないことがよくあつた）そんな具合で、早く家へ歸らなければ都合が惡るいか、それとも何處かで自分と一緒に一夜を明かすか、それを何よりも俺は最初に、いつものやうに聞いてみたのであつた。と、
『いゝや今夜あ、岬の船が來ましたんよつて、うちへいなんでもよがざんすに……』
彼女は如何にも、嬉しさうに返事をした。が、俺の耳には、そうした言葉の意味がはつきり解らなかつた。で、
『岬の船？』
と、重ねて訊すと、
『はい、今日のひるすぎ、岬の船が石炭を積んで這入りましたんに……』
その聲は何かの確信を含んでゐた。
『それぢやあ、その船でとまるのかい？』
『はい、船でとめて貰ひますんに』
『知つてる人かい？ ……その船のものは？』

はい，みんな知つた人ばかりですん。あにさんも居なさりますんに……』

『そうかい、それはほんとのあにさん？』

『はい、いちばん上のあにさんですんに！……』

――すべては解つた。すつかり解つた。俺はひそかに安神した。で、

『どの船？……見へるかい？』

と、海の方へ顔を向けると

『……あれ！……ずつとあつちの、いちばん沖の海運丸！』

彼女はこの時、黒い甲掛けの右手を高くさし上げて，遠い沖を指した。

U字形に深く入りこんだ静かな日暮れの海に一杯、幾十艘となく碇泊してゐる大きい、小さい船の彼方――いちばん沖の方に當つて、ゆつたりとその黒い姿を見せてゐる、二本マストの二十噸ばかりの、それは今夕餉の支度をしてゐるものと見へて、低い船尾の甲板から、ゆるやかに一條の青い煙を立ち昇らせてゐる、一艘の帆船であつた。

『それぢやあ，あの船だつたら，すぐに此處から歸えれるなあ……そんなら今夜あ、ゆっくり話していかねえかい？』

『……………』

彼女は沈默つて、ニツと笑つた。それから少し小首をかゞめて、如何にも氣まり悪るさうに、そつと襟前を両手で合はせた。

『いやかい？』

俺はすべてを、彼女は十分同意してゐるのだと知つてゐながら、囁くやうにそう聞いた。と、

『…………』

彼女はかすかに默頭した。しかしそれは同意の上での、包みきることの出來ない嬉しさを含んでゐた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

二人は並んで、手近な岩に腰をおろした。丁度夕陽は、遙るかに遠く海を距てたB市の背後の、高い富士形の山の上に赤く爛れて、今落ちかゝろうとする最後の光りを、海一杯にひろげてゐた。何處にも日中のやうな聲も音響もひゞかない。たゞ遠い彼方の谷の底から、夜業を續ける大きい送風機の唸りばかりが、たえず單調にひゞく計りで、しかしそれとても刻々に深くなりゆくこの夕暮の靜寂を、決して破らうとはしてゐない。まして視望をよぎる一つの船さへ、鳥の影さへ見當らない。ふだんからごく穩やかな內海である上に、今すつかり夕の潮が引ききつた磯の何處にも、波の音さへ聞かれない。全く靜かな、全く森嚴な、緊張しきつた淋しさが、すべての上にひろがつてゐた。

俺も彼女も、固い手を握り合はせて、この暮れてゆく靜かな內海、靜かな嚴かな大自然の前に、しばからは沈默を守つてゐた。

けれどもだん〳〵、時が移るに從つて(これは何と言ふ微妙にして不思議な心の變化だろうか?)自然々々に——暗い、恐ろしい憤怒と呪ひと、それにねばる寂しい惱みが、俺の頭を亂しはぢめた。

『……かうやつて俺は每日、おいそと逢つてゐる。人眼をしのんでひそかに逢つてる。そして如何にも平和に呑氣に、甘い氣持ちに醉つてさへゐる。晝の烈しい仕事も苦痛もみんな忘れて、全くいゝ氣になつてさへゐる……が、しかし眞面目に、よく考へてみるならば、何と慘めな、何と哀れな、俺たち二人の身の上だろうか? かうした樂しみに醉つてゐるのも、ホンの僅かな時間の間だ。あの太陽が落ちるとまもなく、晝のあらい仕事に疲れた、體は全く死人のやうに動けなくなる。……ひどいねむけに襲來せられる。そして明日は再び暗い朝のうちから——すべての自由とすべての權利を束縛せられた奴隸か機械か?……血汗と泥にまみれて終日働かなければならない體だ。嬉しいと思ふも瞬間、戀に醉つてゐるのも瞬間……明けても暮れても慌しい氣分と疲勞と、暗い呪咀に憑かれてゐるのだ……

……そうだ。たしかに、それはほんとだ。それは間違ひないことだ。生きてゐると言ふのはうはべで、その實全く死んでゐるのだ。ごみか、あくたか、石ころと少しも違つたところはないのだ。事實、彼等の、彼等の社會の、〇〇〇の犧牲にされてる。餌食にされてる。いくら本氣で稼いだところで、みんな彼等に搾り取られる。あばらの骨までしやぶり取

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

られる。だからいつでも、いつまで經つても、呪ひの呪ひの、破壞と反抗、恨らみに死にかけた心と體の……それ以外には何にもないのだ――俺たちのものと言つたら、それ以外には何にもないのだ………』

……俺は沁々、虐げられてる自分を思つた。踏みつけられてる自分を思つた。そして同時に、かうした今の社會と○○と、○○○をぶちこはすことの出來ない、今の自分の、俺たちの非力を嘆いた。

が、いくら一人で口惜しがつても、いくら俺たちが腹を立てても、今は信實、どうにもならない、訴へてゆく處もなかつた。たまに何かの機會を捉えて、誰かに細々と事實を並べて、よし訴へて見たところで、すべては鼻の先で冷笑されるか、おためごかしに宥められるか、それとも例の何とか主義者の、或ば勞働運動仲介業者の、食ゐものにせられる位か積の山……結果はちやんと解つてゐるのに、どうして助力を乞ひに行けやう?……と言つて、自らの爲めに自ら立つて、正義を叫びでもしやうものなら、俺たちよりもずるい彼等だ。野蠻な彼等だ。すぐに恐ろしい武器と法令――あらゆるもので威嚇してくる。つまみ擧げる ふんじばる。揚げくの果てには、暗い牢舍へぶち込むか『めんどうくさい!』たつたそれだけの理由で○を絞めつける。○○○○へつれてゆくのだ、……

(そうだ……今では……どんな當然も認められない。正義の價値は顚倒してゐる。いくら叫んでもすべては無益だ。すべては徒勞だ。○○○○! そのほかに行くべき道は一つもないだ……○○○○○、○○○○○○○○○○、こゝに……昔ながらの被征服階級……蒼ざめた呪咀のドン底に横はり うごきの取れない鐵鎖に繋がれて居らねばならない身の上だ!……)

俺は最早、それ以上考へてゆくに堪えられなかつた。(いとしい自分だ。不幸な俺等だ)、實に情なくてたまらなかつた。いや、そうした言葉で、とても言ひ盡すことの出來ない、憤怒と反抗――反抗の上に戰慄する呪咀――俺は心からブ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ル／＼震へた。

が、しかしそうした、自分のことを深く思へば思ふほど、俺と同じい、否、肉體的にも精神的にも、（俺と比べて）もつと弱い、もつと慘めな、おいその身の上を思はないでは居られなかつた。同時に、炬火のやうに燃え上つて來る强い强い憤怒を透して、一層彼女を愛さないでは居られなかつた。

（……そうだ。たしかに。呪はれてゐる俺だ！　お前だ！　二人は同じだ。同じドン底に喘いでゐるのだ。おゝ……いとしいおいそよ、俺も辛らいが、どんなにお前は辛らい寂しいことだらう…………）

が、やがて俺は口を開いた。

『……ほんとに靜かになつたなあ……全く靜かだ。……お前にもこの靜かな氣持ちが解るかい？……いや、今の、俺の、苦しい惱みが解るかい？……だが、おゝ！　俺はもう泣いてはいけない、なあおいそ！　お前が居るのだ！　お前と一緒に、時が來るまで、俺たちの時が來るまで、どんな苦しみも一緒にやろうよ……』

俺の眼は、急につきあげて來た熱い涙で、ジラ／＼にじんだ。

けれども彼女は、ぢつとその顏を伏せてゐた。そして暫らく、なんの返事も、身動き一つさへしなかつた。が、それが――そうした彼女の沈默が、たまらなく淋しさに搖るぐその時の俺の心を、少しでも毀はさなかつたばかりか、むしろ彼女は、俺の心を十分理解し、共に惱み、共に苦しんでゐて吳れるやうにさへ思はれた。

靜かに、靜かに、二人の間に深い沈默が續いてゆく……

が、やがて彼女は、最早そうした息苦しいほどな沈默の底に、ぢつといつまでも閉ぢこめられてゐることが、出來なくなつて來たものか、まるで哀れみを乞ふ仔犬のやうにおど／＼しながら、

『あんたどうなさしたい？……』

と、そつと下から、仰ぐやうに、潤みきつた大きい二つの瞳をみあげた――そこに、素直な、素直にして尊い彼女の心の全部が、瀨つて光つた。

『いや、なに、どうもしないんだ。大丈夫！　俺は時々、變にかうした淋しい氣分になつていけない。』

俺は狼狽てて、事もなげに微笑んだ。

と、素直で單純な、彼女はすぐに安神した、そしていつもの可愛らしい二つの靨を、ニツと双頰に小波立たせた。が、その時の顏と言つたら、見るにたえない、否、その場でガツクリと食ひついてもやり度いほどな可愛いゝ顏――それは二つの笑ひ顏と泣き顏とが、一つになつて一度にくづれた、所謂さみしい泣笑ひの顏であつた。

二人は再び、烈しい愛に燃え立つた。

が、やがて俺は明日の逢瀨を沁々約して、彼女を一人其處に殘した。

いつもならば、ほの暗い夕暮の濱沿ひ道を、ずつと遠くまで見送つてやるのであるが、例の、沖に碇泊してゐる『岬の船』で、とめて貰ふ筈になつてゐる彼女は、すぐに其場から船を呼ぶことが出來ると言ふので、俺だけ一人、暗くなつたコンクリートの岸を、とぼ〳〵ともと來た方へ踵を返した。

そして時々『さようなら』、『さようなら』と、心の中でそう言ひながら、一歩毎に殘してゆく彼女を遠くふり返つてみると、暗い、ひつそりとした闇の彼方に、一人ぽつねんと淋しさうに立つて、ぢつとこちらを無言のまゝで見送つてゐる――ほの白い手拭の頭と、同じく白い腰巻きのみが、ゆるぎもせずに浮いてゐた。

けれどもいよ〳〵、遠く彼女の、幻影のやうな姿と別れて、くろ〴〵、高く積み上げられてゐる亞鉛滓の下蔭から、急に曲る――長屋へ向けての道の角にとさしかゝつた時、とつぜん！……まつ暗な埋立地の空氣を破つて、

『海運丸やあ………………い。』

と、はるか沖の親船を呼ぶらしい彼女の、細長い、たまらなく愛らしい聲が、後ろの方ではつきり聞へた。

『おゝ……』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

俺ははたと足をとどめた。

――眞實愛する、どをしても愛せずに居られない、深い、強い一途な氣持ちを、ぐつと全身にするどく感じた。思はず呼吸が、咽喉でとまつた。

その前夜

（ある夜のスケッチ）

鳳逸平

十一月十三日の夜、九時を過ぎた頃……濠端の柳が、蒼白い夜霧のなかで、顫えながら、何事をか忍びやかに、うち歎いてゐる。電車が通る。自動車が過ぎ去る。そして喪服を纒つた人のやうな、眞黑な姿の人影が、默默として公園の方へ消えて行く。白堊の帝劇の建物からは、華やかな晩秋の歡樂をほこり顏に、燦然とした燈火が夜の暗闇のなかに、音もなく流れる大河の趣をみせて、美しく溢れてゐた。微かなオケストラの音が、扉の開閉のひまひまに、路行く人の耳にも傳つて來た。しかし、その隣りの、道路ひとつ隔てた建物は、眞黑に、燈火の影一つ洩れず、また物の音ひとつ響くこともなしに、惡魔のやうに意知惡るく、默りかへつて突立つてゐた。僅かに、沼の底から射す光りのやうに、ぼやけた暗い電燈が唯一つ。ぽかんと白痴のやうに建物の入口で燈つてゐた。そして、その鈍い疲れたやうな光の波のなかに、劍を腰に吊した洋服の男が、これも唯一人で、彼方此方とゆるやかな足調子で、一定の場所を往つたり來たりしてゐた。

一ツ二ツ三ツ……とその男は足を踏みながら、數をかぞへた　十歩まで歩いたと思ふと、彼の鼻先には、もう、眞白な壁が威嚇するやうに突立つてゐた。その壁の表面は冷たく、白々しく、汚れひとつ見えず、まるで彼のみじめな根性を嘲笑するやうに見えた。彼は再びクルリと方向をかへて、歩るき出した。然しまたもや十歩と踏まないうちに、今度はテーブルに突當つた。彼は佩劍をガチヤリツとひとつ、ゆすり上げて、そのテーブルの面に指を突いた。テーブルの面には、薄つすらと埃が溜つてゐて、彼が指をつけたまま、長く一の字を引いた時に、そのままテーブルの面には、はつきりと一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

木の太い線が描かれた。彼はそれを見ると、寒さうに微笑んだが、テーブルの上に乘せた指をそのまま靜かに動かして、縱横に線を引きはじめた。

そこへ自動車が一臺、消魂しい警笛を鳴らせて驅けつけた。そして、この建物の入口の階段の前でとまると、自動車の扉を押しのけるやうにして、三人の紳士姿の男が身輕るく飛び下りた。この三人が、あたふたとして階段を驅け上がり、入口へ來た時に、腰に劍を吊した男は、テーブルから指を離して、長靴の踵をカチリと、打合せながら不動の姿勢をとつて、右手の指を帽子の目庇にあてて默禮した。三人の紳士は、輕るくそれに答禮しながら、急足で、三階の方へと、その姿を消した。すぐ後から、ドヤドヤと新聞記者の一團が入つて來て、これは地下室の方へと、賑かな靴音と話聲を響かせながら消えて行つた。

若い男は、外套のポケツトに兩手を深く突込み、襟をすくめて、お濠の上から吹きあげてくる空ツ風を防ぎながら、三階と地下室とを交る交る、見上げたり見下ろしたりしながら、默々として立つてゐた。軈て五分も經つと、また彼は一、二、三……と數をかぞへながら、足を踏み初めた。往つたり、來たり、まるで時計の振子のやうに……

その時三階のある室には、四五人の洋服の紳士が、ひそひそと聲をしづめ、見張りまでつけて密議を凝らしてゐた。そして新聞記者室では、電話の鈴音と人の話聲が絕間もなく續いてゐた。そして、入口に番兵のやうに步哨してゐる青年巡査ほ、永久に罰せられた人間の悲哀そのもののやうに、何時までも、一刻の休息もせずに、一つ場所を往つたり來たりしてゐた。それは何事もなく、穩かに見える建物を背景にして動いてゐる、この男の姿は、まるで棄犬の蠢動めく態を聯想させるに充分であつた。彼は急に思ひ出したやうに、ツカツカと入口の階段のところへ出た。そして深淵のやうな色を湛えた、冬の大空を仰いだ。彼の眼の前には　滿々と水を湛えたお濠を一つ隔てて、千代田の森が、大森林のやうに、地上にうづくまり聳えてゐるのを見た。そして、森の空の眞上のところに、弓形の月が寒寒と、淋しく輝いてゐるのを見た。

日本國の首都、東京で、社會主義者の大檢擧が、既にはじまりかけた。明日は警視總監の命令で、赤化運動者は一齊に捕縛されやうとしてゐる前夜の警視廳は、生物の死滅したやうな靜寂さに支配されてゐた。唯、この年若い一人の騎馬巡

査だけが、コツコツと靴の踵を鳴らしながら、地獄の門の番犬のやうに動いてゐた。

某新聞社の卓上電話が、突然に目を覺したやうに、消魂しく鳴り出した。いま外出先から歸つて來たばかりの、青年記者は、冠つた帽子もとらずに、慌てて電話の受話器を耳にあてた。彼の耳の底には遠くから傳つてくる人聲が、途絶れ途絶れに聞えて來た。彼は時々、その談話の要點を、または不明な個所を、繰返へし繰返へし訊ねながら、先方が讀んでゐる原稿を、聽取つた。

「巣鴨方面で……電柱に、それから壁ですね……共同便所にも貼つたのですか。主義者が、巣鴨から早稲田方面に在住の主義者ですね……朝鮮人が動き出した。成程、これは例の同盟退學の鮮人學生ですか……さうですか、もう高等視察は出動しましたか。幾人位ですか、成程、成程、それぢや續々やられますね……家宅搜索は……巣鴨の……勞働社が、それに文化會……あ、さうですか。ビラをね……宣傳ビラを、成程、三千枚やられた……内容は、ふむ、ふむ……。」

編輯室の電燈は明るく燈つてゐた。明るい光りの浪が、その編輯室の机の上いつぱいに流れてゐた。時計は呑氣に、ゴツトン、ゴツトンと音を立てて動いてゐた。物の音といつては、この時計の動く音と、ほかにはストウブの燃える音ぐらいで、一寸の間、室内はひそまり返つてゐた。

ここでも、晩秋の一夜は靜かに何事もなく、穩かに刻々と過ぎ去つて行くのであつた。」

青年記者の胸の中には、不安な昂奮と、憂鬱に似た哀愁とが、相互に往來した。そして混亂した現場の模樣や　被檢擧者の怒り罵る聲や、巡査達が拳を振り上げて、檢擧した勞働者達を毆打してゐる光景が、ありありと彼の眼の前に浮び出た。原稿を書き續けながら、彼の心は壓潰されたやうに、次第に暗くなつて行つた。彼の眼は鉛筆の先に文字を見ずに、その文字の奧に、文字を透して、打つたり蹴つたり、あるひは摑みあつたりする、檢擧の現場の光景を瞶めてゐた。

ボオン、ボオン、ボオン……時計は十時をうつた。ふと、彼は原稿を書く手を休めて、椅子から立上り、卷莨をくわへて、窓際へ佇んだ。眼の下の市街は闇のなかに蹲踞まつてゐた。そして、その大きな陰鬱な建物の集團には、荒野に花の

咲き誇るやうに、數百万の燈火の花が・輝きわたり、滿ち溢れてゐた。それは、まるで闇の底から歡呼の聲を、ひしめきあつて擧げてゐるやうであつた。仄白い霧が、これらの燈火の歡聲を・柔らかく押包むやうに・都會の空を流れてゐた・

青年記者の胸の中には・この時・愛と平和の同胞主義の吹息が感ぜられた。この地上の、この闇の夜の都會の何處かでは既にこの同胞主義の勝鬨が、あげられてゐるのではないかとさへ空想された。

『しかし……』と彼の心が現實を振りかへつた刹那に、恁う思つた。『しかし、この地上の一隅では・既に主義者の大檢擧が始められてゐるではないか。そして明日は赤化運動の罪名の下に、幾千人の人間を一齊に捕縛する計劃を立ててゐるではないか。この事實を、どうするのだ。

青年記者は・憂欝な瞳をあげて、都會の上を蔽ふてゐる・涯しもない大空を眺め渡した。深淵のやうな空、人の心を誘惑するやうな空・そしてカツと開けた惡獸の巨口を思はせるやうな冬の大空の片隅に・孤獨を歎いてゐるやうに感ぜられる弓形の月が・ポツンと打棄てられたやうに輝いてゐるのをば發見した。

『多分、この月が當分浮世の月の・見納めとなる者も・出來るだらう。』恁う思つて、彼は窓を離れて・自分の椅子に復つた。

この時、數人の夜勤の記者が、編輯室へ入つて來た。室内は急に生々として、割れかへるやうな騷々しさになつた。もはや、時計の動く音も、ストウブの燃える音も・人の話聲に押しつけられて終つた。

『大分、やるらしいな。』

『今夜中に、檢擧された者が澤山ある樣子だ。』

「明日午前五時を期して、一齊に家宅捜索をやるさうだ。」

『しかし、結局それは掃倒するつもりが、反對の結果となつて現れるばかしだ。』

『いや、一網打盡に刈り盡す方針ださうだ。』

『結果は刈り盡せないで、却つて政府の手で、主義の宣傳をするやうな、馬鹿な目を見るに極つてら。』

『巣鴨や錦町の署へは、もう十名ばかり引張られたらしい。何しろ、この二つは有名な獰猛署長だからなあ。大にやるさ……。』

眞赤に熱したストウブの周圍を取巻いて、人々は勝手なことを云ひあつた。この時刻に、既に首都の片隅、巣鴨方面では無政府主義者の檢擧が始められてゐたのであつた。

警視廳北側の地下室留置場には、この夜、一人の賣春婦が檻禁せられてゐた。彼女は、飢と病とに疲れはててゐた。最近まで住んでゐた場末の町を追はれてから、一週間程の日數を、彼方此方とうろつき廻つた揚句に、彼女は昨夜夜更けに、公園の椅子の上から、この留置場へ連れて來られたのであつた。

彼女は固い板敷の上に座つて、日の光りも射し込まぬ暗いなかに、凝つと首垂れて思案に耽けつてゐた。寒氣は身體中に浸み透つて、凝つとしてゐても、骨がズキズキと疼くのであつた。彼女は度々、胸を押へては、輕るい咳をした。顔は仄のりと赤味を帶び、額にはしつとりと油汗が煮染み出た。そして、胸の底の方では、チクリチクリと嚙まれるやうな痛みを感じた。しかし、それも直ぐやんで、彼女の顔はまたもとのやうに、雪よりも蒼白くなつた。

夜は靜かで、物音一つ、人聲一つ何處からも聞えては來なかつた。彼女は飢と寒氣とに責められて、次第に意識かぼつとして來た。夢ともなく、現ともないやうな氣持が暫らく續いて、軈て彼女の心は陶睡に似た氣持のなかに沈んで行つた幾時間、そのままで睡つたとも覺えぬ裡に、突然、彼女は大聲に呼び起された。彼女が目を開いた瞬間に意識したものは、暗闇と寒氣とであつた。その次には彼女の額の前に突立つてゐる留置場の板壁と、片手に箱のやうなものを持つて、それを彼女の鼻先に突つけてゐる刑事の姿とであつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『オイ朝飯を食ふんだツ。』

肥つた赤ら顔の刑事は、片手を懐にして中腰になつて、睡ぼけたやうに茫んやりした彼女の顔の近くへ、赤い辨當箱を突つけた。

『夜が明けたの、旦那』と、この賣春婦は力のぬけた聲で訊ねた。

『さうさ、極つてら。朝になつたからこそ、飯をくわせてやるんぢやねえか。』

彼女は高く頭をあげて四邊を見廻した。成程、夜はすでに明け放れてゐた。そして何處で啼くのか、雀の聲さへ聞えて來た。彼女はひつたくるやうにして、赤辨當箱を刑事の手から取ると、ガツガツと食ひ出した。傍で刑事が何か喋つてゐるのも、彼女の耳へは入らなかつた。

『野良犬見てえに、ガツガツしてやがら、てめえは今日まで何處にゐたんだ』と刑事は嘲笑した。『めしの無え國から來た毛だ物見てえだな。』

まつたく彼女は三日前から、まるきり飯粒を咽喉にとほしたことなしに、今日まで日を過して來たのであつた。彼女は辨當箱の飯粒を一粒も殘さず食べ盡した。なほその上に箱の中の汁迄も甜め盡した。

かうして、この地の上には明るい眞晝が訪れた。しかし、此處はやはり何時までも薄暗く、そして靜かで寒かつた。時々、刑事らしい男が顔を出すほかには、誰一人、この室へ入つて來る者もなかつた。

軈て黄昏がこの留置場を訪れた。彼女は冷たい暗闇のなかで、脅かされた小鳩のやうに、身體を竦め、兩腕で胸を抱くやうにして、俯向きながら絶えず咳き續けた。その姿は、まるで自分の身體が何者かに引さらはれて行くのを恐れて、板敷の上に獅噛みついてゐるやうであつた。彼女は板敷の上に顔を押つけて、呻吟き苦しみ、身體を顫はせて絞り出すやうな咳をしつづけた。

しかし間もなく、それにも疲れきつて終つて、精根も盡き果ると、彼女は長々と手足を伸して、冷たい板敷の上に寢そべつた。今はもう身體も冷えるだけ冷えきつて終つて、下半身はしびれて感覺も失せてゐた。飢も寒氣も、最早や彼女を

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

苦めはしなかつた。それどころか、却つて樂々と彼女は板敷の上に身體を横へて、うるんだ瞳をぱつちりと見開いて、闇黒の一點を凝つと瞶めてゐた。そして彼女の頭の中には、樣々な幻想が輪を卷いて通り過ぎるのであつた……森、野原、草花、小河の流れ、藁ぶき屋根。そしてその景色のなかには、幼馴染の幾人かの忘られ難い顏が現れたり消えたりした。……大きな圍爐裡にはカツカツと炭火が燃え熾つてゐる。父と母とがゐる。自在鍵に吊した大きな鐵瓶のなかでは、湯が沸々と煮えたぎつてゐる。サラサラ、サラサラと粉雪の降る音が、靜かな冬の夜の沈默を破つて響くほかには物の音色ひとつ響かない。まつたく、しんと靜まりかへつてゐる。それは恐ろしい程に靜けさが、四邊を支配してゐる……彼女は唄を唄つた。母が彼女の切下髪を、柔しく撫でてくれる。暖かい掌が、彼女の額を、そして雨頰を締めつける。何と云ふ暖かさだらうと彼女は思ふ。彼女の小さな魂は、この愛撫のなかに快く溶けこんで行く……額から頰へ、そして胸へと暖かい愛撫は下りて行く。

しかし、突然に彼女は胸を締めつけられるやうな、息苦しさを覺えて、快い假睡から跳ね起きた。彼女は周圍には、恐ろしい、そして何うともしやうのない闇が取卷いてゐた。寒さが彼女を壓潰すかと思はれる程に、力强く襲ひかかつた。彼等は呼吸をせいせい鳴らしながら、俯伏したかと思ふと、ぐぐ……ぐつと不思議な音を咽喉の邊に響かせながら、一塊の血を膝の上に吐き出した。一塊、また一塊……彼女は自分の吐き出した血のなかに、自分の顏を浸して、痙攣的に手足をぶるぶると慄はせた。

この時、彼女の入れられてゐる留置場の前で、數臺の自動車がとまり、多人數いちどきに地上にをりる音がドヤドヤと聞えた。彼女は瀕死のなかにも、もうこれからは自分唯一人だけで、この冷たい闇のなかに棄てて置かれるのではないと云ふ、欣びの念にうたれて、戸外の人々が一刻も早く、この室へ入つて來るのを待ち受けてゐた。

黎明を告げる六時の鐘の音が、何處か遠くから響いて來た。これに應ずるやうに、戸外の自動車は、威勢のよい警笛を吹き鳴らせた。首都の彼方此方で捕縛せられた無政府主義者達が、警視廳へ護送せられて來たのであつた。そこでは、蹈み躪られて、見る影もなく衰へ果てた一人の年若い賣春婦が、息も絕え絕えになりながらも、捕はれた無政府主義者達

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

を眞心こめて歡迎した。

十一月十四日の午前六時ごろ……警視總監は、暖い寢床の中でまどろんでゐた。彼は夢に勳一等旭日章が、自分の胸に光るのをみた。しかし、哀れな賣春婦の死の苦悶や、主義者達の、鋭い侮蔑は夢にも感ずることは出來なかつたであらう

彈き初め

松本弘二

ボーン、ボーン、ボーン、ボーン。……

帳場か、それとも隱宅の時計か、寢耳にははつきり分らないが、四つ打つたことだけは慥かだと思ひながら、なほうつら〳〵してゐた。

暫らくすると、今度は電話の呼鈴がけたゝましく、リリリ……といふ速急な度合ひで帳場の方に鳴つてゐる。それもぼんやりしながら、まるで違つた世界の出來事のやうに聞いてゐる。——電話の呼鈴の音は何時までも止まない。一度切つたかと思ふと、又その次がなる。市外電話の呼び出しの時のやうな、切齒つまつた忙しさだ。一分、二分、三分——やつと『はい、はい』と返事をしてゐる。朝番の『お婆々』の聲だ。眼をさまして起き出して來たものらしい。

『……では待つてゐますよ。御苦勞樣。』

それで電話が切れた。今頃何だらう？ さう晋一はぼんやりした疑問を浮べながら、なほうつら〳〵してゐた。

ぼんやりした頭には判然とは分らないが、それから二十分も經つたと思ふ頃、表門の方から、騷がしい女達の聲と共にさく〳〵と砂道を蹴つて歩くやうな音が玄關まで續いた。一番先頭が、廊下を廣間の方へ——雀の囀るやうに氣忙しく喋り立てゝ走つてゐる頃も、門の方ではざく〳〵と足音が續いてゐる。人數から計算したならば、百人位ゐは這入り込んで來たらうと思はれる位ゐの多數である。が、後になれば後になるほど、最初と比較して物靜かになつて行く。そのうちに

帳場や臺所、それから座蒲團部屋の方などへ走つてゐる足音が、一種の線を作つて晉一の耳には聞かれる。それから又暫らくすると、彼方からも此方からも、三味線の調子を合はせるらしい。びん／＼と、太い彈力性のある絲を鳴らしてゐる。中には小走りに走りながら鳴らして廣間の方へ行つてゐるものもあるらしく思はれる。

『今日は二日だ、……彈き初めだな。』

晉一の眼は、もう冴えきつてゐた。それで、明瞭に彈き初めといふことが分つた。

『四年振りにあの三味を聞くのだ。』

今度はいよ／＼眼をも瞠いて、廣間の樣子を聞いてゐやうと思ひ出した。晉一はつい三四日前の初七日の晩、券番の藝妓のほんの一部分と顏を合はした。それは大部分年增で、何方かと言へば親しみの薄い人達であつた。それから未だ誰とも會はない。元日も忌中といふので遠慮して來ない。準備が出來たものと見えて、調子を合して三味線が鳴らされ始めたそれが、未だほの闇い、そればかりでなく極寒の冷えきつた空氣と、寂とした四圍を、途中何の蟠りもなく澄み切つた音色で響いて來る。晉一はもう三味線の調子だけでは何が何だか分らない位ゐに忘れてゐるが、花柳の『春日龍神』らしいのを千切れ／＼に思ひ出して聞きながら、その頃のことなど思ひ返してゐた。

晉一は暮も押しつまつた二十九日に、叔母の訃報に接して歸國したのであつた。それから未だ二三日にしかならない。彼は、その頃の人達と會つてみたいやうな懷かしさでいつぱいになつて來た。電燈の薄明りで天井を眺めてゐたのを止めて、床の間に視線を向けた。求め得てから餘り古くないらしい、野田大塊の一軸が、何氣もなくぶら下つてゐる。──大川の流れに近く蘭香る。──と讃をして、岩の間から蘭の花が顏を出してゐる。ごつ／＼して、物になつてゐない。晉一は今はこの家の主人である、愼太郎の今も昔も變りのない低級趣味を、この部屋を歸國してゐる間だけは起居の部屋として當てがはれた時から、皮肉な眼で嗤つてゐたのと同じに、今も寢床にあつて感じながら、今度はそろ／＼起き出さうと思ひ始めた。

始めに一二花柳ものが濟んで、『春は花』が出された時、やつとどてら着のまゝ起き上つた。廊下傳ひに、人氣のない反

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

對側から廣間の椽に立つた。未だ闇い。それに寒さで身を慄はせながら、知られないやうにそつと少しばかり障子を開けた。と、直ぐ眼の前の踊り舞臺で、舞子達が二十五六人も一列になつて、兩手を飜したり、腰をゆがめたり、足を伸縮さしたりして、一心に踊つてゐる。廣間の方では、藝妓達が二列に縦に流れて、これも一心に三味をかき鳴してゐる。藝者稼業の並大抵でないことは前々から知つてゐたが、今眼前にその光景を眺めては、益々彼女等の努力が感ぜられるやうに思はれ出した。

半數は顏見知り、どころかその中にはその頃親しくしてゐた女達さへ未だ混つてゐる。『あれは知らない。これは知つてゐる。……』そんな具合に顏を一つ一つ、次から次へ見渡して行くうちに、踊つてゐる舞子達の中に、豆千代と鈴丸との顏を見出した。晋一の心は、もう懷しさでいつぱいになつて來た。その頃とは違つて、顏も増せて見ゆるし、苦勞の痕も見ゆるし、又一段と女らしくなつて見ゆる。晋一は、二人の顏を、熱心に眺めた。紡績か何かのふだん着に、元日の——謂はゞ當の晩をちつとも寢なかつたものらしく、結び立ての島田がちつとも崩れずに、きちんとしてゐる。

豆千代も鈴丸も同い年で、もう二十才近くなる頃だ。晋一が國にゐる頃は、二人共未だ子供であつた。それを、早く一本にする爲めに、抱主と年增の藝者達とが無理强いに、——その結果は一の悲劇だつた。——强いて、旦那をつけて終つた。豆千代は幾度か逃げ出したが、その都度捉まえられた。晋一も、その餘りに傷ましい光景にたまり兼ねて、何うせはこんな社會の狀態が根こそぎ覆へらない間は、如何なる努力も、百千の盡力も無駄だとは思ひながらも、抱主達の意見と鬪つたのであるが、それは遂に晋一達の負けとなつて終つた。晋一が去つてからも、鈴丸と二人で、二三度逃げ出したがその都度矢張り捉えられたと、從弟達の消息で彼は知つてゐた。

『私達ばかりが、何でこんなに不幸な境界にゐなければならないのでせう。私達は好んで、こんな稼業に這入り込んではをりません。親が悪いんです。親の貧棒が悪いんです。世間の人達が悪いんです……』

といつたやうな文句で、その當座一二度手紙を貰つたことがあつた。彼女達が、今の境界から何うにでもして遁れ出して、自由な身體になつてやらうとしてゐる心、それを無知にも逃走だけで目的を果さんとしてゐる單純な頭、——それは

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

晋一の心を暗くするには充分であつた。

晋一は廊下の暗がりから、彼女達の様子を眺め、豆千代の頬のこけた、そしてその頃の子供らしさの段々なくなつて行つた顔を見つめてゐると、何だか暗い、一種のセンチメンタルな涙ぐましさにさへ襲はれて、ふら／＼と帳場の方へ歩き出した。

帳場は明るかつた。大火鉢にかん／＼炭火がおこつてゐて、『お婆々』と年増女中やら當番の女中やらが、廣間へ運ぶ小火鉢へ火をつぎこんだり、お酒の燗をつけたりしてゐる。

『大變ですね。……樂々と休むことも出來ない商賣ですね』

晋一はさう言ひながら、大火鉢の側に座つた。女達は女達で、

『この寒さに、藝妓衆も大變でさあね』

『寒いだろ。……寒いだろ。早くお酒でも呑ましてやらにや』

さう言ひ合つては忙しく火をついだり、酒を運んだりしてゐる。

廣間の方からは一切り強調した撥の音が止むと、暫らくは何か囃やく聲ばかりが聞えて來た。薄明が帳場や料理場の窓からさし込む頃、それは運んで行つた酒がひととほり廻つたと思はれる頃。又三味の音が聞えて來た。が、四圍の人達は未だ誰も起きず、がたごとと雑音も混らないので、三味の音は矢張り澄んで聞えて來る。『お婆々』も女中達も、一ととほり仕事が濟んだので、今度は廣間の方へ行き始めた。そして、晋一にもそれをすゝめた。

『暫らくふりに、此方の舞子衆の踊も見てみませんか。豆千代さんたちも來てゐますよ。あの子も度々逃げ出しましてね、この頃は餘程落ちついてゐるやうですが』

一番年増の女中、それが自分が座を起つときに晋一にさう言ひながら、いよ／＼晋一が座を起つと、自分が先に廣間の方へ歩き出した。晋一は、その後から跟いて行つたけれども、座敷の中までは這入らなかつた。鞘の間の柱の側に立つて今度は以前よりよく見えもするし、が、もう多少勞れてゐるらしい彼女達の踊を見ることにした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

そのうちに、彼女達の方からも晋一の姿が見えたらしく、踊の合間に豆千代と鈴丸は此方へ視線を向けて、不審さう見入つたりしてゐた。それが、五六度も此方を見てゐるうちに、柱の蔭の男が晋一であることが分つたらしく、晋一には『分つた、分つた……』と知らしてゐるらしい表情に見え出して來た。――踊が濟んだ。矢張り晋一といふことが分つたものらしく、豆千代は鈴丸を誘つて、疊を蹴散らすやうに早く走つて來た。

『兄さん、暫らく!』

『兄さん、暫らく!』

豆千代も、鈴丸もの顔から汗がいつぱいににじんでゐるのを晋一は見た。いきなり、三人は手を握り合つた。

『兄さん、何時歸つたの? 又東京へ行くの?』

晋一の心は歡びの心でいつぱいだつた。そして、彼女達が踊の濟んだ時に此方へ走つて來た時の様子と思ひ較べて、只何となく感謝したいやうな氣にさへなつてゐた。あの眼、あの表情が、やがては形は拙劣な逃走となつて現れても自由に憬れ、自由に向つて突進する氣力なのだと思ふと、自分は何時までも彼女達の味方でなければならないと、――さう瞬間に思はれて、歡びの握手をかへした。

向つて右から、桃丸、角兵衛、榮造、梅奴、――四人の舞子が『奴』を踊つてゐる。桃割れ、結ひわた、髮下地など、それ〴〵自分達の好き好みであらうと思はれる髪に結つて、友禪錦紗の派手な着物、その四人が姐さん達の三味に合はして合圖も宜敷く踊つてゐる。

晋一が東京へ歸つてから、それから間もなくのこと、或る會の座席に出席した時に、この四人の舞子達の踊を見たことがある。そのうちの、右から二番目で、結ひわたに結つた角兵衛の顔が、豆千代とは三つ四つ年下ではあらうけれども、晋一の眼には何となく酷似してゐるやうに思はれてならなかつた。角兵衛は未だ一本には勿論なつてゐないだらうし、多

少豆千代よりも太つてゐる。が、あの大きな眼、心持太つた鼻、殊に口元は豆千代そつくりで、情味に富んでゐることもそつくりである。

晋一は多少嗜む酒を、女から酌れるまゝに呑みながら踊の樣子を見てゐたが、角兵衛の顔が豆千代に似てゐるにつけ、豆千代達の若い苦勞が思ひやられるにつけ、自分は兎に角まあ貧棒なりにも、こうしてたまには宴會の座席にも來られる身分になつてゐる。が、彼女達ばかりでなく、彼女達の他の多くの同胞を自由にすべく、連帶責任を持つてゐる自分が、其後幾何の仕事をしたか？『足りない。足りない。怠け者だ。覺悟がつかないのだ』と、責められるやうな氣がして、晋一は沈み勝に、その踊を眺めてゐた。——了——

次號豫告

五月一日は勞働祭だ。「種蒔く人」はもとよりこの時期に默してゐるわけにはゆかない。僕たちは出來るだけそれに關係ある記事を滿載する。その外、世界の壓迫されてゐる人民（アイルランド・インド、インドシナ・〇〇其他）のために氣を吐く。本欄には小川未明、佐野袈裟美、金子洋文、平戸廉吉、今野賢三、平林初之輔、松本淳三、佐々木幸丸等の小說、論文、詩、戯曲等がある。批評、世界、地方、婦人、聾人等例の如し。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

人類苦

角園春之助

妹がねてゐる
病室の二階で
初めて邂逅つたその夜から
二つの心藏は縺れて囁いた

汝の愛は搖籃の中に戰いた
その夜から
二つの愛の幻はさまよつた

ある日
波のうねりに太陽は輝いて
尖塔の上に
あきない抱愛をつゞけてゐた
俺はニヒリスト
汝は釋尊のお寺の娘だ
幻の影は幾度かすれ違つた
その日から

暮はきた
ボーナスはなかつた
幾度かあやまつた
いくたびか嫌嘩した
出入の米居の顔が幻に見ゆる――
その時からだ
二つの幻は
窮迫を中に
幾度かどう〳〵めぐりした

鉢合せを恐れて横を向いてゐた
颶風は默つてうつむいてゐた

俺は留守だつた
服の出がけには頬笑んで別れたものを
その眞夜中に
待つてゐたのは
冷めたい床と極みない空虚ばかりだつた
汝は去つた
幻は消えた
その夜からだ
俺がつんぼになつたのは

その夜から
日本の東京を
西に走つた
北にたづねた
こみ上ぐる涙をふいて、
街路に若い女を見た

小春日和の戀心に
泣いたのは俺ばかりだつた

或る日
目黒の杜に
占ひの男をたづねた
男の顔を見ると
打ちのめしたい憎惡が胸につまる
呪はれた汝の瞳よ！
五十錢の見料はおしかつたが
疲れた足をひきづつて頬笑んでゐた

その翌日
心藏をしつかりおさへて
空を見てゐた
幻の影がほゝゑんで見ゆる
俺は信じた
更生の日のよろこびが
俺の生命に波うつてゐた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

反逆の刻印

矢旗春三

暮れ方の濁つた空の下を
汽笛がか細い尾を引いて鳴りしきる時
街の灯がうすら冷い光を投げて
うなだれた人の群があわたゞしく
影のやうに淋しく流れる時
活字とインキの匂に汚れた私の頭に
數知れぬ血管を流れて來た記憶が
遠い昔の人類の記憶が
湧きいづる、滾々と湧きいづる。

あゝその日は美しい時であつたが……
思ひ出しても私の息はつまるやうだ。
草の香のむせかへる丘に立つて
地平から地平に擴がる青い空の
眞中に笑つてゐる太陽と
言葉を交してゐたその頃……

血の音高い双手を伸せば
青空は腕一ぱいに抱けさうだ。
野と山を馳けめぐれば、嬉しさに
眼から眞珠の露がころがり出て
清水の流れと清さをさそつた。
あゝその日は美しい時であつたが……
思ひ出しても私の息はつまるやうだ。
私は——私でないと誰が言てる？
鐵の鎖からも力の權威からも．
何物からも自由であつた。
空と地の豐かな世界で
心行くまゝ自由に振舞つた。
私は自由なる唯一者であつた
でも私には多くの仲好しがあつた。
皆同じやうに自由であり
皆同じやうに唯一者であつた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空と地のその豐かな世界では
皆が唯一者であつたとて
手を握りあふのに邪げはない。
皆が心臟の暖さで抱き合ひ
皆が心臟の響を傳へあつた。
太陽が山に隱れると眠りが私達を誘ひに來た。
太陽が山から出ると鳥が私達を起しに來た。
食でたい時には木の實をとり
喉がかはけば谷間へ走つた。
夜は和ぎに晝は光につつまれて
太陽も星も、皆躍り皆歌つた。
あゝその日は美しい時であつたが……
思ひ出しも私の息はつまるやうだ。

暮れがたの濁つた空の下を
汽笛がか細い尾を引いて鳴りしきる時
この美しい記憶に耽る私は
しかし、あゝどんなに慘めだらう！
こよひの糧を得ようとして、私は
インキに染みた手をポケツトに突込み
冷やかな銀貨の一つをそつと握る……
でも見返れば私の周りには
影のやうな淋しい顏が幾つも
油じみた着物に包まれて悄然と
うすら冷い街の灯を眺めてゐる。
あの人達はこよひの糧を得たらうか。
きのふの糧は、あすの糧は？
あゝ嘗て自由の子であつた私は
十七歳の少女のやうな感傷に
胸をづきづきと刺されながら
かなた燈火の海をきつと見つめた。
自動車の毒氣を身に浴び
泣き叫が迷子の聲を耳にして
かなた燈火の海を見つめてゐると
あゝ嘗て自由の子であつた私の
私の胸は炎の如く燃えあがり
反逆の刻印は黑々と肉太く
胸底深くぢりぢりと焼き付けられた。

（一九二二・二・一四）

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

嘘（いつはり）に就いての感想

金子洋文

（一九二二・二・一四）

一

無智が正直と隣合つてゐるといふ事は確である。而しある絶體から見ると、無智は不正直以下ともなる。眞理から最も遠いあるものであるといふ氣がある。

トルストイは晩年に於て、無智な人々が最も神のお思召にかなつてゐることを力した。彼の如き復雜な心境に生きてきた人が、かうした單純な境地に到つたことは最も必然的なことであらねばならない。けれ共トルスイの所謂イヴンの馬鹿は、無智が善良な魂に住んだ時に於てのみ、神のお思召にかなつてゐることを示してゐる。若しも無智が狡猾や淫蕩や詐欺と一所であつたならば、それは正直であつても恐しい正直である。正義に遙かに遠ざかつた正直である。かうした正直は不正直以上の恐しい正直である。

二

近代文明はある意味に於て人間の感情を分離せしめて、意志を不安定にした文明であるといふ事が出來る、虚無思想と言へ、デガタンと言へ、象徴思想と言へ、何れも意志の動搖、感情の分裂から生れたものである、かうした感情の分裂は何處から來たか、これを宇宙な觀方をすれば人間が自然を征服せうとした無理から生じたものである、哲學的な立場から言へば功利主義哲學の専横であり、手近な人間生活から觀れば、資本主義が生んだ貧困の結果である。

自然主義が發生した時、これ等イズムの主張者は『かくある』の立場にあつて、烈しい闘を繰返したけれども、彼等の勝利は當然であつたとは言へ、悲しき勝利であつたのである、現實を眺めて初めて恐愕し戰慄した彼等の氣持、それが彼等の主張となり、勝利となり、彼等の歡びとなつた、この矛盾は何を物語つてゐるか、近代人の嘘は實にこの時から芽生へ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

たのである。

三

近代人は嘘の多い生活をしてゐる、この嘘は許されべき虚でなければならない、近代人は悲しき痛ましさ現實に眼覺めた、そして彼等はそれを主張し・彼等は勝ち、彼等は歎んだ、これは愛す可き人間の姿である、愛す可き感情の分裂である、彼等はそれを是認したのである、彼等は勇ましく正視したのである、たとへ、そこから虚が生れたとしても、それが必然であつた程正しかつたのである。この様な正しい心から生れた不正直は、正義に依つて許されなければならない不正直である、自分はこの意味に於て近代人の虚を是認するものだ。

近代人の感情が分離して、意志が薄弱であることは境遇が生んだのである、この明かな事實は、一切の人間の感情、意志、思想及行爲を各個人が形造るものであるといふ在來の卑屈なる宗教と反撥あるのは當然である、若しも在來の宗教が今日の人間の魂を救ふことが出來るものなら、既に今日に到らない前に、人間の魂を救ふてゐなければならなかつた筈である。而るに教會や寺院が殷盛を極めてゐながら、反對に人間の魂が墮落しつゝあるといふことは、(彼等の見地から)そこに彼等の大きな誤謬がなければならない、それは人間の感情、意志、思想及行爲が境遇に依つて支配されることを、無視してゐる爲である、彼等が眞の宗教家たらんと慾するならば、彼等は先づ廣義のソシアリストとならなければならない。自分は近代人の虚を是認すると同時に、斯くの如き宗教家を徹底的に憎惡する。

四

近代人は何故虚を言はねばならないか、その理由は二つに分つことが出來る、一つは生活安定の爲である、他の一つは意志が薄弱であるためと(これは彼が總明で、人間の魂を理解すればする程、さうならねばならない)感情が餘りに復雜に働きかける爲である。

前者に就いてはこゝで多くを語る必要はない、この虚は資本家は勿論のこと、資本家に使用されて生活を支持してゐる凡ての人間共通の虚である、けれ共、後者の虚は現實に眼覺めた、人間の魂を餘り深く理解し過ぎた結果から生れた虚で

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ある。彼等は餘りに知り過ぎた爲に、遂にその焦點を見失つてしまつたのだ、そこに彼等の迷があり、苦悶があり幽鬱がある。

近代人はある問題に就いて判然した解釋をすることが出來ない、人間の問題に對し、決定的な判斷といふものは、めつたにないからである、けれ共彼等は言はなければならない樣に餘議なくせしめられる、この時彼等は虛を言ふのである、彼等は人生の表裏を知り過ぎてゐる、だからある問題に對しての彼等の答は、決して一つではない、五つも六つも十も答が出てくる、けれ共現世ではいつでも數學の樣に一つの答、二つの答を要求してゐるのである。彼等は十の答を言はうとする、而しその表現は論理では到底容易でない、だからその場合彼等は虛を書くか、一つか二つの答をしなければならない、彼等の心は餘りに弱い、餘りに感じ易い、彼等は自分の言葉が對手の心臟に何う響くかを、手にとる樣に知つてゐる彼等は自分の言葉を先づ自らの心臟にきくのである、だから、彼等は正直な言葉を吐露することが出來ないのである。

又、彼等の生活は理智と感情の衝突の連鎖である。彼等は人間の自由を唱へる、而かも戀人を所有せうとする、彼等は自分の妻の過失を許さうとする。その爲めに反つて自縛の苦しみに囚はれるのだ、彼等は徹底的に戀人を愛さうと思へば思ふ程、疑ひに眼が眩む、反對に徹底的に憎まうとしながら、マリアの手に取縋るのである。

この復雜した感情は到底論理では言ひ盡すことは出來ない、彼等の心理を表現せんとするには、たゞ一つの形式がある それは藝術である。

吾々は今日まで多くの文明批評家がなした、すぐれた藝術家の批評及びその心理解剖を見せられて來た、而し、私は一度もそれに滿足したことはない、彼等は共通的にその人間を誇張して吾々に傳へてゐるのである、トルストイを論ずる人々は、晩年に於ける彼の生活は一秒一分凡て惱みであり苦悶であつた樣に語つてゐる、けれ共これは僞りである、彼を偶像化した言葉である、これ等の議論の僞りであることは私がこゝで說くまでもなく、彼の小說自らが明かに物語つてゐる復活のネフリユードフの轉期を見るがいゝ、彼は裁判所でカチユウシヤに會つて、大きな苦悶に面接してゐながら、公爵夫人との媾曳を考へてゐたではないか、又一切を棄ててシベリアに行きながら、彼の心は常に動搖の裡に迷ふてゐたでは

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ないか。

トルストイの心理解剖はさて置き、象徴詩人のヴェルレーヌの心理解剖などは、到底論理的になし得るものでない、彼の惱み、涙、悲しみ、いたづら、遊蕩、惑溺、信仰、放逸これ等數々の姿を見て、吾々は何うこれに答へていゝのか。結局は彼を語るものは彼の藝術以外にないのである。それを解剖したところで、それは結局彼を彼以外のものとするしか効果のないものである。近代人は既に彼自身の姿さへ完全に握り得ないのだ、彼は十の姿、二十の姿、無數の姿をなしてゐる、而もその姿は影のごとくはかなく、影のごとく搖映してゐる。彼等はたゞ歌ふであらう、その時彼等の無數の姿が、一つ一つそこに刻みこまれるのである、彼等はそれを見て恁うさゝやく。『おや、おや。』

五

彼等の嘘の生活はいつまで續くであらうかそれは彼等が自身の嘘に絶えられなくなる時までである、彼等は如何にして救はれべきか、甘き宗教か、それはノンセンスである。彼等の救はるゝ只一つの途は彼等が自身の血を見た時である、人類全體が血を見た時である、自殺か、〇〇か二つに一つしかないのである。

人類は今、自滅するか、復活するかの恐しい分岐點に立つてゐる、自分はその必然を人間の勝利、眞理の勝利て見るものである、彼等は彼等の血を見て眼覺めるだらう、最も弱き彼等は最も強きものとなり、嘘に充ちた彼等の生活は正直に充ちた光輝の生活となるだらう。それは共産主義の理想社會でなければならない。

人間生活に於て嘘は永遠に絶えるものではない、人類生活が存續する限り、嘘もともに續く筈である、而しながら理想社會に於ては一功が正しくあるごとく、嘘も又正しいものとして是認されるだらう、何故なれば嘘のない人生は圓滿に廻轉しないだらうから。嘘は人生に於ける鹽である、彼が今日の樣に不正のものとなつたのは、環境の不善と、大なる束縛のためである。理想社會に解放された吾等の愛す可き嘘は、陽氣にかう叫ぶであらう。

『さうさ、俺は人間にとつて仲々大事な奴なんだよ、俺をいけなくしたのは、あいつさ、そら、でぶ〳〵太つた金持つて矢郎さ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

文藝家懇親會
―自由思想家組合の成立―

『今度、階級藝術、階級意識に就ての問題、並に過激主義取締法案に就て、緊急討議したいと思ひますから、是非御出席を願ひます。

時日、三月十一日午後六時

場所、神田小川町『ときわ』

かうした案內狀を、あらゆる思想家、藝術家へ宛てゝ、百三十通出して置きました。處が返事が、丁度九十二枚來ました、殘る三十八枚は、案內狀と共に封入して置いた葉書を向ふで勝手にお使ひにでもなつたものと見へて、ウンともスンとも何の便りもありませんでした。それに折角頂いた返事の中でも『十一日には牛肉を食ひたくないやうな氣がしますので、欠席いたします』と言ふ、馬鹿な返事もありました。（これは安成二郎と言ふ人の葉書でした。）

が、それは兎に角、いよ〱三月十一日になつて來ました、よく晴れた夜でした。が、手金を打つて置くことを忘れてゐた爲め、當夜になつて會場を『ときわ』から斷つて來ました。委員の大失敗でした。で、早速『池國』に變更しました。

金子洋文、松本淳三、古田金重、佐々木孝丸、上野虎雄、山川亮、小川未明、小島德彌、山邊林太郎、川崎長太郎、淸水彌太郎、村松正俊、平林初之輔、畠山松次郎、佐野袈裟美、今野賢三、森輝、新居格、津田光造、前田河廣一郎、柳瀨正夢、小牧近江、川崎春二、松本弘二、大藤治郎、橋浦泰雄、江間道助、秋田兩雀、山內房吉、細田民樹、景山要、辻潤

――以上（出席順）三十二氏が出席されました。

そこでいよ〱開會しました。津田光造氏が開會の辭を兼ねて階級藝術に就ての意見を發表しました。續いて平林初之輔氏が過激主義取締法案に對する反對理由を說明しましたそれから松本淳三氏が議長席に着いて右法案反對の決議文を宣言しました。滿場一致で、その決議文が可決されました。

處が其時、三四の人から、怎うした問題に對する眞摯な、研究討議を目的に一つの組合を組織して、今後每月一回位集合してはどうかとの動議が出ました。と、すぐにそれに全部の人が贊成しました。そして直ちに當夜の會から出發して、會の名前も『自由思想家組合』と命名することに一致しました。實に一瀉千里でした。實行委員として、小島德彌、前田河廣一郎、佐野袈裟美、橋浦泰雄、松本淳三の五氏がきまりました。

酒が出ました。豚が煮え出しました。みんな愉快に飮んだり歌つたり、平和のうちに散會しました。九時半でした。

表へ出ると、馬鹿に小寒い風でした。『池國』の正面交番の裏にうよ〱、二三十人の正服巡査が、何の爲めにかかたまつて居ました。變だな――空を見ました。血に染まつたやうな月が、中天にかかつてゐました。

以上、事實ありのまゝです。當時の新聞では、中止になつたとか解散になつたとか、其他色々この會についての誤報がありました。が、事實は以上の通りであります。

無料宿泊所

當夜無料宿泊所に御厄介になつた三名連の仲間がゐる、背の小さい男はぐでん〱に醉つぱらつて池國を出ると、忽ち物騷な歌を唄つたものだ、忽ち待ちかまへてゐた警官に捕まつて留置所にぶちこまれた。

『お前は〇〇歌をうたつたか、』

『うたひました、』

『夜待つてゐる妻君を可愛想に思はないか、』

『大いに可愛いく思ひます、』

と啖呵をきつたは小さい男。連中は佐々木平林、鳳の三名、小さい男は諸君の御判斷に任せる。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

種蒔き社第一回文藝講演會

禁止さる

◇

理屈なしに、種蒔き社は講演者並に聽講者諸君の御足勞を煩はしたことはを心苦しく思ひます。何とも御詫の致方がありません。種蒔き社は速達または書面にて弔詞を寄せられた、東京及び地方の同志、讀者の御厚意に心から感謝いたします。主なる原因はダントン劇でした。僕たちとしても誠に殘念でした。ながい間の稽古も無にもなつたかと思へば腹の立つ程殘念でした。ながい間、いろいろ有益な御意見と、御指導下さいました秋田雨雀氏にも誠に申譯ありません。秋田雨雀氏はじめ、ここに御姓名の發表を許さぬ諸君の熱誠なる御聲援を感謝いたします。

◇

禁止といふ大命が下つたのは開會間際でした。種蒔き社は青年會館前の看板が紛失してゐるのを發見したので會館に説明を求めましたところ、それは已に三日前から其筋から取上げられたのだとのことでした。それですべてが讀まれます。當日既に禁止する底意があつたのです。ダントン劇の朗讀が許されてあつたことは當日錦町署長の言明にも明かですが、官憲の前に理屈がない。僕たちは、種蒔き社の良心としても聽講諸君の御足勞を無視する理由には行かない、ダントン劇だけは御詫して中止することとし、會費を無料として講演だけでも許可してもらひたいことを折入つて願ひましたが、それもならぬ、これもならぬの一點張りでした。僕たちは第三次交渉の折署長に向つて「私達はこんなことにまで官憲と相反目しなければならぬものでせうかと」默つて居られなかつた小川未明氏の御厚意に感謝いたします。

◇

それにつけても錦町署長は聞くに勝る愛嬌者でした。「例へ保案課が何んと言はうと「俺が厭だと言つたら厭だ、この俺が……』。あの愛嬌な署長のことですから、僕たちは聞く程てないおとなしい揃だと言ふことを見抜かれてこの次には必ず逆に「例へ保案課が何んと言ふが、俺が許すと言つたら許す、此俺が…』と言はれることを信じて疑はないものです。で、前以の御禮のつもりで、一言申上げますが、今後の朗讀は愼重に許可されたいことゝ、そして、俄かに內容を知つてびつくりされぬこと、これはお互のための御願です。

◇

御足勞をかけた諸君に、文藝講演會が開會もせずに禁止された事實を御記憶されよ

◇

それから、僕たちはもつと上手に交渉しなければならないことを心掛けやう。

◇

かうして、三月十五日、ロシア第一次革命の紀念日にダントンはケレンスキーの如く葬りさられた。

種蒔き社地方講演會

主義の主張は字句の上から許りでは何にもならない。そのことは種蒔き社の常に感じてゐたところであつたが、こん度四月の講習會が濟んだら、執筆家諸氏の後援を得、積極的に活動することとし地方で文藝講演會を開くことにした。地方の讀者が壓迫されることに對しても、種蒔き社は默つて居らない。種蒔き社は地方同志の申込に應ずる。（係）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

論叢

吾等の要求する文藝

渡邊順二

一

資本主義の成熟と共に、プロレタリアが新興階級として擡頭し、正に時代の中心勢方たらんとしてゐる。

社會主義が流行し、勞働問題が流行した時には、社會主義小説といふものが現はれたり、勞働小説と銘うつたものが現はれたと同じやうに、近來ブルジョア對プロレタリアの階級的對立が著しく鮮明になり、そしてプロレタリアの歴史的使命が明かに意識されるやうになつて來ると同時に、所謂プロレタリヤの文藝、乃至はブルジョアの藝術と云ふやうな事が問題にされて來たのも、敢へて異とするに足りない。

私の見る處に據れば、現代の文藝家は果してブルジョアであるか、プロレタリアであるかと云ふ事が論議の中心になつてゐるやうである。

有島武郎氏が『私は第四階級に對しては、無緣の衆生の一人である。』(改造新年號)と絶望を宣言したり、田中純氏が『吾々は何うしても拂拭することの出來ないブルジョアの烙印を捺されてゐる事も知つてゐるつもりで、またさうしたブルジョア生活に大した價値のない事も知つてゐる。しかし今のブルジョア生活を否定する事が、必ずしも將來を信じさせることにはならない。信じ得ない事を信じたやうな顔をする事は不可能である。從つて今の時代に於ける吾々の地位はこれを外から見れば懷疑的であり、これを内から見れば寧ろ絶望的であるといふに近い。』(時事新報二月二十一日)と云つて到底プロレタリアに近づき得ない事を告白して居られる。ブルジョアの生活に大した價値のない事を認めながら、しかも明かにプロレタリアたり得ないところに、現代の文藝家の煩悶がある。

二

現代の資本主義制度の下に於ては、生産機關を占有する事によつて生ずる、不勞所得によつて生活する階級と、何

らかの形に於て、自己の勞働力を賣る事の他に、生活の方法を持たない階級とがある。即ち前者が搾取階級であり、支配階級であり、後者が被搾取階級であり、被支配階級である。そして前者がブルジョアであり、後者がプロレタリアである。現代の社會は、此の兩階級の對立を基礎として成立するものであり、現代に生活する何人と雖も、その何れかに屬するものでなくてはならぬ。

尙明かに搾取階級者でなくても、搾取階級に隷屬し、彼らの地位を辯護し維持するために、種々の理屈をこね上る所謂知識階級の大部分はもとより、積極的に搾取階級の辯護をしないまでも、消極的に彼らに迎合し妥協するものも吾々プロレタリアの立場から見れば、悉くブルジョアであるに相違ない。

そこで今日の文藝家は何うであるかと見るに、その經濟的の立場から見れば、極く少數の人達を除く外は悉く被搾取階級である。勞働がハンマアを握る手に、ペンを握つて一枚幾何の原稿料を得て生活する彼らも、等しく被搾取階級であるに相違ない。

斯くの如く、經濟的の立場から見て、明かにプロレタリアである可き筈の文藝家が、その意識感情に於て到底ブルジョアの烙印を拂拭する事が出來ないといふのは何故であらうか。そして有島氏が、プロレタリアに對しては無緣の衆生であると絕望せられるのは別として、他の大部分の文藝家が、甘じてブルジョアたる事にも何んとなく氣が咎めるし、さりとて明かにプロレタリアだと叫ぶのも恐ろしいと云ふ不徹底な態度は、果して何に起因するのであらうか？

三

私は今こゝで、今日の文藝家の不徹底な態度が、何に起因するかについては何も云はない事にする。

兎に角今日の文藝家が、明かにプロレタリアの立場に立つものとすれば、現代の社會組織の下に於て、プロレタリアは如何なる使命を帶びてゐるものであるかを、明確に意識しなくてはならない。そして現代の階級鬪爭の舞臺上に於ける、プロレタリアの役割を忠實に演ずることだ。

今日の文藝家が、かくの如き明かな階級意識によつて、その文藝上の作品を創作するならば、吾々勞働階級者も喜んで吾々の味方として迎へるであらう。

尙私は、吾々の要求する文藝、所謂プロレタリヤの文藝は、如何なるものであるべきかに就いて一言したい。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

四

吾々の要求する文藝の第一の條件は、何よりも現代の資本主義制度の缺陷を明確に指摘するものでなくてはならない。即ち資本主義制度の發達は、必然に搾取と被搾取の階級の分裂となり、この階級の分裂は勢ひ大多數民衆の生活の桎梏となるものである事を明かに指摘するものでなくてはならない。

現代生活の矛盾、一に資本制度の缺陷に起因するものであるから、この缺陷を除去する事によつて始めて今日の大多數のプロレタリアが、現在の不合理な奴隷的な境涯から脱し得るものである事を敎へるものでなくてはならない。否此の場合敎へるなどゝいつては間接だ。今日の文藝家自身が社會組織の下積けにされてゐるプロレタリアである事を意識して、そこから發する止み難い叫びでなくてはならない。

不合理な抑壓に對する反抗に氣力を與へ、桎梏を斷ち切つて前進しやうとする運動に勇氣を與へるものでなくてはならない。本當の意味に於ける人間の生活を取り返すために、正義と自由と平等が、眞に吾々の生活の基調となるために、人類共同の敵に向つて、不斷の戰いを宜するものでなくてはならない。その戰ひの行進曲でなくてはならない。

要するに吾々の要求する文藝は、徹頭徹尾階級鬪爭の具であり、或はもつと端的に云つて〇〇の幇助となるものでなくてはならない。それ以外のあらゆる文藝の存在は、畢竟吾々にとつては無用の贅物である。

五

吾々の要求する文藝家は、必ずしも勞働者出身である必要はない。如何に勞働者の出身であつても、その作品が明かな階級意識の裏づけのないものは、吾々にとつては何らの意義もないものである。それと同時に、たとへ舊來の文藝家であつても、その作品が明かな階級意識に裏づけられたものであるならば、吾々はプロレタリアの文藝として迎へるに躊躇しないであらう。

如何に勞働小說とか社會小說とか云ふ銘がうつてあつても、その內容がプロレタリアの解放運動に寄與するものでない限り、現代の吾々にとつては何の用もない。殊に吾々の憎むのは、近來流行する宗敎的センチメンタリズムの文藝、人道的センチメンタリズムの文藝が、吾々プロレタリアに對する同情とか憐愍とか云ふ立場から、大それた救濟などを企らむ事だ。そして之らによつて、安價な妥協と諦らめ

を強へることは、何としても我慢のならぬ事だ。この意味に於て・賀川豊彦氏の『死線を越えて』が、二百八十版も賣れたと云ふ事は・其の罪決して輕からざるものである。

『文學は階級を超越するものだ。』（武者小路氏改造三月號）とか、『文藝の髓の髓みたいなものが、嬰兒の靈魂的な生地のまゝの心です。』『階級といふものは、云ふまでもなく後天的產物です。「嬰兒の靈魂的な生地の心」が、なんでそんなものにかゝり合ひませう。もの心つかない子供は、己の階級について一言の不平も得意げな顏つきも決してするものではありません。大人がせい〳〵生意氣になりかけた子供の問題が、私の考へる文藝の髓の髓に、爪の垢程の關りも、尚更力も・もちさうな筈もありません。とんでもない話です。』（里見弴氏同上）などゝ云ふ、神秘不可思議な御説に對しては、吾々プロレタリアは遂に無緣の衆生である。

　階級對立の明かな今日の社會生活に於て、そしてこの階級對立によつて人間らしいあらゆるものを奪はれてゐる吾々は、里見氏の云はれるやうに、「もの心つかない子供」にでも返る事の外に、「階級について一言の不平も」云はずにはゐられないのだ。このどん底に生活する今日の大多數のプロレタリアが、階級對立に無關心でゐるやうなどゝは「本當にとんでもない話」だ。（大正十一年二月二十八日）

過激法案に對する自己の立場

今野賢三

彼等の排戰が今に初まつたことではない。彼等は最初から排戰してゐたと僕は思ふ。これまで僕の眼に見・耳に聽く一切が、打下す鐵槌のやうに、僕を粉碎するか、へたばらすか、妥協するか、どつちかである事をつねに感じさせてゐた。それを感じるやうになつて僕は救れたのである。信念と良心に立つことに依つて、僕は仇敵の正體をます〳〵あきらかにした。

　僕は、彼等の過激法案を見て、彼等が排戰の對度を便儀上少しく露骨にしたに過ぎないと思ふ。そしてこのやうに露骨に出なければならなかつたのは、彼等の恐怖觀念と不安が生んだものであることは言ふまでもないと思ふ。彼等は思想までも鐵のくさりで縛りあげなければ一日の安全も得られないほど、戰慄を感じ出したに違ひない。それが僕には滑稽にさへ見える。笑ふべきではないか。反抗の效果の爲めにも……。

　しかし、僕の感情が、此の排戰に應じてゐることは事實

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

だ。默せる石が叫ばずにゐられないとでも言はうか・良心の冴えは、鋭く僕を鞭打つ。良心の命ずるがまゝにいのちをがむしやらに叩きつけたい。感情の燃ゆるがまゝに自分を投げ出したい。しかし・しかし・此の衝動を、止むに止まれぬ此の衝動を僕は壓さへる。見え透いた彼等の手ぐだに乘ることは、勝利を希むものにとつてとらないところである。僕達は先づ勝利の爲めに・對策を講じなければならないことを思ふ。

過激法案は通過するかも知れない。彼等がブルジョアの樂園である限り、彼等の防衛としては當然だ。さう是認することに依つて、僕等及び僕の心持が明確になることは、かへつて僕等に效果をあたへたものであるかも知れない。此の意味に於て・過激法案のあらはれは、むしろ喜ぶべきであるかも知れない。

さて、僕自身が、藝術を生命としてゐるものである限り藝術家に就て少しく考へて見たい。

此の法案のあらはれたことが、或る藝術家にとつて、その藝術良心に何等の反撥も起させないとしたなら、その藝術家は一切のパンが斷れても猶生きてゐられることを誇るものだ。

さういふ藝術家はあらゆる咒ひを受けべきである。

過激法案は正しき藝術家の創作心理を脅かさずにゐない筈だ。何故なれば・創作心理の自由さが、ふみにじられるからだ。過激法案をそのまゝの意味に解したならば、藝術家の存在の權利は、たゞの一刻も認められないことになる。藝術そのものに釘を打たれるよりも藝術家にとつて致命傷ではないのか。

それならば或る藝術家は言ふかも知れない。過激法案は思想の取締りだと。

言ふを止めよ。どんな藝術作品でも、作者の思想が背景とならずに生れるだらうか。しかも、創作しつゝある時は、如何なる藝術家といへども・一切から解放された自由さに於てなさるべき筈だ。誰か・創作しつゝある時國家を念頭に置き、法律を念頭に置くものぞ。

それが正しい藝術家であるならば、僕の言葉がすぐにうけいれられるに違ひない。まして、藝術家が現實に立着すればするほど、思想と感情の交錯に立たずにゐられないではないか。

過激法案とは何か。言ふまでもなく思想の取締りなのだ法律は多くの場合、人間の行爲を取締るところに存在の意

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

義がある。それなればこそ、自由とか、權利とかゞ曲りなりにも保證されてきたことになつてゐる。ところが、此の過激法案は、行爲よりも、思想に、すなはち人間の内部生活に一歩を踏み込んだ。

しかも、彼等の一味の法官が絶對の權利を持つ。法案は漠然たる宣傳の名に於て、勝手氣まゝな運用が出來る。どんな場合宣傳と認定されるか、思想に生きるものにとつて計り知ることが出來ないではないか。

今こゝに、僕が創作しようとして、自己の思想や感情を或る題村に盛つて自由に使驅したとする。その場合、僕が藝術に眞劍であればあるほど、宣傳と認定されることを覺悟しなければならないことになる。

僕は僕の立場として、此の法案が議會を通過した場合を豫想する。そして、僕は自己の信念と、良心に恥なく面接する自分を豫想する。藝術のために倒れる自分を喜んで豫想する。過去半生はあらゆる生活慾を、藝術に生きんが爲めに犧牲とした。彼等ブルジョアの奴隸であつた自分を解放する爲めに、自分は藝術に生きようとして戰つたのだ。來る可き勝利のために、今、此の、燃ゆる感情を貧しき自分の藝術に打ち込む。

若し、此の過激法案が僕の創作心理の自由をまでも奪ふ時が來るならば、僕は墓場のなかゝらでも永久の復讐を殘すことを、今から自分の魂に誓つておく。

轉居

まだ知らない方があると見えて舊社の方へ郵便や訪問客がありますから、今一度大きくブルジュアの街銀座近くに肉迫したことをお知らせします

京橋區弓町一六

種蒔き社

世界の青年に訴ふ

今まで、日本の反動政府は、其の對内政策に於て、思ふ存分の事が出來た。それは、世界の輿論が、想像以上に日本の反動政策を知らなかつたからである。それは、國が遠くとも、僕たちの胸心が世界の同志と共に躍つてゐるのに、僕たちは君たちと親しく接するの聯絡がなかつたからである。それ故、僕たちの血が如何に燃へてゐても、僕たちの力は常に孤立であらねばならなかつた。そして此の狀態が續く限り、日本政府は自由な振舞が出來るものと覺悟せねばならぬ。

世界の文明國は封建の日本に、文明である道を敎へた。戰爭がそれであつた。民族の壓迫がそれであつた。日本は仁義の僞善の爲めに、戰爭を重ねた。

かうして、日本は一躍文明國に列した。今や世界の反動政府は民族を屈服することを以て滿足せず、更に眞理に生きやうとする世界の自由人を虐殺せんとしてゐる。そして、常に罪惡の手先となるのが文明の日本である。そして、また、常に實行に忠實に、且つ深刻なのは日本である。飢えたるロシアに同情を許さぬ日本の反動政府は他の國に於て見ざるザリズムを以つて、君たちと共に眞理を求めやうとする人間を高壓しやうとしてゐる。

思想の世界主義を標榜する青年のグループである。種蒔き社も其の一つである。永く屈服の下にあつた僕たちプロレタリアは、人間としての僕たち自らの解放の爲めに、また、一日も早く世界の若い同志と同じ目的に向つて進まうとする。これは刻下の急務である。

君たちよ、日本政府の唯一の怖れは君たちとの提携である。そして、今や政府はそれを白狀した。日本政府は世界の白色恐怖と歩調を共に、ビスマルクの治下に於てすら見ざる超殺人的惡法を以つて、僕たちの將に再燃せんとする勢力と君たちとの接近をその根本から覆へそうとしてゐる。

僕たちの主張は正に危險に瀕してゐる。世界の同志よ、自由の思索者よ起て。そして、僕たちの爲めに、インターナショナルの思想のために抗議せよ。僕たちと同じ思想の兄弟よ。

一九二二年三月　　東京種蒔き社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

批評

末弘博士の永小作權

永小作權は末弘嚴太郎氏著、物權法下卷第一分冊の第六章に收められてゐる。とにかく博士は新人である。第一節の「永小作權の意義及び性質」を讀んで見ても如何に博士の物權法は通り一遍の法律的解釋でないことが解かる。小作人と地主についても博士は明確に言つてゐる。「元來文化の進歩は萬人の人格完成を意味する。他人の恩惠に依つてのみ生活し得る者は完全な人格者ではない。現代の小作人が之を喜ばないのは素より當然である」と喝破し、また加治子米權なるものに關しても、單に一部の所有權に過ぎなかつたものを地主を以て今日の所有權と同一に考へるに到らしめたローマ法流の所有權思想の持主たりし當局者の不法をならしてゐるあたりは帝國大學教授としてさすが博士の如うな新人でなければ思切つて出來ぬ主張であるが、さてその解決に於ては僕たちと全く立場を異にする恩情のみを基礎とする小作制度は最早現代の要求に適合しない事を指適して居られる博士はその解決の第一着手として賃借小作權の確立を叫び、また、加治子米權の如き地主の權利が完全な所有權として保護されるに至つた不法に對してもその解決法として特別法の制定を望んで居らるるやうであるが、ここに到ると學者は實際苦しい立場に置かれるのである。即ち、末弘博士の主張では小作人問題は結局に於て、到底賃借小作權の確立の如きもので解決せらるるものでもなく、且また特別法といつても、かかる法が議會の協贊を經なければ到底事實に於て實行し得るものでないものならば、今日の如く議會に多數の地主を見る間、遂に學者の主張も空論に過ぎないことになる。そうなると、學者の主張は概ね泣寢入の說に終るか、さなくば陰に議會の否定かのいづれにかに歸着せぬものでもない。これは極端な觀方かも知れないが、いづれにもせよ良心ある學者は不合理の法律を不合理であることの假定を以て最高學府に教授し、しかして學生は不合理の法律を不合理であると信じて學ばねばならない。學者の立場はまことに氣の毒なものなれども、學生

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の立場は更らに馬鹿氣たものである。末弘氏如き若い學者から——博士の物權法の序說で所有權を明かに認めてゐることには反對、しかし、これとても、教授であるがためにそう主張しなければならない立場にあるだらうけれど現今の法制を見ると、如何にそれが不合理で凝められてゐるかが赤裸々になることだらう」そして、それをつききわめようとすればする程、結局消すに歸着せねばなるまい。そこが確かに帝大教授にとつて困つたところだ。末弘博士の永小作權研究は、さすが、法律の社會化を主唱せらるるだけあつて、僕たちのように法律の嫌なものにまで樂々と讀ませる。そして、これが片苦しい教授や法律家が書いたものの感じをちつとも與へない。（小牧）

武者小路氏の雜感

解放三月號

それが武者小路氏の、人格の所産であるところに、此の雜感は考へさせられる。けれども、此の雜感は、武者小路氏自身より一歩も出てゐないところに、僕等と交渉はない。況んや勞働者に於て　何の交渉があらう。

武者小路氏自身にとつては、氏自身のあらはれであるだけに強みであるかも知れない。けれども、氏自身を露骨にして、御說教的に勞働者にものを言つてゐるだけ、階級爭鬪に就て正しい考察とは言へない。

氏が階級爭鬪を『利害關係の衝突』に置て人間それ自身とまるきり切り離して考へてゐる。利害關係の衝突も、人間性の一面のあらはれだといふことを考察に入れてゐない。

氏が見てゐる人間はすべて善良である。それは氏自身が善良であることを裏書してゐる。

氏の善良さは、虐げられたことのない。屈辱から來る反抗と呪詛を感じたことのない善良さである。それだから、氏には、どんな人でも皆、氏のいはいる『人間本來の性質』にかへることが出來ると思はれ、そして『利害の衝突が失くなれば一致出來る』と獨斷することが出來『資本家も人間になれる』と言へるのである。

何といふ紙をひるがへすやうなわけのない解決だらう。一切の人間の生きることを、かうした理想の境地にのみ解決點を置て安心してゐられる氏を、やつぱり現實に足を突込んでゐる人間でないと私をして叫ばしむる。

階級爭鬪は迫實的な現實の問題である。それを氏は理想の境地に高く止まつて、簡單に片付けてゐる。ほんたうに

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

血眼になつてゐる勞働者がこれを讀んだら何と言ふだらう『米一粒と生命の取り換へつこをやつてゐる俺達をよく見ろッ！』と呶鳴るに違ひない。

若し氏が理想の人間生活をさうした考察に依つて、何の懷疑もなく信じてゐらるゝとするなら、氏はあまりに『お目出度すぎる』ものではないのか。

私は氏には頭を下げてゐる。悪口言ふ氣持は少しもないが、愛を持てば持つほど、眞實を持つてむかはねばならない。私が眞實になればなるほど、氏の飽足らなさに腹が立つ。

氏は、トルストイが『天國と神の正義を求めよ、總てのものは隨つて得らるべし』と唱へながら、懷疑に生涯惱んだ生活をどう見られるだらう。トルストイの最後まで惱んだのは、人間を何時でも神と見て、そして自己本來の持つてゐる人間性のあらはれの矛盾のつまづきであることに氣がつかれないのか。その矛盾こそ、その人間性のあらはれこそ、『人間本來の姿』とは氣がつかないのか。私の人間性とは、『安逸を求めたがり、得をしたがり、快樂を慾し、苦痛をさけ、腹がへれば喰ひたくなる』その衝動を言ふのである。

武者小路氏をはなれて武者小路氏の考察がないやうに、人間性をはなれて人間の生活はない。ブルジョアは、此の人間性のあらはれとして、現在の位置を永久に保たうと考へ、プロレタリヤは此の人間性のあらはれとしてブルジョアに反抗する。私は此の、誰しもが持つてゐる人間性を、生きんとする意志のあらはれだといふ。

生きんとする意志は征服慾となつてあらはれる。それは自己にのみ絶對の所有とすることが出來る。自由さにむかつて進む。それは内部生活にむかつて求めるものと、外部生活にむかつて求めるものとが出て來る。

武者小路氏が過去に於て、間斷なく叫んだ『今に偉くなつて見せるぞ！』といふ氣持はやつぱり人間性の――すなはち生きんとする意志のあらはれだと言へないのか。此の偉くならうと燃え上る心持は、反抗が孕んだものでなくて自負が生んだものだ。自分を信ずることの強さから出發した氏が、今日を致して、夢のやうな理想論に安住してゐると」こは、氏としては當然であるかも知れない。それと同時に、第四階級の生きんとする意志は、到底武者小路氏に解るべき筈はないと言へたくなる。

人間が、あらゆる屈辱を受けた場合、人間の魂はどのや

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

うな叫びをあげるか。言ふまでもなくその屈辱をあたへたものにむかつて、徹底的な復讐に燃えるに違ひない。此の復讐に燃える魂こそは、結果を考慮のうちに入れる暇はない。先づ魂の叫びのまゝに趣くだらう。

彼等の生きんとする意念は、此の魂の叫びの瞬間に依つてでも、滿足を得ようとするだらう。今の勞働者が、ブルジョアに戰ひをいどむのはそれだ。ブルジョアが人間本來の姿にかへつたからとて、彼等が過去に於て虐げられたといふことは、その魂から拭へ去ることは出來ない。

かうした虐げられた人間性の彈力は、氏にとつて想像たに及ばないところであらう。それだから『利害の衝突』だけで、此の爭鬪を無雜作にかたづけられるのだ。それだから『資本家が惡いのではなくて制度が惡い』など〻概念だけでものを言ふことになるのだ。階級爭鬪は、現實のものであるだけに、もつと〳〵深遠な問題だ。

『人間として不當にあつかはれてゐる點が君達の强味である』など〻言はれて、い〻子になる勞働者は今の世に一人もゐない。

『悲しむものは幸ひいなり。その人は慰めを得べければなり』此のキリストの言葉で、飢えたものが、パンを喰つたやうな氣持になり得たといふことをいまだ知らない。それは信仰が足りないからと言ふならば、キリスト教が今日まであらゆる傳導方法を講じてゐながら、世の中は少しも良くならないではないか。世の中はやつぱり〇〇に依らなければ、救はれるみちがないではないか。

武者小路氏の考へてゐることは僕達にとつは最う常識だ。武者小路氏が、此の常識から今一歩ふみ出して最つと人間といふものを完全につかむやうにしてくれることを、さうしてから生れる理想に新に自分を投げ出すやうになつてくれたならば、それこそ世の中が救はれる第一歩になることを、私は固く信じる。（賢二）

新潮派の二作家

最近、新潮社派のなかから、二人の作家がほとんど同時に長編小説を發表した。それは問ふまでもなく、浪漫派の詩人として、またはゲーテの熱愛者として知られてゐる生田春月君と、嘗ては雜誌新潮の編輯者として、または小栗風葉氏や佐藤紅綠氏の代作家として竦腕を世に示した無羅夫中村君とである。

生田春月君の『相寄る魂』はその表題が示す通りに、頗る

感傷的な、また浪漫的な作品で、君の詩集「感傷の春」や「靈魂の秋」が青年讀者に愛讀されて、詩人春月の名が津々浦々までも喧傳せられたのと同じやうに、この長篇作「相寄る魂」も、到處で愛讀されることは確實である。それ程にこの處女作は甘美で、手觸りが柔らかくて、理解するのに骨が折れなくて、尚且つ其上に、氣持のよい人道的な涙がふんわりとかけてある。これで、世の青年男女がこの「相寄る魂」を歡迎しなかつたら、それは作者生田春月君の罪でなくして、寧ろ我國の智識階級の男女の罪である。卷頭第一頁からして僕はまづ驚かされた。その文章の古典的なそして血の通つてゐないやうな風物の描寫、新派俳優でも使ひさうな會話——僕はこの「相寄る魂」の第一頁から第三頁あたり迄我慢して讀んでゐるうちに、僕の心は明治三十年頃、否あるひはもつとそれ以前の小說界に引きこまれて終つた。ふと氣がついて、これは紅葉、露伴の時代の小說を讀んでゐるのではない。僕は現代大正十一年の浪漫派の詩人生田春月君の處女作を讀んでゐる筈なのだ、と反省した。そして考へて見て、時代の逆轉は獨り政治、社會のみの問題ではない、文藝界にも既に時代逆轉の實例を示してゐる、これは大變なことだと思つた。すでに鈴木三重吉氏すら、もはや時代は自分の時代ではない、日本の文藝界は既に自分の藝術を乘り越して進んでゐると決心して、潔く勇退して童話の世界に呼吸を續けてゐる今日、思ひもかけず、春月君の「相寄る魂」が發表せられ、而かもそれが木下尚江か菊地幽芳かの小說を偲ばしめる程度の逆轉であるから、既に片足を棺桶に差込んだ老人達が、これを讀んだなら「成る程、長生はすべきものだ」とつくづく涙をこぼして喜ぶかも知れない。それと同時に青年達も、この「相寄る魂」のなかに流れてゐる、人道的の甘さには大に共鳴して、君の名を更に讚歎することも、疑ひのない確實さである。時代は大に逆轉した。日本人道派の甘さを打破つて新興文壇の權威となる可き筈の新浪漫派は、却つて鈴木三重吉以前の浪漫派、乃至感傷派にとんぼ返へりをして見せたその鬪將は誰あらう、人も知る生田春月君で、その代表作が「相寄る魂」であるさうな。

ところが生田君の「相寄る魂」を去つて、中村武羅夫君の「人生」に來ると、これはまた何としたことぞ、その描寫のくどくどしさ、平板無味單調。この調子で全部十六卷の大長篇小說を讀ませられては、大抵の讀者は悉く神經衰弱にかかるだらう。これこそはトルストイを眞似そこなつた作

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の、いい標本だ。全部十六巻のなかの一部分を讀んで云々するのは、全く間違つてゐるかも知れぬが、それにしてもよくもまあ恁う克明に書いておつたものと感心する。何處で始まり何處で終るのか、また一の事件が、どれだけ全體の事件に關係するのか、まるで見當のつかぬ事件と人物を唯たらだらと毎日の日記でも書くやうに根氣よく書き續けてゐる「相寄る魂」が、春の日永に室の片隅で、すなり啼いてゐるのなら、「人生」は神經衰弱症の病人がぐづりぐづりと冬の夜を眠るでもなく起きるでもなく、不平と氣苦勞とに過してゐるやうなものである。

論より證據、トルストイの長編小說「戰爭と平和」にしろ「アンナカレニナ」にしろ、または七十八才の老齡で書きあげたと云ふ「復活」にしろ、何處に「人生」の作者に見るやうな、無味平板單調がありますか。トルストイの作の最初の第一頁を讀んだ讀者は、直ちにある暗示と强烈な興味と、そして何物をも、その眞底まで見透す作者の灰色な瞳と、その恐ろしい精神力の迫擊とを感じずにはゐない。それがあの類稀な長編「戰爭と平和」を一氣に讀みとほさせるのである。そして「人生」はどうか?。讀者は、最初の二三頁でもはや欠呻の連發を餘儀なくされるであらう。

藝術の上で、テクニックと云ふことは、つまらない末技であるかも知れないが、然し恁うなると、中村武羅夫君には、このつまらない筈のテクニックを敎へたい氣がする。それを無視して「人生」十六巻を書かれては、折角の愛讀者も悉く神經衰弱患者となつて、中途から「人生」を讀むことを放棄するに違ひないことを斷言する。

「相寄る魂」が明治三十年代の浪漫派の再現であるに對して「人生」は明治四十年代の自然派の再起である。ともに新興文壇の空氣に生れる可きものではない。大正の日本の文藝界はもつと別な浪漫的作品、もつと別な現實的な作品の生れ來ることを期待してゐる。「相寄る魂」のやうな薄明の裡ですすり泣くやうな無力なもの、くだくたしい何等の感興をも惹き起さない茶飯事の報告をは、歲十歲百歲千と積み重ねたところで、未來の人生には毫厘も寄與するところはないのである。かかる作家と作品は、自分恥ぢて過去の頹廢の裡に引下がるべきである。

「未來は吾等のものである」とは、リープクネヒトが、獨逸革命の際、スパルタカス團に向つて宣言した語である。僕等もまたこれと同じく「未來は吾等」の信念の下に蹶起しなければならぬのではないか。黄昏のうすら明りの甘いす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すり――きや、神經衰弱患者の無氣力な反省や、これらの氣分は「吾等の藝術」をして去勢させ、妥協させ、屈從させるばかりである。妥協し屈從し・而して去勢させられた作品にはもはや藝術の權威はない。それは唯のありふれた小說である。それは、そこら迄所のシイチヤンやキイチヤンを喜ばせ悲しませて、安價な感動をし而かも一時的の淺薄な感動を與へるだけの道具に過ぎない。

淺草で人情劇を見る方が、金錢に於ても時間に於ても、餘程の經濟である。そして勞力は甚だ多い。そして「相寄る魂」や「人生」を讀む程には、淺草の人情劇は、人間を神經衰弱にはをとしいれぬであらう。生田春月君並に中村武羅夫君、以て如何となす。カネ。ハツハツ、ハ（逸平）

『血に染む夕陽』（小川未明著）

世界的潮流の主流たる勞働問題が、一度生活の一角に勃興してから、論壇はかの唯物史觀を中心として、前代未聞の波瀾を惹起し、ロシヤ革命の實現は第四階級に活潑な刺戟を與へ、被支配階級者、被搾取階級者たる彼等をして、階級鬪爭に依る無產者の勝利を確證した。と同時に、從來の盲動生活の惰眠から目覺めて、玆に第四階級者は自ら血を絞り肉を削つて、その自由を障害する偶像を破壞すべく蹶起するに至つた。

先年一度わが文壇に於て、之と軌を一にして民衆藝術の問題起り・ブルジョア文藝を脅かしたが・それは最近階級藝術として現はるゝに至つて、階級藝術たるブルジョア文藝の立場を根柢から覆へさうとして居る。

是は固より、一部の現文壇の所謂ブルジョア文藝の舊套を脫却し切れ得ない徒輩、例へば田中純や廣津和郎の如き皮相的近眼者流の觀察するが如く、一時的泡沫的現象ではなく、西洋に於てはルネツサンスの運動このかた、日本に於ては近く自然主義の運動以來、生活及藝術にリアリズムの精神が現れた時、已にこの問題の當來を豫想したものであつて、文壇は今當然に行き着くべき所まで行き着いたのである。自然主義或はリアリズムの文藝は、民衆藝術・勞働小說乃至社會小說等の階級藝術の形を取つて現るべき必然の運命を持つて居たのである。

自然主義の文藝の生命はリアリズムの精神に在るのであるが、その發生の當初に於て、之を民衆藝術と呼ぶに至らなかつたのは、その當時の運動者等が「生活をそれが在るがまゝに描出する」と云ふ標語を以てしながらも、この吾

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々の社會生活のファクトとして嚴存する階級制度・階級意識乃至階級鬪爭をアズ・イツト・イズに觀て・その外面と共に內面をも・適確に全的に描出するの聰明と誠實と熱意とを持つに至らなかつたからである。「藝術は生活の全的表現である」と云ふ標語は、已に幾度か云ひ古された言葉であるが・それが我が國の自然主義の作家に於ては、決して徹底的に實現されては居なかつた。彼等の或る者（例へば田山花袋の如き）は單なる性慾の描寫を以て十年一日の如くし・さうした生活の一部の暗黑面の描寫（これは慥かに生活の事實には相違ないが、どうせブルジョア制度に立脚した舊式な超階級的藝術觀の持主には、斯う云ふブルジョアにも、プロレタリアにも共通する事實だけを在りのまゝに描いて大向ふのブルジョアの讀者のおもちやを提供するのか關の山た）それ丈には幾らか不滿な顏をして・も少し全體的な人間生活の眞相を摑まうとしても・何うしても、性慾が人間生活乃至社會活動の原動力であると云ふ人生觀と藝術は超階級的なものであると云ふブルジョア美學とに妨けられて・小ブルジョア式ニヒリズムに終始する者に正宗白鳥があるが、その他の未流未輩――「早稻田文學」及「人間」一味のグループは、之を大同小異の意味に於て、ブルジョア美學の走狗である。彼等にはまだ「生活の全的表現」の意味が徹底的に了解されないのである。性慾が生活の事實である樣に、階級意識も亦生活の事實であると云ふ事が分らないのである。

人間生活乃至社會活動を一つの鬪爭と見て（妥協とも見られるが、それはブルジョア式の見方だ）、この鬪爭意識心理よりも無意識心理により多く原因するものであると云ふ說を正當とすれば、藝術家はこの一切の鬪爭――生活の表現――行動の根本の原因たる無意識の心理の事實を、誰よりも銳敏に直覺し、深刻に意識し、正確に認識する必要がある。而して今この吾々の生活の鬪爭の原因を爲す無意識の心理に於て・その最も代表的なものは、性慾の心理と階級意識感情とである。故に現代の生活に於て・生活の全的表現を志す藝術家に取りての最大關心事は、この二つの心理的要素の實在と云ふ事である。この二つの何れの一つを無視しても・その藝術 生活の全的表現とはなり得ないのである。性の鬪爭と共に階級鬪爭は、吾々の生活に於ける掩ふべからざる事實であり、實在である。

所謂ブルジョア文藝家は・性の鬪爭の實在のみを信じて階級鬪爭の實在を否定せんとする者である。そして來る日

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

も〳〵、戀の三角關係と云つた問題を小說評論の材料として、ブルジョア雜誌、新聞から、原稿料を少しでも餘計に貰ふ事ばかりを考へて居る癖にして、「文藝は階級を超越する」と、大層立派さうな、而し高山樗牛に逆戻りした時代錯誤のブルジョア美學を、頑迷にも保守しようとして居るのである。「早稻田文學」及「人間」派の一味徒黨、例へば、本間久雄、宮島新三郎、田中純、里見弴の諸氏の反省を促して置く。藝術が階級意識とは「何のかゝはりもない」など云つて居られた譯のものではあるまいと思ふ。

　彼等はややともすれば、藝術の永遠性と云ふことを楯に取る。之はブルジョア藝術がその存在を肯定する唯一の論據である。――人間生活の存在する限り、性慾は滅びない性慾の存在する限り社會生活は滅びない。故に性の鬪爭を題材として發展する我黨の藝術は永遠不滅であると彼等は云ふ。そして、階級は一時的なものであるから、何時か階級の滅びる時が來る階級が滅びてしまへば、階級鬪爭を題材とする藝術は、同時に滅びるであらう。即、階級藝術には永遠性がない。永遠性のない藝術は藝術として價値がないと彼等は云ふ。

　併し、それ位の物の道理が分らずに、或はそれを知らずに、階級藝術を論じ、或は之を主張したりする樣な者は、恐らく一人も有るまいと思ふ。階級藝術に於ては、勿論、性慾――一層廣義には人間性の實在を肯定するのである。そしてそれが藝術の重大な要素であることをも承認する。それ所では、今日に於ては、吾々の藝術上の問題として取扱ふには餘りに分り切つたツルイズムであるが故に、敢てそれを問題として取り扱はない迄の話だ。リアリズムの精神が次第に深刻になり徹底するに隨つて、人間性の表現だけを以て藝術の能事了れりとする藝術觀は、吾々から見れば、恰も子供の時代におもちやとして喜んだ事のある竹馬を見る樣なもので、餘りに幼稚で安價なものとなつたのである。吾々の現在の生活意識、感情は、なまやさしい竹馬式藝術觀に依つて造られた竹馬には滿足しきれなくなつたのである。吾々の生活意識、感情を最も如實に代表するものは、性慾を描いては、階級意識であり、階級感情である。吾々は何としても、人間性或は性慾乃至はかの人道主義者に等の謂ふ所の「愛」の表現だけを以て、生活の全的表現だとは思へないのである。性慾や愛や人間性を徹底に自由に現し得る機會と可能性とを有する者は今の社會に於てはブルジョア階級、支配階級、搾取階級に在る者に限られ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て居る。性慾、愛、及人間性の表現を以て、生活の全的表現であるとして、安心し、滿足して居られる者はブルジョアに限られて居る。故に斯かる藝術觀の下に製作される一切の藝術を稱して、ブルジョア藝術と呼ぶのである。それはブルジョアの生活にのみ通用し得る藝術であるからである。

一切の行動を金に依つて支配されて居るプロレタリアは性慾の表現に於ても、人間性表現に於ても、乃至は愛の表現に於ても、亦金に依つて制限され支配されるのである。金に依つて人間の自由行動が制限され、或は支配されると云ふ事は、人間生活の一大矛盾であり、侮辱である。斯かる矛盾と侮辱とを最も痛切に感ずる者はプロレタリアである。斯くしてプロレタリアは、性慾の自由の表現を肯定し愛及人間性の自由な表現を肯定するが故に、それを裏切る金の制限、支配に對して、絕えず反感と復讐の念を持つ者である。隨つてプロレタリアは、金に依る行動の支配、制限を眞向から是認し肯定する金權者、資本家に對して、絕えず憎惡と否定的感情とを有する者である。多くのプロルタリア、それを意識して表現しないとしても、無意識に生活に內包し、或は無意識に生活として表現し、或は行動として實行する。それは性の鬪爭に於ける多くの表現と同じく、多くは無意識の表現であり、生活である。而して是は性の鬪爭に對して云へば、明かに階級鬪爭である。斯かる階級鬪爭の事實を明かに意識して、それを藝術の形に於て表現すれば、それは慥かに階級意識の藝術即階級藝術である。小川末明氏の藝術は此の意味の階級藝術であると云へる。

『血に染む夕陽』は末明氏近作の短篇集である。私は今その中の個々の作品に就て細かな批評をする暇を持たないが末明氏が如何に敬愛すべき吾等無產者の友人であるかは、この短篇創作集を通讀する者の、誰れでもが感銘し、看取しずには居られない事であらうと思ふ。擧世滔々として文藝家がブルジョアの玩弄物を製作して、傀儡にして商賣雜誌の賣れつ兒となり、一代の藝術家面らをして時世得顏に天下を睥睨して居る厚顏無恥な職工文士に爲り下らうとして居る時に、獨り末明氏は、飽迄も無產者の友人として、敢然たる步みを續けて來た。その足蹟は最も虔虛で、健かに、この『血に染む夕陽』に依つて印刻されてある。その氣分に於て、感情に於て、音調に於て、及色彩に於て、それ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は慥かに、初戀に惱む白百合の樣な令孃のものでもなければ、征服者の榮えを樂み、强者の威を誇る傲慢なブルジョアのものでもなければ、現社會の惡制度と野蠻極まるブルジョア文化と暴戾なる資本主義文明と、それらに依つて醸成される無產者の憤りと呪ひと樣々な不幸と悲哀と忍苦とを知らない親掛りの脛つ嚙りのノツポな遊野郞又は夢中になつてブルジョア學問の鵜呑みをして、試驗勉强に頭を痛めて居る學生達のものでもない。それは全く血みどろな生の戰ひに疲れきつた夕陽の樣な色をした無產者のものである。

賣れる賣れないは藝術の價値評價の標準にならない事は勿論だが、未明氏の小說がほかの作者家のものほどよく賣れないと云ふ事實を見て、未明氏の藝術が下らないものだと思ふ樣な早計な馬鹿な讀者が無いとも限らないから、一寸序でに言つて置くのだが、未明氏の小說は社會上最も多くの購買力と讀書の時間とを持つて居るブルジョアやそのお孃さんや細君や乃至は學生、女學生などには餘り向かないもので、寧ろ、本など買ふ金もなければ、それを讀む時間もない樣な無產者向きのものだからである。未明氏だつて甘い戀物語でも精出して書けば、今のブルジョア文化に心醉して居る女學生や若い小ブルジョアの細君位には持て囃されるだらう。小說でも書く位の者はその位の事は皆知つて居るのだが、それを敢てやらない所に、未明氏の未明氏たる「個性に對するシンセリテイ」を吾等は認めない譯には行かない。

今の社會では、無產者は誰れでも人格を賣り物にしなければ生きて行けない樣に、藝術家も彼が無產者である限り藝術を商品にしなければ生きて行けない。所で、未明氏の藝術は、之を商品としてブルジョアの歡心を買ふ爲めには餘りにムキで一本鎗で、商賣氣がなさ過ぎる。藝術を商品にする事を心から否定してしまつて居る——資本主義文明の中毒で、藝術的良心の痲痺して居る去勢された藝術家、と云ふよりも、純然たるブルジョアの幇間を以て任じて居る似而非藝術家、墮落した文藝家の跳梁跋扈して居る現代の我が國に於て、未明氏の存在は實に我等の珍重措く能はざる所である。その純潔な良心、無垢の感激、潔白な情操それに映出される俗惡なブルジョア文化、暴戾な資本主義文明、虛僞な社會制度。未明氏の作品に醜惡な社會が描かれ、讀者がそれに依つて暗い印象を受けるのは、未明氏の心の美の反影である。未明氏は暗い作品を書く事に依つて

常に明るい心の美を創造して居るのである。その作品に「醜」が描出されるのは、作者の心が「醜」であるからではない。社會が「醜」であるからである。現代に於て、「醜」を描出する作家は、即心の美を表現する者である。讀者は未明氏の暗い作品を透して、社會の醜惡を感ずるであらう。それは併し、多くのブルジョア文化に痲痺し、資本主義文明に中毒して、人間の最もナチユラルな性質を失つて本當の「醜」を醜と感じ得ない程、「醜」に對して無感覺になり、無神經になつて居る讀者には、恐ちく、殆んど、「醜」と感じ得ないものであるかも知れない。それならば尙更、讀者は未明氏に依つて描出された「醜」を素直に醜と感じて、讀者自らが自らの心に、新たな嬰兒の心が持つであらう樣な純眞の美を創造する義務がある。

現代の社會に存在する法律や制度は、悉く皆、人間が人間を信じ得ないが爲めに造られた野蠻未開の社會狀態の遺物である。斯う云ふものが何時迄も社會に存在して、人間の生活支配の暴威を逝うして居る樣な社會狀態は、決して好い社會狀態でもなければ、美しい生活狀態でもないのである。そこで藝術家なる者が現れて、この愚かしき社會狀態に慨憤し、斯かる理不盡な不都合な、眞の文明人の生活に取つては全く存害無用の長物である所の、野蠻未開の文明の遺物である一切の制度法律の撤廢を要求するのである。

藝術はその本質に於て一切の支配制限を拒否するものである。その意味に於て、藝術はその精神に於て、志向に於て、當然、ソシアリステイツクであり、アナキステイツクなものである。彼が眞正の藤術家であればあるほど、彼は眞正のソシアリストであり、アナキストであるのが當然である。自ら藝術家と稱しなから、そのソシアリストたり、アナキストたる事を否認するは、馬鹿か、狡猾か、臆病かであるからである。藝術家としての未明氏がソシアリストであり、アナキストてある樣に、人としての未明氏がさうであることを自ら表明したのは、寔に當然の事である。

現代の如き野蠻未開極まる社會の現狀に甘んじて、日を送つて居る樣な者は、初めから藝術家ではない。考へて見給へ。社會の現狀に滿足して居られる者が、何の必要あつて敢て藝術を製作するのか？それは藝術の名を犯した小手先の遊藝ではないか。之を稱して我等はブルジョア藝術と呼ぶ。小手先の器用を以て生命とし、技巧の冴えを誇りとする斯かるブルジョア藝術を製作する者を藝術家と呼ぶことを、私は斷じて否認する。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

敬愛する未明氏よ、幸ひに健在なれ。（光造）

映畫 ジャンク、活劇旋風兒

千代田館上映

屑屋に奉公してゐる若者である。生れながら世の中の一切に無頓着な男である。そしてその無頓着な行爲が、無邪氣な滑稽となつてあらはれる。此の若者が屑をあつめながら往來に馬車を驅る。すると、貧乏伯爵が惚れてゐる或る令孃と自働車でやつて來る。若者の屑をあつめる棒は磁石の作用で鐵物を吸ひ付ける。それで伯爵の自働車の機械がその磁石力のためにこわれて了ふ。

屑屋の若者は或るこわれた自働車を手に入れてその伯爵の自働車の機械を据へ付けて乘りまわす。そして伯爵といつしよだつた令孃をその邸に送り屆ける。後に伯爵の留守中、伯爵が妻に內密でかくしてある金のはいつてゐるヅボンを、拂へ下げ品として買ひとる。

筋はありふれたつまらない甘いものである。が、私の興味は、そのヅボンの金を屑屋の若者がちよろまかすところからつながれた これが喜劇中の人物でなく、普通の人がこんなことをしたなら、すぐに盜みとなる。そしてヅボンの金をちよろまかす場合でも、內心のやましさからすばしこい眼をはたらかして一寸あたりを警戒して自分のものにする。その場合『盜んだぞ』といふ心持のはたらきがあきらかに讀める。ところが、喜劇中の此の若者は平氣に、自然に、それが當然のことのやうに無邪氣に他人の金を自分のものとしてゐる。

かういふ場合觀客は、『あいつどろぼうをはたらくんだな』と思つて見てゐるものは一人もなからう。たゞその自然な行爲に微笑んでゐる。私の興味は此の點にある。此の若者の自然さが、いはゆるその無頓着なところが、因襲の道德的觀念をわけもなく超越してゐる。

此の若者のやうな性情を持つて生きるならば、世の中の權力も金力もなにものも無邪氣で認めないことになる。此の若者は生れながらにしてかういふ性格の持主だとすると生きることに絕對の自由の所有者だと言ひ得る。

そして此の滑稽な、常識的な眼で見ると白痴とより見えない男が、なんの遠慮もなく伯爵の名刺で令孃の立派な邸宅に飛込んでゆつて、邸內を勝手氣まゝにひつかきまわしてつひに、無産な屑屋の若者が、かへつて令孃に惚れられ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る。白痴のやうなすべてに無頓着な滑稽な男が、何等たくらまずに世の中の勝利者となる。觀客はたゞそれを笑つてゐる。私が若し、屑屋の若者の心持で觀客を見るならその笑つてゐる觀客をどんなに笑つてやりたいことだらうむしろ惘れんでやりたい。縛られるにいゝだけ縛られて、こればつかしもうごきがとれなくなつてゐながら、そしてうめきながら、自分達の魂が欲する自由に眼つぶしを喰はして、自由に生きるものを笑つてゐる。若し現實にかうした若者が在りとすれば、今の世の人の多くは白痴あつかへにして手を拍つて笑ふだらう。

かうした喜劇を見ても、理想的な吾等の喜劇をつくらなければならないことを感じる。そしてブルジョア制度のために魂を拔かれてすつかり道化役者となつて喜んでゐる。白痴以上の白痴なすがたをまざ／＼と彼等に見せつける涙の出るやうな喜劇をこしらゐなければならないことを感じる。

次に旋風兒は、米國アロー會社發賣ジャックホキシー氏主演のありふれた筋の西部劇である。カーボーイ・ジャックの父の財産を横領したターナーは、一人の娘の愛にうつゝなくなつてゐる大きな牧場の經營者である。ジャックはその奪はれた財産をとりかへして、故父の無念を子に依つて報ゆようとしてゐる。そして、敵の娘と生涯知らずに結婚生活を送ることになる。

此の映畫に依つて考へさせられたことは財産を奪はれた故父の無念をうけついだ子の猛闘ぶりである。

觀客はどうして、あの西部劇を愛するか。あの馬上にピストルを擬してすべてを蹴散らして山野を駈けまわるカーボーイを愛するか。

どうしてあの殺伐たる映畫劇にむしろ壯快味を感ずるのか。それは現代の人達の胸の底になにかしらさうした活潑な、小氣味よく何かにぶつかつてゆくものを、見事なぶちこわしをしきりにあこがれてゐるものがあるのではないのか。自分達はさうしたあこがれをいつぱいに抱きながらも、どうすることも出來ない弱さの反映として、あゝした火花の散るやうな活劇映畫を求めるのではないのか。若しさうだとしたなら、若しこゝに、ブルジョアに奪はれたものを奪へかへすために、失はれた自由と權利を奪へかへす爲めに、猛然と戰つて、ブルジョアを木葉みじんに蹴散らす映畫が出來たなら、觀客のうちの虐げられてゐる弱き者は、自分達の眞のすがたをさながらに見せつけられて、は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

じめて眼醒めたやうに弱さから强さにひるがへつてゆく導火線となるだらう。

かうした映畫は、現在の映畫の題材が實人生に求めらるれば求めらるゝほど、必然にうまれるべきものだ。

しかし　現在に至てかうした映畫は求め得られない。今の映畫では僕達の血は湧かない。

ほんたうに僕達の血が湧くやうな、ほんたうに泣くことの出來るやうな　ほんたうに笑ふことの出來るやうな映畫は、種蒔き社でも振ひ立たなければ、つくらるべき筈はない。僕達にあたへられた仕事の一つは、何よりも先づ映畫であることをも、切實に考へなければならないと思ふ。

（賢三）

民衆よ、さあ一緒にならう！……どんな人種の民衆でもいい。罪の多少を問はない。みんな血に染つて苦んでゐるのだ。禍をともにする兄弟たち！

ロマン・ロオラン

飛び行く種子

種蒔き社から發行する純文學的思想のリフレットです。毎月何回と限りません。出來るだけ多く出しますから種子を蒔いて下さい。村の隅々まで、國の外まで。

一、兩院議員に與ふ　小川未明・平林初之輔

二、暗殺されし人民に（近刊）　ロマン・ロオラン

三、我が子に與ふ（近刊）　アンドレア・ラツコ

（定價　一部一錢）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

三月十三日夜の雜話（ダントン劇稽古後）

（ガンヂ氏逮捕を知つて）

小牧、この十五日から愈々、英國の國旗が市場に出るさうだ。小學校には英國歌の試驗があるさうだ。

淳三、さうか。それは大變いゝことだ。が、印度ではガンヂがいよ／＼逮捕されたと、今日の新聞に出てゐたよ。

雨雀、ガンヂを何うするか見ものだ。ヒリツピンもビルマも動き出してゐるさうだから面白い波が起るかも知れないぞ。

小牧、それに〇〇の………。

お客、無抵抗主義もあれまで行くと凄いものですね。原始宗教の持つてゐる力はあんなものだつたんですね 佛教だつてキリスト教だつてみんな然うです。一體日本に宗教があつたか疑問ですね。

虎雄、若し宗教の存在を肯定させるとすれば、現代意識の名のもとに一括せられる下層民運動の信條あるのみだ。

正夢、言ふこたないや、眞赤なお腹の圓球の靜物さ。

弘二、君が靜物といふなら、俺は表現派の人物畫でも見てゐると言つとかう。

初之輔、表現主義の極致は全面の赤色かネ。

賢三、ガンヂ氏に無智な僕が今、こんなことを考へたよ。あらゆる生活から、自己自身からさへも、自己を沒し去つて、完全以上に自己が生きる場合があると。しかし、僕の言ふのは生きることに眞劍であればといふのだ。見えない力がやがて大きなかたちや火を生む。

光造、ガンヂの無抵抗主義ば非常に積極的な徹底的なものだといふ事は、賀川や、倉田や、西田の樣なブルジョア文化に依つて去勢された骨無しの、獨善的な逃避的な、ブルジョアの惡制度を擁護する爲めには此上もない好都合な宗教を賣りものにするやうな、ごまかしものでもなければ、伊藤證信のやうな、人間を愛の奴隷にする、無我夢中の愛でもないことはたしかだといふことだ。それは彼れがあれだけに生活全體をうごかしてゐる事實が何よりそれを證明してゐる。（赤簾）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

世界欄

飢ゑたるロシアの母親より世界の母親たちに

一月十六日のマンチエスター・ガーディアンは次ぎの檄文を掲げてゐる。

「私達、この冬病魔と饑餓に溺してゐるロシアの母親たちは、私たちの罪のない子たちが私たちと同じ運命はならぬために、私たちの子たちを引取つてくれるように、世界の民衆に嘆願する。私たちとして、自分の子供たちと自分から望んで永久の別を告げることは人間として、忍びないことです。それでも世界の人たちに嘆願せねばならぬ理由は、今となつては死から免れさせるといふよりも考がないからです。子供を失つたあなた達、子供に死なしたくないと思ふあなた達、子供に死なれた嘆きを持つあなた達、まだ生きてゐる者たちの名に於てどうか私たちを助けに來て下され。私たちのことはどうでもよろしい。私たちはもうどうにもならない。凡ての望が墟えました。しかし私たちば母として、もしも私たちの子たちを救ふことが出來ましたら、それはこの上もない賴の綱とするよろこびなのです。どうぞ私たちの子を引取つて下さい。」

なんといふ淺ましい、悲慘な事實であらうわれわれがかりそめにも自分の身になつたらどうだらう。それに同情もせぬ國は鬼のやうな惡魔だ。世界の列强が飢えたるロシアよりも更に利權に飢えてゐることはこれだけでも十分に證明される。

勞農承認一番槍

『安心して喧嘩しろ、骨だけは拾つてやらう』と云ふ博愛平等の權化、萬國赤十字はどうした風の吹き廻しか最近大いに男を上げた(?)ものだ。ソヴィエット露西亞赤十字の承認だ。詳しく云へば、モスコー赤十字を露西亞赤十字社として認めて萬國赤十字に加盟せしめたのだ。かくして露西亞飢饉救濟の端を開かうとするらしい。兎に角形式乍らも列强ブルジヨア政治家連の先手を打つた譯だ。承認問題經緯は昨年十月十五日付、在ジエネヴア萬國赤十字委員會長から萬國赤十字中央委員會宛の長い手紙に書かれてゐる。ここに書く必要もない。

因にソヴィエット露西亞赤十字社は中央委員會の支配の下にあり、加盟者は人種、男女信教、政見の如何を問はずソヴィエット共和國全領土に活動してゐる。尙舊露西亞赤十字社は國外にあつて亡命反過激派連中救護の任に活躍してゐるさうだ。それでこそ赤十字の赤十字たる所なるべしだ。『骨だけ拾つて』やつてくれ。

第二ブラックホール事件

昔ブラックホール事件でひどい目に遭つた『居直强盗』が百六十有餘年の臥薪嘗膽、遂に仇を討つた事件だ――利子までつけて。話は

ちと審問に附する。昨年の十一月十九日の事何とか一揆の罪名で百名のモップラ人がチルールからベラリーへ汽車で護送されたがチルールから約八十哩ポタヌール驛を過ぎた眞夜中頃、五十六人の窒息者が發見された。その後手當の甲斐なく八人のものが後を追つた。

――印度はマドラス州の出來事。彼等は密閉した狭苦しい貨車にぶち込まれて、水もなく食物もなく立通しで八十哩運ばれたのだ。時は十一月だが印度も印度、南印度の赤道直下の事だ。想像に餘りある。かのマコレーをして文名一時にあがらしめたブラックホール事件の比ではない。ある人の比較に依ると、ブラックホール事件では犧牲英人百四十六人、洞内面積四百平方呎、一人當り二・七四平方呎だつたが、今度はモップラ人百名、貨車内面積二百八平方呎、一人當り二・〇八平方呎だと云ふ。政府筋ではその貨車は石油や有毒品の搭載に用ひた事がないと主張してゐる。室内(檻内だ)には通風裝置もあつたと云ふが事實穴は皆塗りこめられてゐた相だ。生きんとしてもがく百人の犧牲者。何と云ふ慘事だらう。敢へて現代のマコレーを俟つ必要がない第三、第四のブラックホール事件を僕たちは見るかもしれない。併し僕たちはハッキリ知つてゐる、『居直强盜』の斷末魔を。祝奉迎：

……

トロツキーの創作

トロツキーの創作が最近發見された。同創作は一九一五年十一月の作であるが、彼はその頃パリからほど離れたセーヴルに住んでゐた。そして、その背景もセーヴルになつてゐる。極く單純な小さな創作であるが、それは文學上の興味として許りではなくその頃のトロツキーの思想と、その時代の空氣をうかがふことが出來る。マルセル・マルチネはその作について言つてゐる。「その頃極く僅かのフランス人は勇氣をもつて眞理を吐露し切れずにゐた。レオン・トロツキーは亡命のロシア人でありながら、あの頑強な赤色ロシアにこの人ありと知られた、血も泪もなさそうなトロツキーがあれを書いたのだ。トロツキーは戰爭によつて受けたフランスの男や女の苦惱を自分ごとのように感じてゐる』人としての冷血を批難する人々はその一遍を讀むならばトロツキーはどんな感情の人であるかが百の新聞記事よりもいゝ證據になるだらう、僕たちはそれを號外として發表することにした。

民衆のための美術館利用法

Samuel F. Darwin Fox はリュマニテ紙上で博物館をもつと民衆のために有効に使用すべきことを陳述してゐる。是の概略は次の如きものである。

美術は社會生活に於て偉大な任務を有してゐる。これは民衆をして喜悦と理想を味はしめるものだ。だから民衆をしてあらゆる時代あらゆる國民の美術に接せしめなければならない。不幸にして今日の博物館の制度は甚だよくない。第一陳列法もまづいしそれにカタログが完全でない。一般に博物館のカタログは作者の名と美術品の題目と、陳列の順序だけしかついてゐない。いくらそれを見てゐても、その美術品のいゝところもふるいところも、流派も、時代との關係も、民衆との關係も何も分りはしない。それは專門家にだけしか分らないもので、一般民衆には無關係なものだ。だから今日では民衆の大部分は、勞働者でも、被傭人ても、またプチブルジョアでさへも――美の趣味と學問とを知らないのだ。それで各の繪なり彫刻なりに

イ、作家の名前、生死の年月日、生死の場所、その屬する流派
ロ、その作家の大體の傳記
ハ、陳列作品の題目とその作品の説明
ニ、その作品の歴史

をかいた説明書をつけるといゝ。さうすればその繪なり彫刻なりは自身で自身を物語るやうになつて來る。云云。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

地方欄

小田原より

先般、小田原局の郵便集配人が、再三勞銀値上運動をやつた事が新聞紙に依つて報導されたのは事實だ。が、結局、今に至るまで、所期の目的の貫徹には至らないで　やる度びに何時も權力者の脅迫と懷柔との爲めに、脆くも、グニャ〱ッと揉み潰されてしまつた。實にどうも齒痒い程腰が弱い。いや、腰が弱いのではない。それは唯一つの決心が足りないのだ。一致團結の決心が足りないのだ。何でも共同一致團結してやりさへすれば、こんな事は造作もなく成就してしまふ事なのだ。お上でも、皆が共同一致團結して、生活改善の事に當るのは、お奬めになればつても、決してお咎めにはならない筈だ。郵便事業は社會の一大公共的事業であるが、それを善くするには、何よりも先づ、その直接の事務並に勞役の任に在る郵便事務員並に集配人の生活が善くならなければ、何にもならない。先づ自分自身の生活の幸福を圖らないで、郵便の公共事業をやつて居るのは、啻に自分自身に對して不忠實であるばかりでなく、社會、公共に對しても、不忠實此上もないものである。

僕等の現實の生活は、今や殆んど全く生活の自由を奪はれ、身動きも出來ない程の窮境に押し込められて居るのである。さうであつたればこそ、さすがに辛棒强い僕達も、何とかこの苦しき現狀から脱却しようとして、先般勞銀値上げの運動を企てるに至つたのだ。

それは一體、誰れから與へられた力であつたか？　誰れの命令に依つて動かされた力であつたか？　誰れから與へられたのでもない誰れから動かされたのでもない。それは皆僕達自身の生活の地べたから湧き出した力であつた！　それは僕達がこの社會に於て自由を得んとする自由の力であつた！　而も僕達は今、この自由の力を壓迫され、それを奪はれて居る。

抑も誰れがこの僕達の自由の力に干渉し、それを壓迫し、それを奪つたのか？　僕達からこの自由の力を奪ふ絶對の權利が、誰れに與へられてあるのか？　誰れがそれを許したのか？　諸君！

か？　而もそれは國家の名に於て是認されて居るではないか？　若しそれが國家の名に於て是認されるものであるならば、個人の名に於てもまた正當として是認さるべきではないか？　何となれば、國家は元、個人の正當行爲を保障し防禦する爲めの機關であるからである。しかのみならず、暴力に對して自發的な抵抗能力を悉く、無抵抗の骨無しは、亡國の民として、國家は常に之に對して鞭撻を加へつゝあるではないか？

而して僕等が、この暴力に對して無抵抗である限り、僕等の生活の現狀は、永久に何うにかされる見込はない。何となれば、それを爲す者は、僕達自身

以外に何者もないからである。僕達がそれを爲さない限り、僕達の自由は永久に奪はれる暴力は際限もなく僕等の生活の上に暴威を逞うして、僕等の自由を蹂躪する。

〇

最近、小田原局集配人某氏は、當地在住の加藤一夫氏宅を訪問したと云ふ理由の下に、局長から、現職辭職の勸告を受けたのである併しながら、某氏は、局長の辭職勸告が、職務上の失態と云ふが如き、當然の理由からでなく、勤務時間外に、一私人を訪問したからと云ふ理由であるので、それに對して何とも應諾のしようもなく、加ふるに、突然の退職は、無產者たる某氏の糊口の道を杜絕する一大問題であるから、甚だしき不安と苦惱の境地に、某氏は目下彷徨して居るのである。

是をしも暴力の迫害と云はずして何であらうか？　暴力は今、斯くの如く我等無產者の上にその暴威を逞うしつゝある。某氏は今、勤務外の時間に於て、一私人を訪問したと云ふ丈の理由の下に、將にパンを——生活の道を奪はれんとして居る。——それで好いであらうか？　斯う云ふことは正當だとして、如何なる場合にも許さるべきことであらうか？若しそれが正當として許されるものであるならば、某氏以外の他の事務員、集配人等の勤務時間以外に於ける自由行動は何うなるであらうか？『小田原郵便局員たる者は、勤務以外の時間に於ても、私人の訪問を許さず』と云ふ規程も亦正當として許されなければならないではないか？　勤務以外の時間に於ける私人の訪問は、即ち、自由の時間に於ける自由行動ではないか？　故に、若しさう云ふ規程が正當なものであるとするならば『局員たる者は、勤務以外の時間に於ても、一切自由の行動を許さず』と云ふ規程が設けられたとしても、それを正當として認めなければならない事になるではないか？

併しながら、何うして斯う云ふ規程を正當なものとして認めることが出來るか？　それは實に人間を絕對に奴隸視し、個人の自由を絕對に無視した惡制度ではないか？　そして事實に於て局長は、某氏に對して斯かる理不盡なる制度の適用を敢てしようとしたのである。若しそれを斷行するとすれば、甚だしい人權の——生存權の蹂躪ではないか？

さう云へば、局長の方では、加藤一夫氏は他の一般の私人と異り、當局に依つて社會主義者と目されて居る人物であり、さう云ふ社會主義者と往來する者は、局員として雇用しない事と云ふ其の筋の注意があり、且つ局の內規にもなつて居ると云ふかも知れないが、當局が加藤氏を何と見ても、それは當局の勝手として、加藤氏は一個の人間でもあれば、藝術家でもある。一個の人間として、或は藝術家としての加藤氏と僕達が往來してはならないと云ふ權限が何處に在るか？

只一個の名士としての或は知識階級者としての加藤を訪問したとしたならば、局長の所謂當局の注意にも、內規にも觸れる所以がないではないか？　例へば、それがさう云ふものに觸れるにしても、局員の勤務外の自由行動に對して、それに干渉し、それを壓迫し或はそれに威嚇を加へて、局員を自家の奴隸扱しても好いと云ふ權限が何處に在るのか？社會はさう云ふ權限を局長に認めるであらうか？　さう云ふ事をした上に、一無產の青年に辭職を勸告して、そのパンの道を奪ひ、その生活を生死の境へ追ひやり、人生の路頭に迷はす樣なことをしても、社會はそれでもその局長の態度を横暴でないと云ふであらう？　それを人間の暴力でないと認めるであらうか？

若し何うしても局長として、その筋の注意と內規とに對して、局員某氏なる者を辭職させなければならないものであるならば、少くとも、さう云ふ場合には、彼れに對して半ケ年位の生活の保障を與ふる公規或は內規を設けて然るべきである。それでなければ、他の局員が何うして安んじてその職に在ることが出來るか？　それをしも爲さないならば、き

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なきだに日頃薄給の不安に居る局員の生活は何うなるか？　某氏に加へられた様な暴力が何時自分の眼の前に降り懸つて來るかも知れない不安な運命を見詰めて居る局員の生活は何うなるか？　局員の心を益々不安にすればその生活は益々惡化する。その生活が惡化した時、その結果は何うなるか？——

世の富める者並に權力者よ、卿等と毎日直接の交渉を持つて居る郵便集配人並に事務員の生活は、斯くの如き暴力に依つて虐げられつゝあるのだ！　卿等は是等の郵便局が、毎日朝から晩まで、長い時間、卿等の爲めに營々として奴隷の如き勞役に從事することに依つて、幾らの生活費を得つゝあると思ふか？　彼等は實に、それに依つて、卿等が毎日享樂しつゝある様な文化的な生活は勿論、衣食を充たすことすら出來ないのだ。そしてそれは今の制度が續く限り、永久に何うにもならない彼等の現實であるのだ！　だから、制度の改革——勞銀の値上げ、勤務時間の短縮、それが彼等の生活に取つて何よりも重大な當面の急務となるのだ。それだのに、卿等は何時でも、自分達の利己的な安易な立場から、彼等の汲引ならない命懸けの要求を、好い加減に誤魔化したり茶化したりしてしまふ。併し何時迄もさう云ふ誤魔化しは通らない。

岐阜の農村より

昨秋の米作減收は地主對小作人間の紛擾を益々多からしめ、然も該問題は全國共通となり殆んど紛擾の影を止めざるなきの有様となり、或る地には血を見る悲慘事を演出し、他の地には耕地の返還を餘儀なくされ、飢と寒さに惱され只管無產者の悲哀を感じたことは否む可らざる事實であつた。

之が恐らく昨秋來の農業界の狀態だつたに違ひない。

現在に於ける小作人組合の狀況を見るに昨年初頭に於てば其數二百數十と聞いたが恐らく現在は三百を越してゐると思ふ。此の外小作爭議のために一時的に組合を作るもの、少なからざることも記憶せねばならない。而してその活動範圍は大別して、

1　地主に對抗して小作條件の維持改善を圖る目的

2　小作條件の維持改良及び農事の改良發達を圖る目的

3　小作人間の協調及び農事の改良

等である。然も表面上に現はれたる點よりして地主に對抗し小作條件の改善維持を圖るものが其大部分を占めるのである。然し乍ら表面その對抗する目的を揭げてゐないにしてもその內實は依然地主に對抗するものが少なからず存在するのである。却つて一致協同して地主に對抗して戰鬪を開始するために存在するに外ならぬことは又否む可らざる事實である。

之に反し地主組合の狀況は如何であるか。其數に於ては遙かに多數を占め、その組織に於て又優秀を示してゐるのである。而してその目的とする所は

1　地主の利益擁護又は農事の改良を圖ること

2　農事の改良と共に小作人の保護奬勵を圖ること

3　農事の改良又は地主小作人の相互共同利益の増進を圖ること

等にして之等地主組合は表面小作人の保護奬勵にあるが、そは決してその事實を語るものではない。一度び小作爭議が起れば之等の地主組合は直ちに起つて之に對抗し、自己の利益擁護のために飽くことなき心情を暴露するのである。然も彼等地主組合は資力の豐富なると知識の充足なることゝに依つて愈々容易に彼等小作人を服從せしめ、或は蹉跌の生じたるときは刄を執つて之に對抗し小作人の追從を許さぬのであつた。

個々の不平不滿の叫びは容易に搔き消される、この缺陷を補ふためと地主側の統一とに對して必然小作人側の團結の必要を感じ、玆

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に團體運動が起る樣になつて來たのである。然し乍ら地主組合はその社會的地位よりしてその組織は益々發達し、單純組合より統一した、復雜な、擴大な、而も有力な組合として漸次發達して行く傾向を示すに至つたのである。小作人組合も必然之に對抗し益々その傾向に向ふべきは阻止するも得べからざる事實である。然るに現在の小作人組合は極めてその存在の薄弱なもので而も爲政者は之を阻止せんとし、又解散を命じ、農業警察を設置して之に當らしめてゐるといふ有樣で時代錯誤の施設も玆に至れば最早や言ふべき言葉を持たないのである。

岐阜縣下に於ける小作爭議は歴史的にも顯著な事實であるのみならず、その經驗に依つてその運動は又極めて猛烈なものであつた。然し昨秋はその事實を一變し聊か下火の觀があつた。然し乍らその事實は決して下火ではない。寧ろその內部的戰鬪にあつたのである即ち地主の憎惡と呪咀とに追ひかけられた小作人は昨秋十月十五日改正制定せられた岐阜縣警察犯處罰令に依つて彼等が頭上に阻止と壓迫と干涉が加へられたからである。

それに依ると、

一、强イテ組合其他ノ團體ニ加入ヲ勸誘シ又ハ故ナク脫退ヲ拒ミタルモノ、但シ法令ニ依ル場合ハ此限リニアラス

一、故ナク他人ニ對シ土地ノ引上返還ヲ强要シ又ハ土地ノ賣買交換貸借及ヒソノ周旋ヲ妨害シ又ハセントシタルモノ

一、紛議に關し若しくは濫りに鐘鼓ヲ鳴ラシタルモノ

一、故ナク他人ノ業務ニ干涉シ又ハ紛議ニ干與シ若ハ煽動シタルモノ

一、紛議ニ關シ多數連行シテ交涉シ又之ヲ煽動シタルモノ

右各號ノ一ニ該當スルモノハ三十日未滿ノ拘留又ハ二十圓未滿ノ科料ニ處ス

之等の各號が岐阜縣警察犯處罰令に追加せられたのである。

之等の條項を見るとき如何に爲政者は社會秩序の保持に傾注してゐるかは伺はれる、然し乍ら根本を正さず現はれたる結果のみして嚴罰に處し以て思想なり社會秩序を保持せんとするは得して當を得たるものであるか。然も之等條項が果して公序良俗に反するや否やは時と場所との關係に適順し社會組織と時代思潮どを參酌して決定すべき問題であるが、果して公序良俗に反するや反やは法律問題であるが故に裁判に於て上告審議せられることになる。然し之は果して小作人のよくすべき所であるが。彼等自身を見る、彼等自身の周圍を見るとき之は甚だ疑ふべきものである。果して然らば小作人は光榮ある孤立として滿足することが出來るであらふか。

宜敷しく小作人組合を公認するは勿論小作料の如きも團體交涉の一手段を以て取扱はねばならない。工業勞働者に對しても團結を公認してゐない今日小作人組合の公認の如きは以ての外といふが如き考へに出でたのであるかも知れない。斯くの如きはよし在來のお氣に召さぬ恐怖病の結果としても決して時勢は之を容れべきものではない。

小作人の團結は宜敷しくないと幾ら當局が思ひ煩つた所で地主が依然不當利得を維持し或は土地の返還を命ずる傾向が著しくなればなるだけ小作人は自己防衞の必要上組合の下に團結するは必然の傾向といはねばならない之を何時までも阻止するは正しく時代錯誤の思想であり、最も危險なる思想と言はねばなるまい。

正直なプロレタリアが一致の行動に出でよりとするのは天の幸だ地の喜びだ。そして口口と勇氣それはお前達の持つべきものだ、そしてその行爲と血とは又お前達のものだ。

各地の農業勞働者よ！　帝國主義の暴虐に對する、特權階級に對する、そしてあらゆる社會的壓制に對するその戰ひに於て團結せよその戰ひに於ける團結は之に最も大なる期待と抱負とを與へるものである。――峰人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

臺灣への逃避者

賀川豐彥朝臣

三月のある日、神戸はわけて暖いのでフラ〱した上氣嫌で新川の貧民窟を訪れた。むさくろしい通り、狹い低い家並、塵埃は朦々と舞ひ上がり、煤煙は黑々となびく、貧民窟の安住者は春先きのシラミのやうにウヨウヨと地べたに蠢いて居る。淫賣常習のおかみさは日向ぼつこに餘念なく、小さな餓鬼は駄菓子の屋臺店に寄りたかつて惠れない珍味を羨望してゐる。この通りで第一等のブルジョアな構へ！　そこが死導者賀川豐彥先生の御邸宅だ。

表で婆さんが張物をして居る。中へ入ると富山さんが獨り居るきり。消毒の臭氣が激しく鼻孔を刺戟する。同行のT君が『隨分綺麗な家だな！　これだと僕のとこの方が南京蟲の巢窟だよ。』と嘆息をもらす。

『賀川君は？』と伺ひを立てると、『さあ十日過ぎに歸られると言ふのですが、何日ともお答へ致しかねます。』と言ふ挨拶だ。

ペカ彥先生は、近頃茶話會に講演會に演說會に於て、事每に勞働者からその八方美人振りを痛罵され、その賣名的衒學的を詰責され昔は一度演壇に立てば大向ふから必ず脫帽の聲が掛つたものを今は威信全く地に墜ちて僅かにその愚作『死線を越へて』で低級無智な女學生間にその存在を知られ、女人崇拜論を書いて僅かにその好色心を慰めて居る位である雄辯も災なるかな、今ではその口車にウカと乘つて食物にされる勞働者もなく、それどころか勞働者の自覺に連れて益々その無抵抗主義の立場が危くなるので、今は船路はるかな臺灣に生蠻傳導と言ふ看板をブラ下げて逃避中である。

眼指す敵將は逃亡中、何時もの癖が出てこの家を占領して仕舞はふ？　とも思つたが、昔謙信が信玄に米鹽を贈つた故事もあるものを、いくらアナスキ　の異名があるにしても女獨りの家を占領するのは餘りに大人氣ないと、〇〇の歌を吹鳴り乍ら引き上げた。（備前又二郎）

製鋼所より

重大問題といふと大人氣ない樣ですが、實は御存じの通り當地には日本製鋼所といふ工場があるのです。

その工場で名義が乙種の工業學校といふそれも實は町工場の徒弟養成の樣な調子のものがあるのです。

資本家は好名心に燃る若い同胞を無月謝で工業學校に入れ、その上秋田の鑛山學校に入れるといふ樣な調子で、御地方から多數の子弟を買入れ（丁度製絲工場の女工の樣な調子に）むづかしい規則を作つて（今の資本家閥家の法律の樣に）のがれ樣としてものがれない生活をさせてしこたま彼等の私腹をこやして居たのです。それまではいゝですが、今度（この工場は何と云つても軍器製造所なのでありますが）仕事がなくなつたものですから（仕事がないならないと云ふのなら可愛いゝ所もありますが）『君は工場勞働に適しない』單にそれだけの名で毎日の樣に工場に出て居る忠實な兄弟六人をやめらせたのです。そしてその兄弟には一文の金もくれなく、一枚の着物をもあたへなかつたのです。

かうした事實のあつたために、徒弟は皆んな生活の不安上から今資本家にぶつつかつて居るので、その方面に毎日の樣に行つて居るのです、（徒弟の中に三人の同志が居ますから）警察問題には未だならないですが、これは今年度のこの地方の第一回の勞働運動として力を入れて居るのです、三月頃には第二回が起るはずです。それも製鋼所の僻よう問題で。その方面には私の畑とちがひますが、東京から千枚ばかりの宣傳びらが來て居るといふ話で警官先生目を白黑して居る次第です。

參考まで徒弟の生活を御知らせしますよ。

一、徒弟はすべて工場內にある寄宿舍にあり日曜日以外に外出すること出來ない。

二生活はすべて軍隊式
三給料は四月三圓五拾錢以上十圓以下
四、勞働時間は十時間——晝夜は指導者によりて命令さす(工場に居る時間は十二時間)
五、娯樂は體育的方面のみ。
其他
もう一つの問題は來月の五日の日に御地にもありませうが普選デイをするのですが。私達がその後を借りて思想問題研究會大會をやるつもりです。公會堂で、
今からカンケンの御連中、太い綱をなつて居ることでせう。このどさくさまぎれに□□□□□□□□□を□□□□□れば幸ひ思ひます。それから加藤一夫さんからも後として戴いてることをよろこんで居ます。

シベリア通信

暫く失禮しましたお變りありませんでしたか、
近頃はメッキリ暖かくなりました、演習をやつても、寒く感ずる事はなくなつた位いです體の慣れたわけもありませうか、でも日中は零下三、四度で夜間でも三十度になる事は稀れです。
東部兵營と西部兵營と二つあります、私は西部兵營に居ります私等の居るすぐ近所にカッペリ軍が居ります、こいつらは全く、でたらめです。
市内は隨分立派な建物がありますが盛んな時代を思ひやられます。當市に居る日本女は皆○○と云ふてもいい位いたくさん居るんですその外朝鮮人にロスキーです。
檢査の報告を我々に教へるなんて內地では夢にも見られないです○○○の○子病氣だから皆んな用心しろなんて云ふんだから、日本町に娘子軍の根據地あるんです、たいした勢力なものです。(內生)

秋田通信

野口久太君と呼ぶ病身の一青年が最近收監された。豫審中であるために、次の理由は一切不明である。或る人によると秋田土崎間の電車に革命歌を撒布したとも言ひ、また種蒔きの發賣禁止號を撒布したとも傳へらるゝ。とにかく內容に渡る一切の發表は嚴禁になつてゐるとかで、それに違反した廉とかにて秋田の二大新聞が罰金になつたそうだ。しかし東京種蒔き社の反抗の檄文はいち早く秋田新聞に載つたが、それと同時に布施山崎兩辨護士の聲援は地方の人心に多大の刺戟を與へてゐる。この事件で各町村に於て家宅搜索を受けた者は大分澤山ある。理由もない事件を徒らに地方官憲が大けさに取扱つて殆んど無抵抗な地方の人心を高壓することは明かに人權を蹂躪するといふものだとの批難か可なり多いやうだ。
詳はしいことは後便として、一寸申上げるが、この事件から革命歌が急に流行出したことは事實だ。誰れか革命歌を送つたのか知らぬが、この頃では風呂屋の中でも、はては新地通ひのひやかし連にも大分この歌を聞く。かうなるとどつちが種を蒔いたのやら。詳はしいことはあとで、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人欄

裏面

磯川潤子

實行のみ最後の審判者であり、實行のみがその人自身です。總て熱心な誠實ある人には實行が初めに來るのです。理論は實行の過程を理智の前に報告する文書に過ぎないものとなりませう。文字は將棊の駒の如きものであり、言葉はピヤノのキイの如きものです。それは取扱ふものに何等の熱心も必然さもない時でも、よく並べられ快き音色を出すことが出來るものです。

奴隷は、單に文字が見事に羅列され音色が快く連續するのを、その儘眞實であると思つて居た時がありました。彼にとつては、ただ表面に表現された明るさや技巧さへあれば、それが直ぐ善く見え正しく優れて見えるのでした。その頃彼は文字や言葉が眼の前で跳る程、生彩あり眞實なものに見えたのです。

けれどもこの文字や言葉や、單に表面一重の美しさや眞實らしさに對する無智な過信は必然的に自身に報ひて來ました。彼は冷靜に明瞭に自分の内に目覺めて來た理智に反逆され裏切られました。『醜き動機に依りて成されたる美しさ』を、表面一重の裏面に、明るい光の反面に、彼は醜さ以上の恥づべく憎むべく憤るべきものをはつきり見たのです。

文字や言葉は一つの遊戲です。實行のみ何時の場合でも、眞實を語るものです。

彼等が如何に狡猾な手段で僞り、好餌を提げて弱點に乘じようとしても、一度目覺めた彼の眼を欺くことは出來ません。今は總てが露はに透明に、現實の相その儘狡猾さが見えて來ます。美しさを裝ふ文字、優しい言葉、快き感激の言葉、それ等の總ては虚構です。それ等は今は反て憎惡を增さしめるのみです實行のみ最後の審判者として殘るのです。

あなた達、支配の慾望に血肥りになつて居るものの私達に對する、親切を裝ふ言葉、優しき感傷の文字、盲目を掠めて手に入れようとして御機嫌をとる場合のお上品さで言葉や文字の上の感傷に溺れさせる、ツルゲーネフの『ルーヂン』は、最早私達にとつては倦怠であり、嫌厭であり、反感です。徒らに、性を賣り物にする哀訴や、愛といふ羊頭を掲げて狗肉を賣る、感傷的人道主義の充滿した雰圍氣には飽きました。私達には最早『ルーヂン』は無用です。あなた達がその『ルーヂン』型の頭や胸の中の遊戲を繰り返したいなら、それを歡迎する他の仲間へ行きなさい。

『善くあるといふだけではまだ眞實ではない善をするといふこと――さうだ、これが人生だ。』私達も『ヘレン』の如く斯く言ふのです。私達の求めるものは『ルーヂン』の言葉や、感傷の文字ではありません。總ての文字や言葉を超えて自己の力に依つて驀進する鋼鐵の『イツサアロフ』でなくてはなりません。私達は繰り返します『自己の力で實行するもののみ本當の人生を生きるのだ』と。そして『それのみが最後の審判者であり勝利者である』と

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

生活

小作人の生活

秋田　天川佐吉郎

小作人の生活！　さうだ、勘定して見れや自分乍ら驚く。

ウチでは六反歩小作して居るが三人の地主へ納める小作米は各計八石何斗で其他苗代代種子代など差引くと殘りが三石五斗になるかならずだ。五人の家族が此米を食んだから半年も覺束ない。あと半年はムシロやワラヂを造つて生きるより道がない。それだつて家内總出で朝五時から夜は九時十時まで働いても一圓五十錢なるかならず。どうして子供の學校だの生活の向上だの立派なことを考へて居る餘裕があらうか。貧苦に追ひかけられ日稼ぎの仕事のみに氣を奮はれて、地主が、お上が、商人がどんな手段を縱にしようと、氣が付いたところでどうする術も知らず。恨み、泣き、自棄に過して來た、若い者には復讐の熱情が湧つて來た。誰れがいゝか惡いゝか不思議の數々を擧げて「復讐」の理由を諸君の批判に待たう。

一、收獲季に入るとお上では、乾燥用材は何々にせ、幾日前に刈つてはならぬ、幾日間田甫に稻を置かねばならぬ幾日前に扱いた米は檢査せぬとのお達し。

小作人は用材を買ふ金や堆肥小屋を建てる費用はどこから盜んで來たらいゝだらう。幾日稻を田甫に置いても雨を降らせないこと、盜まれない工夫はお上でどうして出來るだらう。半年も一升買ひをしてる百姓が自分の作つた米を一日も早く食ひたいのがどうして罰せられるだらう。不思議の一つ。

一、地主や米商人の倉庫には入浸りの檢査員が小作人の檢査場には十日に一遍しか廻らぬ。小作人の檢査場で（三度も突き戻して一月かゝつておまけの果てが）不合格の米が商人の倉庫で精米すると二等米になつて縣外に飛ぶ不思議の一つ

一、不合格米は地主が受取らぬ。罰金やれば受取る。運賃の半額は賞與にくれるが次の年まで渡さず。いつの間にか差引かれて何もない。不思議の一つ

一、四斗五合たつぷり容れた筈の合格米が。地主の庫から商人の庫へ。商人の庫から汽車に積むと四斗しかないといふ。不思議の一つ

一、地主へは低頭平身成るべく高く〳〵と賣つて貰ふ商人が大事變でも起きて泣き〳〵飯米を賣る小百姓の米は踏に踏み、恩に恩を重ねて澁々買つてくれる。それでも金を見てほつとするのは不思議の一つ

一、農産品評會や多收獲競技會やで賞與をくれる。名譽におだてられ、手數や費用を惜まず。收獲を上げると、いつの間にか田得米の標準になつて居る不思議の一つ

一、一生懸命の手入れで地質をよくして增收が目に見えてやれ〳〵と思ふと、田地の等級が上り、他の地主へ轉賣され同時に小作米がどんと賦課される。それに文句をいひば田を取上げられる。だから地質を惡くして收獲を減らして惡質の米を造るのが、當然か不當然か不思議の一つ

擧げて見れば限りのない不思議の魔の手は眞綿に針を包んで小作人を攻め付けて居る。な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぜ一思ひに惨虐を殺し方をしないか。どうせ嬲殺す氣なら、男らしく一思ひに殺してくれと興奮することがある。

地主が惡いのか商人が惡いのか、檢査の鬼が惡いのか、六ケ敷しい理屈は俺には解らない。然し「人間が生きんが爲めの米を造つて居る」僕達が生きんが爲めにどんな事にもぐり込むとも斷じて惡くはない。

思へば思ふ程一年の勞苦が厭だ。働けば働く程生血を吸はれるのを考へるとぞつとするあの吹雪の中、炎暑の田の中、誰の爲めに泥に漬からなければならぬかを思ふと默つて居られぬ。俺の地方で酒呑みの多いのはよく解る。地主やお上みが本氣に百姓の爲めにやつてくれることが、百姓でない地主の爲めにのみなるし小作人を虐げることばかりだ。「土地解放」「低利資金融通」「信用組合」何だかんだともうお調子に乘るもんか蛇の生殺しの手は喰はんぞ。考へるのも面倒だ。書けない筆をたど〳〵と書くのもいやだ。復讐。さうだ、今に見ろ!

此間親父に小作證券に何を書いてあるかと聞いたら、「そんなこと知らぬ」といつた。證券に捺印したら最後地主に命を預けたものと親父は觀念してるといつた。俺はそんなことで默つてるもんか。書き損なつた振りしてやつと手に入れたちやんと印刷になつて居る小作證券は次の通り厭でも參考に讀んで下さい

田地小作證券

一 田一反二畝十五歩、〇〇〇郡〇〇村字〇〇〇〇番

一 田、二反三畝十五歩　同　郡同村字〇〇〇〇番

一 田合計反別三反六畝歩

此小作米一ケ年玄米五石四升

但シ目方一俵ニ付十六貫三百目桝四斗五升入

右田地貴殿御所有ノ所今般小作致候ニ就テハ左ノ事項契約致候處確實也

一 小作期限ハ(中略)滿二十年間トス(以下略)

一 小作米ハ毎年十一月二十日限リ御指定ノ俵裝ニヨリ御指定ノ場所マデ自費ニテ御届ケ桝立ノ上御渡可申候若シ米質粗惡ト御認定ノ場合ハ良米ト交換可致候但シ期限前ト雖債權ヲ害スルノ恐レアリト御認メノ際ハ何時ニテモ其請求ニ可應候事

一 不可抗力ニ依ル凶作ノ場合ト雖モ前項ノ小作米ハ支拂可致候事

一 右田地ノ使用收益ニ必要ナル行爲及ビ費用ハ公課金ヲ除ク外總テ小作人ニ於テ負擔可致候但シ田地ハ貴殿ノ承諾ヲ得ズシテ耕作外ノ目的ニ使用セス(下略)

一 前各項ノ行爲ヲ履行セサル場合ハ其不履行以テ直チニ解約トシ催告ヲ要セス前記ノ田地ニ小作致サセ候共無異議候但シ既ニ施シタル種肥勞力料ハ拙者ノ損失ト可致候事

一 貴殿ノ御都合ニ依ル貸借解約ノ場合ハ其請求ニ應シ何時ニテモ無異議田地返戻可致候事

一 小作人ハ勿論連帶保證人ハ連帶且ツ不可分ニ其義務ヲ履行可致候事

一 債權ノ讓渡ハ小作人並ニ連帶保證人ニ於テ豫諾候事爲後日小作證券依テ如件

年　月　日

小作人　氏　名

連帶保證人　氏　名

債權者(地主)氏　名　殿

大同洋行に就て

聽くところに依れば太平洋行の洋書取次は丸善あたりで十圓位の本か三圓ばがりで手に入るとのたことです。それは營利を目的とする仲介業者の手を經ないばかりでなく、社會的使命として殆ど實費だけで取次をするからだと言へます種蒔き社は讀者の爲めに大同洋行と連絡をはかるつもりですから充分に利用して頂きたく思ひます。

聳人

平和の國日本

菅永十二

大御所公は小田原の波に
とこしなへに眠り
早稻田侯は大風呂敷をかついて
十万億土を遊說しつゝ
あるんである。
しかし此の國は平和た。

達磨首相は手も足も出さずに
目ばかりぱちつかせ、
金壺目總裁は野黨を率ひて
桃源に惰眠し、
陣笠醜惡共は睡氣覺しに
なぐり合を始め、
傍聽人は餘興として
靑大將を議場に拋り込み、
一方には蒙古王が關羽髯を撫して
土瓶酒のメートルを擧けてゐる。
おゝ日比谷の春の長閑さ！

普通選擧がどうした？
社會問題がどうした？
勞働問題がどうした？
そんな七面倒なものは
貧民王豐彥に委せておけ！
そしたら彼が何度も何度も
死線とやら越えて、
四万圓の原稿料の種にするさ！

ブルジョアー理鄕卿日本よ！
平和の國日本よ
此の國で毛唐の考ふべきことを
考ふるのは間違つたことだ。
プロレタリアートなどに
生れて來たお前達が
そもそも始めつから
間違つてゐたのだ。
默つて控へろ！
お前達は馬の樣に働きさへすれば
それで好いのだ！

此所は世界唯一の
有難い國柄だぞ！
妙な眞似はよして吳れ。
こゝな不屆者奴が！

(十一・三・三)

その筋

登志男

その筋よりの禁止命令にも二月號だけは會はずに發刊出來た事を何よりと御祝ひする。種蒔く人の蒔いた或る種はかくして發芽するに違ひない。ポツ〳〵種が芽を出した反面にその筋の大發展もまたすさまじいものだ。活動を見に行つてもすぐその筋が一隅に頑

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

張られてゐるのを見る、而も「その筋の御命令により喫煙云云」なんて云ふ仰々しさを見せられる、民衆をさうさう侮蔑するにも程がある。癪にさわる。

「その筋」なんて口にすると神經がピリリとする。反抗してやりたい氣がする。全く此頃の世の中だ、普選上程日の有様は如何だ。どうせ低腦乍りの代議士位だから縛られるのは尤もの事だが、溫良な民衆がドシ／＼檢束されて貨物自動車にぶちこむのだがら。本當に可愛想だ、宿なしのプロレタリーは午前二時に浮浪の廉でふんづかまる。一定住所なしの遊蕩兒ブルヂアジーは午前二時に自動車の中で可弱き憐れな職業婦人に戯れてゐる。而して彼には何の束縛もない。

その筋の派出所はプロレタリアートのために設けられてゐる。しかし吾々は所謂その筋なんかと爭ひ度くない。又爭ふ程野暮じやない。吾々はそんなものに目をくるるよりも更に高級な或るものを强望する。それがために は〇〇の力あり〇〇のほとばしりがある。議會政治に飽き／＼した吾々は議會は政友會の議員のみで滿たしたい。

それの方が手近い問題だ、眞理の前の勝利は何人も否定することの出來ない事實である

近い内に別荘行

て る

Sは長からぬ中に別莊行きになりませう。私も少し快くなりましたら上京したいと樂しみにゐます。次に勝手なもうし分ですが雜誌に婦人欄を特に設けてありますのは一面には女の分が限られてゐるやうで男の方と一樣に活動したい（あらゆる意味に於きまして）

お國もこれから

羅 狭 仁

高橋さんの失言（？）でお國の議會は又もめてゐますね。私は一番高橋さんが好きですよ何です一體あの態は？　貴族院は橫暴ですねブルジョアに私は同情します。政府も意久地ありませんね　イヤあれが手かも知れませんがね。今度はプロレタリアが引張凧でせうナブルジョアの權威に關しますよ。あんな貴族院を許すのは。ソロ／＼、ブルジョアジーとアリスクラシーとの鞘當が露骨になるでせう。もう遠からずでせう、ブルジョアー萬歲は。併しプロレタリアートも困りますよ。忠ならんと欲すれば孝ならずでね。時に何とかと云ふ取締案はその後どうなりましたかね、臭い手を引込めるんぢやないですかね。お國のブルジョアとしちや一寸拙かつたですからナ。

一體お國のブルジョアジーはお人善しすぎますよ。慾がなさすぎますよ。フセンでも出してやれば一寸天下泰平ぢやありませんか。過ぎた事は仕方ありませんがね。まアせいぜい卍巴でチャン／＼バラ／＼でもおやりなさい。其の中にや「彌生節句血染雪」でチョン／＼でせう。何にせい、お國もこれからですよ。

哀れな散歩者

芝 涙 花

おや冷てえ！　又降り出しやあがつたのか
みぞれが頰にあたる
ぼろになつた外套に
おや、もうこんなに白くつもつた。
此處は一つたい何處だ、
仁丹の廣告のイルミネーションが
己の心の樣にまつくら闇の中で
赤くなつたり、靑くなつたりする
どこだつていゝやそんなことより
早く何か食べてえな
一品料理の安バタの匂ひが
鼻先にぶらつき出した。
蓄音機がなり出しやがつた
いやに色ぽい唄だな
呑氣に酒なんぞ飲んでゐやがる
已は未だ今日一日何にものどへ通しやあしねへ
これから前だつてわかつたものぢあねへ
グウ、グウ腹がなるグーウ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

それでも死ぬのがいやなんだから不思議だ
死んだら、きたねへむくろの上に
みぞれが、うんとつもるだろう。
そしなら誰がないてくれる
鳥がなく、笑はせやがんねへ。
ヘツヘツヘツヘツ
國のおつかあがなくだらう
已にそんなものがあるけえ
こん畜生！ 何だ、犬か。
已は何にも持つちあゐねへよ
だから、そんなにほへるなてことよ。
已だつて、おまへ以上にたべてへんだぜ
野良犬なんて、つまらねへな
ほら、あそこに肉屋があらあ
赤い肉がつる下つてゐるだらう
あの顔を見ろ
あんなに脂ら切つてゐらあ
骨でも、もらつてしやぶつてゐねへな。
畜生行きあがる。
尾なんぞ振りやがつて
うらやましかねへぞ
だが何か食べてへな。
あー 交番か
霧の中に赤い電燈がぼやけてゐる
おまわりがぼんやり突立つてゐる
變な目付で見るない。
ヤブぢあるまいし。
わつちあー こう見へても
うろんな者ぢあねへんだぜ
寒いな、足は棒の様だ
何だかぞく〳〵して來た
目が廻る
ウーム苦しい
とてもあるけねべ。
ウーム
…………
…………
…………
…………
おや、
ありがてへ
おてんとう様の光が
この光ばかりあ平等だ。

（完）

お巡りさんいろ〳〵　　榮城

佛教信者であれば女をたらしても惡るく思はないお巡りさんがザラにゐるから困ります、聖書と種蒔く人を二つ並べて置けば安心するお巡りさんが八方美人に取扱ひ安價な同情で書いた賀川豐彦の死線を越えてを讀んでゐればいゝと思つてゐる世の中ですかなあ

一つの恐怖　　泉　風子

體が顫え、身の毛がよだつ。
俺にもし兵籍があつたらと思ふ時に。
しかし、幸ひに
俺は、殆ど全て關係がない。
そう思ふとまた、俺は幸福を感じないわけにゆかない。
けれど
千万の大軍が押迫つた光景を想像して見るがよい。
濃霧の如うな砲煙が吹き流された迹を想ふて見るがよい。
敵も味方も死の山、血の洪水に、死者は吹き曝らされてゐるのではないか。
戰捷が何んだ。祝福が何んだ。
そうした時、我らの裏長屋、屋根裏を覗いて見よ。
勝ち軍に、參謀本部で祝盃を擧げてる時、戰死者の家では凶報に嘆きつゞけてゐる時だ。
名譽の戰死者？ それは機關銃で射ち殺された者の感じ事ではない。
恐ろしい散彈が破裂した時、誰れが名譽を念ふぞ。
四肢が飛散した死骸が、何んの勳章を欲し

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

からうぞ。

幾千万の大軍が押寄せた光景を想像せよ。その時、軍隊と云ふ列は、總崩れに、人と波に、世界人が切り合ふのだ。

敵も、味方も、

背後からは指揮刀で追ひ立てられ、前面には砲彈が飛ぶ。

兄弟達よ。

君の名は兵籍にあるのだ！

君の名が兵籍に繋がれてなかつたら、君は巨彈の威力を知り、戰爭の恐ろしさを知るだらう。

それは、敵も、味方もが、何者かにケシ懸けられてゐる事を發見するに到るだらう。

もつと、はつきり云へば

君が、君の運命的に無自覺な事を、名譽と云ふ重りを着けられて、恐怖心を旨い具合ひにそゝのかされてゐる事を知るに到るだらう。

——をはり

默つてはゐない

たけし生

「種まく人」三月號の出版を心から御待ちします。

官權が此處にも侵入して居る事は、全く憤慨に堪えません。あらゆる壓迫を抑制して、私達に、新らしい感銘を植えつけて下さい。

私達は心から「種まく人」及其他の諸誌の大きく伸びてゆくことを祈つて居るのであります愚にもつかない小心者との爭は馬鹿らしいとは思つて居ますが、それでも、小さい反抗に燃ゆる時は、私達だつて默つては居ないのです。

「種蒔き社」の人々よ、大に伸びて下さい。益々丈夫に。

男も女もない

潤子

二月號をいただきました。種々の困難に遭ひながらも雄々しい健闘を續けられることは實にうれしく存じます。殊に「種蒔く人」の私達婦人に對する態度が「僕達の主張する運動には男も女もない筈だ」といふところにあるのは、極端の性のみ强調されて居る私達には一層力强いことです。

血潮が湧立つ

芳田誠一

資本家と云ふ惡魔が
俺達兄弟の血と汗との結晶たる
生產を横取りにしてしまふ
俺は默まつて其れを見て居る事は出來ない
俺の血潮が湧き立つ
俺ば飛び出しそうして生命の
續く限り異大な眞理を武器として
兄弟の爲めに同士と共に闘ふ

赤血溢る青年達よ

岡本玉穗

赤血溢るゝ青年達よ、生命のある人間よ
奮へ、奮へ、——
剛健な、不撓不屈の精神の鶴嘴で
自由に歩める樣に
道を開拓せよ
人生の爲に、幾億の同抱のために
幸福を阻止する邪魔な凸凹を
切り拂へ、飽迄も突破つて進め
幸福な地點へ、自由な曠野へ、
突貫、突貫、突貫……
太陽を見よ
平等に大自然を照すあの光り
行爲を太陽の精神に習へ、幾億の同胞よ
おお、光や空氣は平等であるに
なぜ人間にはこうした階級があるか
强く生きることを忘れずに生きよ
そして、幸福な道を開拓せよ
理想に主義に結束して進め
幾億万の若き人々よ——。

二月二十三日

强請觀劇

木本龍

今日の帝劇や明治座の芝居は、あまりに高

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

價で、吾々一般の民衆は、眞に日本傳來の藝術を玩賞することが出來ないで、てんで藝術眼も糸瓜もない小數のブルジョアー共に蹂躪されてゐるのは頗る遺憾に堪へない。然し現代の劇場は眞の劇場でなくして、成金輩か贅澤あまつた體屈しのぎの場所、虚榮女の扮裝競技場、莫連者の岡惚れ會場だと言へば、寧ろ諦めがつくばかりでなく、却つて安價に這入れないのを有難く思ふ。

たゞいくら諦めても觀念し切れないのは、吾々が日常の生活に於て、高い血税を拂つて一向見度くもない、低級な奇術や立廻り芝居の見物を強請されてゐることである。

『砂利喰ひガス吸ひの大奇術』や、サーベルを無暗と振り廻す「危險思想取締劇」から、「日比谷座」の闘牛さては滿鐵や鑛山を種に使つた曲藝と、數へみればよくも集めたものだと感心する位、馬鹿々々しい狂言の數をそろへて、川原芝居を打つて御座る。

どんな芝居を打たうとそれは「役者」共の御勝手で、吾々はそれに付いて兎角を云はないが、無理にその觀劇を――しかも高い料金を取つて、――強ゆる事だけは止して欲しい。然しお役に忠實な役者は仲々許して呉れさうもない。

汗の膏を絞つてやつと得たお金を、其麼つまらぬ見物料に拂ふのはいやだと云へば勿論「國賊」、見物に飽いて、一寸欠伸をしてさへ「危險人物」と云ふ正札をつけられて、暗い所へブチ込まれる。近頃更らに嚴しくやらうと御相談中とのか噂も聞く。

吾々見物人は、止むを得ず、從順に見物してゐるもの〻、恁麼苦しい觀劇は何處の世にあらうぞ。今は自然の勢として大團圓の一時も早く來る事を願はないでは居られない。而して纔に彼等役者が、血眼になればなる程、それが近づいて來るのを知つて、をとなしく見物してゐるまでである。――一、九二三、二

赤い表紙

受験虫

廢刊になつたかと心配して居りました發行されて何よりです。

どんな壓迫があらうと廢刊なさらぬやう願ひます、あの〇〇〇〇共は此の燃ゆる血で〇〇してやりませう。

店頭を埋めるものはメソ〳〵のブル雜誌である時「前衛」や貴誌の「赤」い表紙を見ることは吾々青年にとつて悦ばしいことです。

虚僞の周圍に向つて

惣一

私は種蒔く人を睥睨無自覺な虚僞の周圍に向つて堪へず反逆して居ます。私にとつては隨分骨の折れることです▢今では同志も同來それによつて少しでも慰められて居ます。

靜動――

社會主義研究――ケレンスキー革命とは云へ三月十五日を記憶されたことは嬉しい。

批評――復活號である。獨逸の新社會主義運動、階級闘爭と知識階級の苦悶がその主なる讀物である。芝三田一ノ二六其社

無産階級――創刊號である。この雜誌の主張は題名がそれを説明してゐる。市外代々幡ケ谷四〇其社

勞働運動――そこら中の雜誌を束にしてもこの雜誌一つに敵はない。

前衛――次號に內容が光つて來る、前へ！前へ！だ。

勞働者――筆禍事件にも拘らず益々奮闘して居る。

シムーン――社會主義的評論や創作を滿載して居る生生とした雜誌だ、小石川宮下町六九、其社

自由人――三月號は農村勞働者に訴へて居る

自由――創作本位で日本文壇に挑戦する雜誌

文化――隨分な苦勞でした四月は御ゆつくり保養なさい。

新組織――四方注意を受けた同誌は三月號發賣禁止

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

『社會主義研究』（月一回）
一部　三十錢　一年前金三圓三十錢
東京大森入新井町
社會主義研究社
振替東京三四一九一

『種蒔く人』（世界主義文藝雜誌）
（月一回）一部四十錢　郵送料一錢
東京市京橋區弓町十六番地
種蒔き社
電話京橋六一二三
振替口座東京五九三八七

『勞働者』（月一回）
一部　五錢　一年郵税共七十錢
東京巣鴨
勞働社
振替東京五六〇二七

『勞働同盟』（月一回）
一部　定價三十錢
東京市芝區三田四國町芝園橋
日本勞働總同盟本部

『勞働週報』（月一回）
一部　二十錢　一年前金　三圓
東京市京橋區銀座二ノ六
勞働週報社
電話京橋五六三一番
振替東京二七七五二番

『小作人』（月一回）
一部　三錢
埼玉縣熊谷町石原
小作人社

『勞働運動』（月一回）
一部　十錢　一年前金一圓廿錢
東京市本郷區駒込片町一五
勞働運動社
振替東京五一三六〇

『前衛』（月一回）
一部　三十錢　一年　三圓廿錢
東京大森入新井町
前衛社
振替東京五四七七

『無產階級』（社會主義評論雜誌）（月一回）
一部　三十錢
東京市外代々幡町幡ケ谷四〇
無產階級社

『批評』（社會評論雜誌）（月一回）
定價　三十錢
東京市芝區三田一ノ二六
批評社
振替東京四五三四六

『自由人』（評論雜誌）
（月一回）　定價　五錢
相州小田原町十字町
自由人聯盟

『自由』（文藝雜誌）
（月一回）　定價　五十錢
東京市外大久保百人町九四
自由社

『シムーン』（文藝評論雜誌）
（月一回）　四十錢
東京市小石川區宮下町六九
シムーン社

『社會思想』（月一回）
一部　廿錢　一年　二圓三十錢
東京市京橋區月島東河岸通九ノ三
社會思想社

『社會問題研究』（月一回）
一部送料共　二十錢
京都
弘文堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ロマン・ロラン作　野尻清彦譯

クルランボオ

四六版四一七頁
價一圓九十錢
送料十二錢

本書はロラン氏が一九一七年の作であつて、『戰爭中に於ける自由なる良心を持てるもの〻』記錄であり、『素直で動き易く、決斷のない、弱い氣象であるが、眞面目で眞理を探究する情熱に溢ふる〻一人の人間が、模索しつ〻踏み迷ふ內面的錯綜を敍述しやうとしたものである。個人精神の魔醉せる現代の社會に本書の投入せられたことは、爆彈的効果を擧げ得るものと信ずる。飜譯は固より原文直接、作者獨自の文脈を傳え得て遺憾がない。

東京市牛込區神樂町二丁目　叢文閣　振替東京四二八八九

□當面の問題（時評）……………堺利彦
□特殊民權利の宣言……………山川均
□光を揭ぐるもの（小說）……………荒畑寒村
□婦人と無產階級革命……………山川菊榮
□勞農ロシアの新人……………柴耕介

無產階級機關
社會評論雜誌

Teh Vanguarq

前衛

萬國の無產階級よ
團結せよ！

Proletarians of all the countrieo Unite!

□勞農ロシアの新聞……………田所照明
□小泉信三氏の抗議……………北原龍雄
□カウツキーの獨裁論……………西雅雄
□ニコライ・レーニン……………上田茂樹
□一水兵の手記より……………前田一等水兵
□インタナショナル・ノート……………前衛同人

挿繪――レーニン。正直に見へるが。パラパノワ
過激社會主義取締法實施。まだ眠つてゐるか。

同志諸君の後援の下に『前衛』を創刊しました。何卒御援助と御愛讀の程を願ひます。本誌は勞働問題、農村問題一般社會問題は固より政治、經濟、文藝、哲學に至るまで苟も資本主義の世界に起る一切の現象を捉えて、徹底した無產階級の立場から評し、解剖し、摘剔し、糾彈し、無產階級軍の前衛となつて、常に其思想と、要求と、感情と、憧憬とを代表する反響板たらんことを期するものであります。殊に世界各國に於ける無產階級運動の形勢は、力めて詳細な報道を致します。且つ每號數頁の寫眞や深刻痛快な漫畫を挿入しすべての點に於て確かに舊型を脫して居ると信じます。何卒本誌を御後援下さる意味にて、貴下の御購讀と新讀者の御勸誘をお願ひ致します。

四月號

一部　卅五錢
半年分　二圓

東京大森新井宿
振替東京五四七七
前衛社

前衛パンフレツト

（1）普選と革命戰術……………山川均述
（2）露國共產黨……………山川均述

以下續刊

一部五錢、送料二錢、五十部、二圓

種蒔き社責任推選外國書籍購入御案内

一、當行では目下ストックは一切置きません御申込みに依り直接御注文の書籍雜誌を御取寄せ致すのです。
二、後段切取線の申込書に依り御望みの書籍、雜誌を申込まれるのです。
三、御注文の書籍・雜誌は其の著者及び書名を是非必要と致しますが、發行所、年號迄も分れば更に結構です。
四、代金は前金で御願ひするのを原則と致します。
　但し代金不明のものは申込書の概算金を申受け着荷後清算致します。
五、其の代價は毎日の正金銀行の建相場で換算し合理的代金を申受けます。
六、御注文は申込者御壹名毎に之れを書留にして發送致します。
七、當書籍部より外國書店に注文したる書類のコツピー(寫)を番號順で御申込者に送附して其の確實なる事を證明致します。
　但し申込金額五圓以下は一名毎に銀行爲替を組む事不能故、他の五圓以下の申込者と共同送金の方法を採ります。
八、以上の通信費の爲めに申込總額百分の六及び書留郵税を申受けます。
九、御申込みの書籍は先方より小包郵便で發送しますから最も早い時日で御手許に入ります。
十、英、佛、獨、伊、各國の御注文は往復約三ケ月程で到着致します。
　但し米國は約二ケ月半ほどかゝります。
十一、御注文の日から六ケ月を得て書籍不着の場合には御拂込金額御返濟致します。

大正十一年三月

東京、日本橋・加島銀行ビルデング三階九號

大同洋行書籍部

電話本局三八七三番
振替東京二三九六五番

責任者　石本惠吉

創刊號

無産階級

四月一日發行

初號目次

河上博士の二つの準備……矢津九郎
資本と剩餘價値……エンゲルス
ロシア革命と小ブルジョア……トロツキイ
勞働運動の變遷……ホルナア
佛國階級鬪爭……マルクス

一部三十錢

東京市外代々幡町幡ヶ谷四〇
無産階級社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

博覽會と三越

博覽會のお土産品は
三越の東京名物賣場

三越の六階に東京名物賣場があります博覽會は見る處、三越は東京土産を買ふ處で御座います、それに三越の四月の賣出しは、東京の花と稱せられ、品が良く價が廉いので東京名物になつて居ります

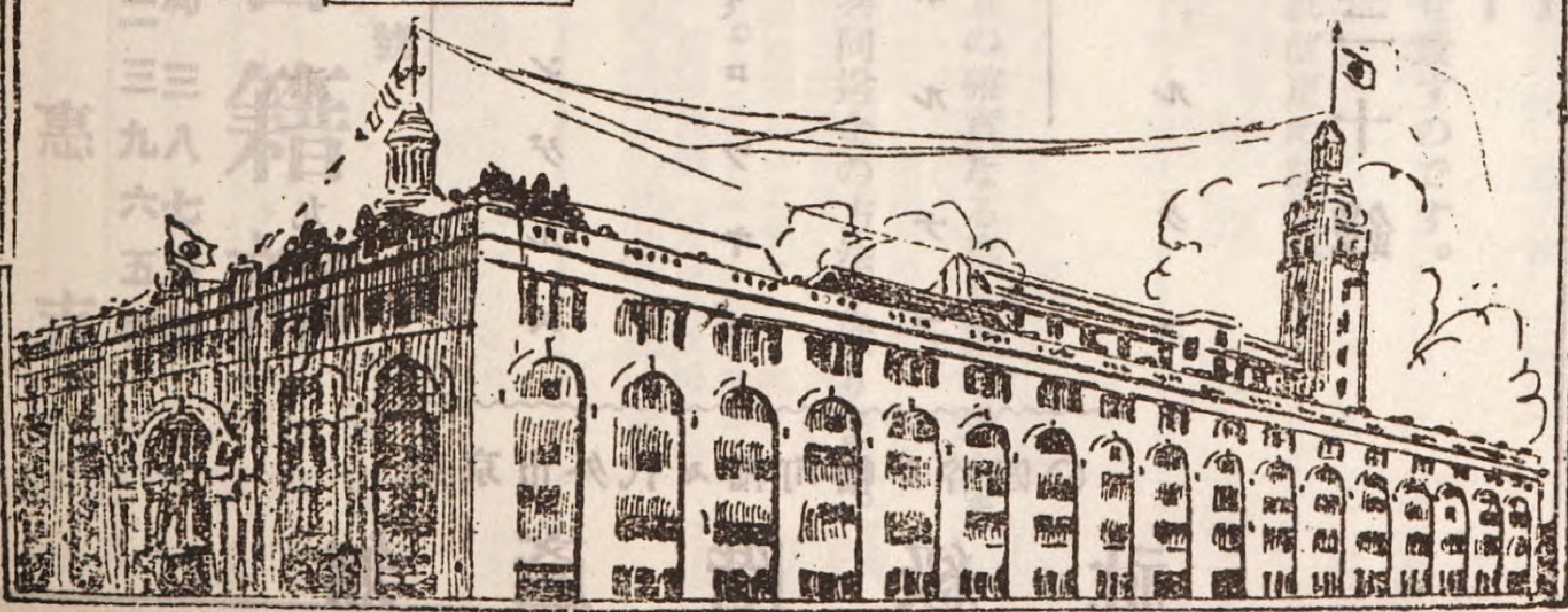
•三越の四月•

- ◆寄裂見切反物賣出し（一日より）
- ◆佛國現代繪畫展覽會（十三日より）
- ◆美術院試作展覽會（三日まで）
- ◆五月人形陳列（十三日より）
- ◆洋傘陳列（一日より）
- ◆ネルセル陳列（十六日より）
- ◆單帶陳列（十一日より）
- ◆時好會主催雨毛織物陳列會（廿日より）
- ◆單羽織陳列（十一日より）
- ◆日本間用洋式家具陳列（廿一日より）

定休日……十日……二十五日……

東京市
駿河町

三越呉服店



種蒔き社第一回講習會

會員募集

◇講　師◇

インタアナショナル研究……小牧近江
資本論研究……青野末吉
唯物史觀……平林初之輔
勞働運動……小泉鐵
エスペラント……佐々木孝丸
社會主義美學……村松正俊
世期末の美術……松本弘二

種蒔き社は、左の期日と規定により、第一回講習會を開くことにした。
進んで入會せられんことを希望す。

期日　四月十日より六日間
　　　毎夜六時より九時迄
會場
會費　金貳圓、申込と共に入金
人員　五十名限り
申込は出來るだけ至急に願ふ。

種蒔き社

前號目次

非愛國主義者の山縣公觀(題言)……………
無產階級としての未來主義の意義(社論)……
無日(小說)……………平戶廉吉
白き指よ、强き瞳よ(詩)……荻原恭次郎
夜の水車(小說)……………金子洋文
初七日(小說)……………松本弘二
たゝかひのうた(詩)……………村中亮
戲曲の創造性と價値(評論)……佐々木孝丸
生きんとする本能(評論)……………渡邊順三
□批評及び世界其他各欄

編輯後記

何よりも先づお詫しなければならぬのは、小川未明氏が本月號の爲めに、寄せる短篇を寄稿して下すつたのを、編輯の手違ひから掲載することが出來なかつたことだ。然し來月のメーデ!號には必ず載せる。それと同時に我國に於ける第三回メーデー紀念號として、諸方面から寄稿のメーデーに關する記事を滿載して花々しい戰鬪振りを諸君の御手許まで、お贈りする。それと同時に秋田縣では『種蒔く人』の讀者達の上に、橫暴な官憲の手が伸びて來たことを諸君に御報告しなければならぬ『種蒔く人』の讀者であると云ふ理由だけで、數名の者は家宅搜査を受け、其内の或一人は理由もなくして、既に收監されたと云ふ報知を受けた。無智なる白禍政策は既に吾々の上に襲來したのだ。それは本號の講演會記事を讀んで貰つて判然する。

入　券に對し既に會費拂込の方には、本社は何時でも入場劵と引換に御返金します。

定價　一部四拾錢□半年前金貳圓四拾錢□一年前金四圓六拾錢御註文はすべて前金のこと□代金の領收は雜誌發送を以てする□送料內國壹錢外國四錢

廣告　廣告及廣告料については直接本社宛問合せを乞ふ

宛先　寄贈、通信、購讀申込及び送金、其他本誌に關する一切の御用向書籍雜誌等の寄贈は凡て「種蒔き社」宛

締切　每月五日

大正十一年四月三日印刷納本
大正十一年四月五日發行

東京市赤坂區青山北町一丁目八番地
發行人編輯人
印刷人　近江谷駉

東京市神田區今小川路一ノ一
印刷所　同工社

東京市京橋區弓町十六番地
發行所　種蒔き社
振替口座東京五九三八七

大賣捌　東京堂　上田屋　北隆館
至誠堂　東海道

本號四十錢

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は何時でも入場券と引換に御返金します

至誠堂　東海道

種蒔く人

第二年第二巻第七號

（大正十年十二月一日第三種郵便物認可）

大正十一年四月三日印刷納本
大正十一年四月五日發行

本號四十錢

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA